

# とあるゲール将校の日記

破戒僧

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、世界が迎えたかもしれない、また別な『終末』のお話。

ゲルマニア帝国において、国家の将来を担う俊英として期待される少年がいた。

そんな彼が前線指揮官を務め、勝利を収めた戦場で、彼の駐屯地に捕虜として担ぎ込まれてきたのは……今や国家の仇敵として知られる、ちいさな赤い髪の『魔女』だった。

これは、動乱の時代に紛れ込んだ1人の少年が、史実とは異なる『終末』を導き出すまでの記録。

H29 3/28、本編完結しました。現在、不定期で後日談を更新中です。

アニメを見て衝動的に書きたくなって、書きたいように書いただけの拙作ですが、よろしければどうぞ見てみてください。感想などいただけると嬉しいですよ。



フイーネ視点

278

1 4 | 1 後日談 ロツテ (前編)

297

1 4 | 2 後日談 ロツテ (後編)

308

1 5 後日談 ゾフイー

324



## 01 ゲールの少年将校

○月×日

月並みな言い方だが、今日から日記をつけてみることにした。

少しの時間でさつとやれるし、1日に起こったことを整理できるので、前線——特に自分のデスクを持っている士官クラス——にはよくある趣味だそうだ。

まあ、三日坊主は前世からだし、ここは忙しい時はすごく忙しい職場なので、ペースなんて安定しないだろうし、そもそもいつまで続くやらわからないけど。

……この仕事、手紙だと、色々と規則があつてまともにかけることなんて少ないけれど……まあ、これは日記だし、いいだろう。

後から見返す時のために、今現在の僕の状況をきちんと記録しておくのも悪くない。何か言われたら……まあ、たかが日記帳1冊。燃やしてしまえばそれまでだ。まあ、別に他人に見せることもないものだし……そもそも、読まれても大丈夫なように、わざわざ前世の言語で書いてるんだから、そんな心配も無用だろうけど。

まず最初に……僕には、前世の記憶がある。

いわゆる、転生ってやつだと思う。ネット小説は好きで、よく読んでた。

夢がある話だよ。志半ばで死んだ若者……だったり、おっさんだったり、病人だったりゲームマードったりするわけだけど……それが異世界で、前世の記憶を維持したまま生まれ変わって、その際に獲得したチート能力で大暴れ……うん、実に痛快だ。

まあ……自分がそれと同じような状況下に置かれるなんてのはさすがに思いもしなかったけど。

まあ、もうすでに転生して17年。この身はもう17歳だ。

今更そこんとこを嘆いたり考えたりする気もない。

現実には現実として、だいぶ前に受け入れた。ここは異世界で、僕は転生したんだと。

そして転生したこの世界、この国は……前世の地球のヨーロッパのある国、ある時代に似ていた。

……っていうか、思いっきり西暦が採用されてた。1922年生まれだつてさ、僕。

そして地図。まんま、前世の地球のそれと同じ世界地図である。

そしてここは……あー、地理苦手なんだよな。えつと……ドイツだよね多分？

異世界転生とかだと、よくあるパターンは、中世レベルの文明に剣と魔法の世界、つて感じだと思うんだけど、ここは違うようだ。当然、魔法なんてものもないし。

ぶっちゃけ、異世界じゃなくてタイムスリップした地球かと思っただくらいだ。

まあ、国名が全然違うし、名前を知ってる世界史の偉人もほとんど出てこないから、



『異世界なんだろうな』って、最終的には結論付けたけど。

で、この時代のドイツ——名前違うが——といえば軍国主義。

しかも、幸か不幸か僕が生まれた家は軍閥の名門らしい。

そのまま、お坊ちやまとして大切に育てられた僕は、入学可能な年齢になると同時に士官学校に入学させられ、スパルタ教育に苦しみつつも、前世もちの特権と言ってもいい学習能力や未来知識を武器にして奮戦。どうにか好成績で士官学校を卒業し、そのまま軍に入った。

そして数年——今に至る。

コツコツ努力し、実績を積み重ね、この若さで大尉の地位をいただけるまでになった。

半年前、その知らせをよこした時には、家の連中も皆して喜んでくれたっけ。

父もほめてくれた。

古くからこの国を支えてきた名門であるこの家の跡継ぎにふさわしい大活躍だといや、前代未聞の出世スピードで、これならゆくゆくは将官、あるいは極官すら目指せる逸材だと。

……で、だ。

その父が死んだと、1か月前に連絡が入った。

しかし、今は戦争中である。悲しんでいる暇はなかった。

……その戦争が、わが祖国たる『ゲルマニア帝国』が、その野心から各国に吹っかけまくっているものだとしてもだ。

国軍に籍を置く1人の軍人として、僕は立ちほだかる敵を排除する義務がある。

正にあれだ、『戦わなければ生き残れない』。

戦争やつてるんだから、敵を倒さなければ、倒れるのは自分たちなのである。

まず手始めに、常勝無敗を誇っていた帝国軍の戦歴に傷をつけた国に、

そんな力があるとは全く思われていなかった、とある小さな国に、

……父の命を奪った戦いの相手である……『エイルシュタット公国』に、

上層部からの指令により、僕は、参謀兼前線指揮官として赴任することになった。

……それは別に何の問題もないし、準備もしてあるんだけど……1つ、気になることがある。

かの戦線における、我が国の敗北。それについて報告してきた資料の中……目を通すうち、何度も目に飛び込んできた、ある単語。

……『魔女』……って何？

×月△日

日記を書き始めてから、今日で3か月が経過したわけだけでも。

……随分前に僕、『剣と魔法』じゃないタイプの異世界だ、って言った気がする。

けどごめん、あれ訂正だわ。この世界……魔法、あったわ。

と言っても、最近出てきたというか、別に汎用性ある感じで世間一般に広まってるようなものじゃないというか……説明難しいな。

要するに、今までそんなもんは存在しないと思われていて、近代兵器最強、銃火器戦車戦闘機他どんどん作って撃ちまくれー的な、普通に地球と同じような戦争形態だったんだよ。

けど、そんな中突然、存在すらしらないと思われていた『魔法』なるものが現れた。というか、それを使える人……『魔女』がいたんだ。

それも、今まさに戦争してる、『エイルシュタット公国』に。

数か月前に突如現れ、戦場で無双し始めたのである。

その活躍によって、帝国負け続け。公国含め、周辺『ざまあ』で大喜び。

その勢いに乗って、帝国つえー、もうだめだー、って感じだった皆さんも息を吹き返して……反乱増えるわ、抵抗強まるわ、戦線厳しくなるわで大変である。

何回か僕も、やばそうな戦場に助っ人指揮官として派遣されたし。

いやまあでも、そら混乱するわ……近代兵器で戦ってたら、いきなりファンタジーが

現れたんだもんな。状況把握するだけでも大変だ。

で、その『魔女』……イゼツタっていう名前らしいんだけど……どうも、僕が当初考えてたような『魔法少女』って感じじゃないみたいだった。

いや、まだ若くて、少女と言っていていい年齢で、かわいい……って部分はあってるんだけど。

ただ、僕にとって魔法少女って……世代のせいもあるだろうけど、不思議パワーで飛んだり、魔力で弾丸を作って打ち出したり、それを大口徑にして砲撃っていうか『魔砲少女』したり、胡散臭いマスケット小動物がいたり……って感じなんだけど、

こっちの魔女さんは……対戦車ライフルに乗って空を飛んだり、擲弾やランスを浮かばせてぶつけて攻撃したり、盾にしたり、戦車を投げ飛ばしたり……といった感じらしい。

……使ってる武器が武器だからってのもあるだろうけど、やたら物騒だな。

それに、炎とか氷を出して攻撃、みたいなこともやってないみたいだし……ライフルに乗って飛ぶってのも含めて、むしろ『超能力』、テレキネシス系の力って感じが……。

まあいい。形はどうあれ、既存の物理法則では考えられない、まさしく『魔法』としか言いようがない現象が、その女の子によって起こされているのも事実。

起こっているからには、それを理解するために勉強しなきゃいけない。それが参謀の

役目だ。

そういうわけでここんとこ、片っ端から情報・資料を集めて、この『魔女』さんを理解する勉強を続けていた。その力、性質、規模、弱点、e t c……

その過程で、何か帝国がもともとその『魔女』について研究を進めてたとか、色々な事実を知ることになったり……そこから派生した新たな学問の探求に一部協力することになったりしたんだけど……まあ、そのへんはまた今度。

今はまず、『魔女』さんについての理解を深めることだ。できる限り。

彼女を……ひいては、彼女を擁する『エイルシユタット』に、勝つために。

×月●日

……死ぬかと思った。

今日、件の『魔女』に会った。一瞬だけだけど。

視察に行った先の物資集積地に、地元の義勇兵たちと一緒に現れて……持参した爆弾やら何やらを撃ちまくって荒らしに荒らして、物資を焼いて……焼け残った物資は、一緒に来た義勇兵たちが根こそぎ奪い去っていった。

で、その最中に……高台で指揮官をやった僕のところ、またがってた対戦車ライフルから打ち出した大口径の弾丸が飛んできて……あれ絶対狙ってやったよな。まあ、

指揮官をつぶして敵を丸ごと混乱させるのはよくある戦術だけど……自分がやられると怖いわ。

幸い弾は外れたけど、着弾の衝撃で碎けて飛び散った、周囲の機材その他の金属の破片に……左目をやられた。

外科手術が間に合つて、金属片とか異物は摘出に成功した。

……一緒に、眼球も摘出する羽目になつたけど。今は、義眼が入っている。

医者にも、もつと早く来てくれれば違つたかもしれない、つて怒られたけど、無理だろ。ぐつさり刺さつてたんだし。それに……指揮がまだ終わつてないのに、持ち場を離れられなかつたし。

あそこで僕が逃げてたら、もつと多く死人が出てたはずだ。

ともあれ、失つたものは仕方がない。

あるもの、残つたものを生かしてこの先やっていくことにしようと思う。

……そのためにも、もつと勉強だな。

※月○日

必要なことは、一通り勉強できた。

ケガも治り——片目がないので、『治った』とは微妙に言いづらいんだけども——今ま

で通り前線で部隊の指揮を、後方に行けば参謀として作戦立案その他を行いつつ……今僕は、対エイルシュタットの決戦に向けた準備を進めている。

というのも……帝国の中枢で進められていた、魔女関係のプロジェクトがいよいよ動き出したのである。

驚いたことに、その内容は……エイルシュタットの伝説にある『白き魔女』のクロールンを作って魔法を使わせ、戦わせるというものだった。

クロールンあんのか、この時代に。すごいぜ帝国の研究機関。

しかもその過程で、全くの未知のエネルギーまで発見し、軍事利用のための研究を進めてたりする。僕もそれには一枚かんでいて……それゆえに、魔法やばいな、と思わざるを得ない状況だ。

詳しく書くと長く、ややこしくなるんで、詳細は省くけど。

けどひとまずは、そのクロールン魔女……ゾフィーという名前らしいその子に、エイルシュタットの魔女・イゼッタを倒させるつもりのようなのだ。

本人とも協力するってことで話はあるようだ。あくまで目的のために、って感じだけだ。

しかも何か、『魔石』とかいうチートアイテムもついてきてるし……おまけに当の本人がやる気満々だ。よほどエイルシュタットに恨みがあるらしく……帝国軍に協力して

るのも、そのエイルシユタツトを苦しめて、痛めつけて滅ぼすためだとか。

……僕も帝国の国民だから、『白き魔女』の物語は知ってる。

公国には伝わっていないらしい、もう1つの結末についても……だ。もしアレが本当なら、そりやまあ……恨むだろ。憎むだろ。

……ま、味方である分には頼もしい。

彼女の協力があれば……そして、『魔石』の力を使えば、魔女同士の戦いでもほぼ間違いないく勝てるだろう。

けど、僕は僕で準備は間違いないく進めよう。ほとんどが、あるいは全部が無駄になるとしても。

彼女……ゾフィーに、全部をゆだねて任せてしまうつもりはない。僕は僕で……1人の人間として、人間の力で進められる手を、あくまでも用意しておくべきだ。

魔女は別としても……その後の首都および主要都市侵攻、占領統治、武装勢力の解体に物資の応酬、情報の解析、要人の確保……やることはいくらでもあるんだ。

それらを僕は、ゾフィーに頼らず、あくまで軍の手によってやる。やらなければならぬ。

……他ならぬエイルシユタツトは、魔女・イゼツタに依存しすぎてしまったゆえに、これから負けるのだから。



※月※日

作戦成功。

首都ランツブルック陥落。敵対空戦力を含む武装施設の無力化に成功。

こちらの損害は軽微。敵の物資および戦闘設備各種の大規模鹵獲に成功。捕虜も多数。

エイルシュタットの主要な官僚各位の捕獲に成功。ただし、大公フィーネ嬢ほか腹心数名には、秘密の通路か何かを使つて逃げられた模様。搜索は困難。

戦闘終了後は、迅速に処理を進めることができたこともあり、特に大きな混乱もなく占領支配を開始。僕はそのこの実質的な責任者に、兼務ではあるが就任することになった。

……勝利の報告を父の墓前に持つて帰りがかったんだけど、しばらく無理そうだな。

そして、一番肝心なところ……ゼレン回廊における陽動を兼ねた戦闘において、魔女ゾフィーとこちらの、というか僕直属の魔法工作兵団の連携により、魔女イゼッタの撃破・捕縛に成功。

ゾフィーは『私一人でもできたわよ』って不満そうだけど。

そして、そのゾフィーによって、空中戦の最中から撃破直後に至るまで、さんざんに

痛めつけられた魔女イゼツタは、見るも無残というか、痛々しい姿になって吊るされている。ゾフィーが浮かせて使つてる武器である大剣（みたいなもの）に、体を鎖で縛り上げられて。

手首から足元に至るまで鎖が巻き付き、食い込み、服もボロボロなので……必然的に露出も激しくなり、あちこち見えてしまっている。

まあ、ポロリしたりモザイクがかかるようなところは、幸い無事だけど。

そんな彼女を、広報担当の部局の連中が、高解像度のカメラを使つてパシャパシャ撮りまくっている。打ちのめされ、縛り上げられて、傷だらけになって気絶して吊るされている少女を。

痛々しくもあり……しかし、どこか同時に淫靡で、蟲惑的にも見えるその姿は……その場にいるほとんどの兵の目をくぎ付けにしていた。僕も含めて、だけど。

こんな小さな少女が、今まで帝国を苦しめてたのか、という感慨。

こいつのせいで、多くの戦友が殺された、という憎悪。

さあ、捕らえたこいつをどうしてやろうか、という情欲。

その他もろもろ……色んな感情が、無力な少女に向けられている。

そしてこの姿は……明日の新聞の一面で、国内外に報じられることになるだろう。

敗北し、囚われ、全てを失つて……そしてこれから、さらに色々と失うことになる、哀

れな魔女の姿が……大勢の人の目にさらされるだろう。さらされ続けるだろう。

帝国のプロパガンダ作戦のために。エイルシユタツトの力が、権威が、最早地に落ちたことを示し、この戦争の勢いを再び帝国にもっていくために。

あとはこれに加えて……今、本国で開発が進められてる兵器、そして僕が研究している『アレ』と『アレ』が完成すれば……もはや、この欧州に、いや、地球上に、帝国の敵はいなくなる。

果たしてこの少女は……それまで生きていられるのやら。

ま、生きていられたとしても……無事じゃないだろうなあ。

彼女……可愛いし。

……ってどうか、結構な量の血があちこちから流れているので、さっさと運んで治療した方がよさそうだな。かなり高いところから、全身に打撲もあるだろうし。

うん、あれだ。痛々しくも、服が破れてたりとか鎖で吊るされてたりとかしてて、何かりヨナ的なエロさがあるなって感じてたりしたけど……やっぱそれ以上に痛々しいな。

うん、一通り撮ったら、引き上げさせて、さっさと運ぼう。

一応彼女は、基本生け捕りで話が進んでいるんだ。最終的に処刑される（かもしれない）としても、今死なれるのはまずい。

……それはそれとして、だ。

僕の予想だと、そろそろ彼女を奪還するために、忠誠心豊かなエイルシユタツトの兵士たちが、決死の特攻を仕掛けてくると思うんだけど……さて（日記はここで途切れている）

☆☆☆

「失礼します。少佐殿、ご報告が」

「どうした？　ここから南西の森林地帯の中に浸透中の伏兵でも見つかったかい？　そ

れとも、ランツブルック南西部の戦線が不自然に崩れたかな？」

「両方です。……さすがですね、報告もなしにわかるのですか」

「もしやるとしたら、突破して攻めて来れるのなんてそこらへんくらいだからね。というか、わざとそこに隙間ができるように、ちよつとわかりにくくした上で布陣させたんだだけ」

「わざと、わかりにくく……ですか？」

「あまりに露骨だと罠だつてわかっちゃうからね。敵方に多少なり頭の切れる奴がいれ

ば、ここに気づく。気づかなければ、僕らが安全に護送できるだけの話だ。そして、南西部の戦線については……敗走を装った陽動だろう。こちらは陣形を動かさず、敵が動いた結果逆に手薄になったところから先に兵を送れ。多分そっちに大公殿下御一行様が出して。あと、そこにいた戦闘機が、奪還のためにいくらかこつちに来るかもしれない。対空重機関銃と擲弾射出機を用意。哨戒機も飛ばして、こつちに被害が出る距離に近づかれる前に撃ち落とせ」

「了解しました、サンジエルマン少佐殿！ 失礼いたします！」

ン。  
世界に紛れ込んだ異物……ゲルマニア帝国軍少佐、ソロモン・フォン・サンジエルマン。

戦いに敗れ、捕らわれた英雄……エイルシユタット公国の白き魔女・イゼツタ。

交わることはないはずだった2人が出会う時、歴史は狂いだし、誰も知らない結末へ向けて流れていく……。

## 02 墜ちた魔女の悲劇

※月?日

捕虜というのは、一応は国際条約に基づいて手厚く扱われる……ということになってるんだけど、いかんせん戦争というのは、そういうモラルを突っぱねて存在している。そしてそれは、彼女……魔女イゼツタも例外ではない。

敵国の重要（どころではない）人物を捕虜にしたわけだから、そりゃ尋問やら拷問やら始まるうってもんである。

色々な、有益な情報を持っている可能性も高い立場だ。軍関係・政治関係はもちろん……彼女自身がその力の強大さを証明している『魔女』関連についても。

まあ、魔女については、帝国は帝国で色々研究進めてるんだけども。

女だからと、子供だからと容赦はされまい。痛めつけるか、辱めるか……あるいは、僕なんかじゃ及びもつかないであろう方法で、口を割るまで責め苦が続くのだ。

哀れに思わないわけじゃないけど……これも戦争だ。

彼女だって、帝国の兵士やら士官やら、結構な数殺してるし、戦車や戦闘機を遠慮な

くぶつ壊し、空母だつて沈めた。……あ、あれは元々威力偵察のための囷なんだっけか。そんな彼女は、立派な戦争の当事者だ。

情けをかけるなんてことはできないだろう……散つていった兵士たちに申し訳が立たない。

……ほかならぬ僕の父も、この子に殺されたんだ。

眼帯で覆っている僕の左目も、この子に永遠に光を奪われたんだ。

それは確かなんだけど……いざこうして、無防備に眠っている彼女を前にすると、憎しみとか恨みとか、そういう感情が出てこない。

……恨んでないわけじゃない。怒つてないわけじゃない。

……ただ、実感がわかないんだろうな。

目の前でこんな風に眠っているこのかわいい女の子が、帝国の戦線に大ダメージを与え続けた『魔女』であり……父と、僕の左目の仇だつて、信じられてないんだ。

もうちよつと経つて、彼女が敵だつて僕が心の底から認識できたら、その時は……憎むようになるのかもしれない。

けど今は、普通にかわいくて、穏やかに眠っていて……まるで、普通の一般人みたいだ。

いや、そうなのかもしれない。彼女は案外……元々、『魔法が使えるだけの一般人』で、

戦争とか政治とか、そういう物騒な領域には無縁の、一人の女の子だったのかも。

それが……何で戦争なんかに出てきたのかは……わかんないけど。

プロパガンダ映像を見る限り、何か姫様と特別に仲がいい、彼女と共にある魔女、つてのが宣伝文句みたいだけ……案外、ホントにあの姫様の伝手だったり？

……それらについても、聞き出せばわかることではあるけども……今日はさすがに無理だ。

というか、しばらく無理な気がする。

理由は簡単。負傷してボロボロだからだ。

捕獲作戦の時……ゾフィーがズタボロにしたからな……。

でっかい剣みたいな金属の塊ぶついたり、至近距離で機雷爆発させたり、魔石でレイラインの魔力消失させて墜落させたり、鎖で縛って吊るして締め上げて、さらにその上打ち据えたり踏んづけたり蹴っ飛ばしたりひっぱりたいたり……

その結果が、ベッドの上に寝ているこの姿だ。

身にまとっているのは、病人着一枚。それ以外は、下着すら身に着けていない。

そしてその体を……おびただしい量の包帯が覆っていて、点滴の管も何本もつながれていて、所々にギプスや、縫合の跡も見受けられる。

弱弱しい呼吸。顔色は蒼白。換えても換えても、包帯には血がにじむ。



かろうじて胸が上下に動いていることだけが、彼女の確かな生存を教えてくれる。普通なら、捕虜として投獄しておく身分だけでも……この見た目からわかる通り、それ以上に医療的処置の必要性が認められたため、医務室のベッドの上に寝かせている。

ゾフィーの死体蹴りにも等しい暴行のおかげで、イゼツタは、全身打撲や骨折で、身動き一つできないレベルの負傷。しかも、傷や後遺症が残りかねないほどの傷も少ない。

特に足が酷い。筋肉はもちろん、骨、間接、神経に至るまでボロボロだ。

どうやら、ライフルにまたがって飛んでいるところから落下させられた時、変な姿勢で落ちたのが原因の1つらしい。そこからさらに色々された結果……治療には極めて長い期間を要する上、完全には歩行能力は元には戻らない傷になってしまった。

最早彼女は、健全な1人の人間としての生活を取り戻すことはできないだろう……治療しても、元の肉体に戻ることは到底無理だろう……

……普通なら。

それじゃ困る。彼女にはまだ、色々やってもらおうことがあるし、聞きたいこともあ

る。

だから……治してあげよう。帝国の……いや、僕の作り出した、新技術で。  
……それが、彼女にとってプラスになる、とは言えないんだけど。

※月……日

『魔女』の力を研究した結果として発展し、様々な不可能が可能になった。

僕もそれに一枚かんでいる……というか、思いつきり中核の一員として研究している。

ベルクマン少佐……あ、今は中佐だっけ。彼が確か、戦闘分野への技術利用を進めていたのに対して、僕のは医療とか資源とか、そのあたりへの利用に特化した分野の研究だった。

無理やり区分して名前を付けるとすれば……『錬金術』だろうか。

そうなると僕は、それを操る『錬金術師』……胡散臭いことこの上ないネーミングだけれども、学術分野の1つとして、インチキでもなんでもない革新的な効果をはじき出すことには成功している。

その証明として……『錬金術』を応用して治療を行ったイゼツタの体は、見る見るうちに傷をいやし、力を取り戻してきている。

出血は止まり、傷はふさがり、骨はつながりひびが消え……表面上は、主だった傷のほとんどが癒えたきれいな肌を取り戻すまでになっている。

まだ中の方はボロボロだけど……それも数日中には治つてるだろう。

包帯もだいぶとれて、血のにじまない、ちゃんとした肌色の部分がほとんどを占めるようになった。大怪我人だったのが、怪我人、くらいにまではランクダウンしたかも。

この分なら、今日明日中に目も覚めるだろう。

寝息の感じも、昨日より安らかな感じで眠ることができているようで何よりだ。

……このせつかく治つた体が……また数日後には傷だらけになるのかと思うと、ちよつとやるせないというか……複雑な気分になる。

目の前のこの少女が、僕ら帝国軍の宿敵だとわかつていてもだ。

……ゾフィーがうるさいんだよ。尋問するから、さつきと引き渡せつて。

※月&日

今日、イゼツタが目を覚ました。

正確には、昨日からうすぼんやりと意識はあつたらしい。しかし、頭に霧がかかったような感じになって……起き上がることはできなかつたそうだ。

でもその状態で一眠りして、今日になって、ようやくはつきり目覚められたと。

当然ながら、現状がよくわかっていないみたいだったので……簡単にだが説明してあげた。

ゼレン回廊における戦闘で、彼女……イゼツタは撃墜、我々帝国軍の捕虜となつてゐること。

イゼツタは生死が危ぶまれるほどの大怪我だったので、一応こちらで治療したこと。それは大体終わつていて、放つておいても回復するくらいには治し終えていること。君の敗北からすでに数日経つており、すでに陥落したランツブルックを含め、今やエイルシュタット公国のほとんどが占領下にあること。

あとついでに、僕の自己紹介も遅ればせながら。ソロモン・フォン・サンジェルマン少佐。エイルシュタットの占領統治の、暫定的な責任者である、よろしく、と。

イゼツタはベッドの上で、冷や汗を流して顔を青くしながら話を聞いていた。話の1つ1つがあまりにも衝撃的で、かみ砕いて飲み込むのに苦労していたようだ。

それでも、どうにか自分の中で認識して、理解したところで……逆にこちらに尋ねてきた。

姫様——フィーネ大公はどうなったのか、と。

そして、自分はこれからどうなるのか、と。

どちらの問いにも、あまりいい答えは期待できないであろうことはわかつていたんだ

ろう。動揺や恐怖を、必死で抑え込んで……でも、抑えきれなくて、わずかに体を震わせながらの質問だった。

そしてそれに僕が答えかねていることで、さらに不安感が増したらしいけど……僕が口を開く前に、最悪のインターセプトが入った。

無断で部屋に入ってきたゾフィーが、彼女を見て蒼白になるイゼツタを見てご満悦の表情を浮かべながら、あっさりとはらしてくれやがったのである。

姫様については、まだ見つかってないけど、時間の問題だ、と。

そして彼女……イゼツタについては、これから厳しい尋問にかけられることになる——というか、自分がそれを担当するから、覚悟して待っている。

撃墜して鎖でつるし上げた時よりも痛くて、苦しくて、惨い目にあわせてやる、と。言いたいこと全部言つてゾフィーは去り、後には……この世の終わりのような顔をしたイゼツタと、僕だけが残された。

イゼツタは僕に、今のゾフィーの言葉を、一部でも撤回してほしそうな、すぎるような目を向けて来たけど……僕には、黙って首を横に振るくらいのことしかできなかつた。

彼女には……明日から、つらい日々が待っている。

※月Ω日

いよいよもって、彼女……イゼツタへの『尋問』が始まった。

僕の『錬金術』によって、ひとまず日常生活を送れる程度にまで体が回復したイゼツタは、病室から捕虜収容用の牢屋へ移され、そこで早速……ゾフィーによる責め苦が始まった。

というか、始まっていた。

朝起きたら、僕の了解なく勝手にゾフィーがそれらを進めていて……驚いて僕がその地下牢へ行ったら、すでに彼女が『尋問』を始めていたところだった。

病人着から、粗末な囚人服に着替えさせられたイゼツタは……彼女が捕らえられたあの日と同じように、両手を上に、手首を合わせるような形で鎖で締め上げられて……天井からつるされるようにして立たされていた。

そして、粗末なれども一応新品の服は、すでにボロボロ、ズタズタになっていて……破れたその隙間から、血の滲んだミミズ腫れの痛々しい赤色が見える。

一応、顔にそういった跡はないみたいだけど……それ以外、腕、足、胴体その他には、まんべんなくそんな跡が。しかも、顔は顔で……平手で張られたんだろうか、微妙に赤くなってる。

そのイゼツタの体に、ゾフィーは手にした鞭を振るう。

パアン！ と乾いた音とともに、革製のそれがイゼツタの色白の肌を無慈悲に打ちつける。

その威力に、痛みに大きく震え、口からは悲鳴に近い苦悶の声。

耐えがたいほどの痛みなのだろう……目からは涙が零れ落ち、一拍遅れて、汗がどつと噴き出していた。それでも、滑って抜けることのないほどにきつく手首は縛られているようだった。

牢に入ってきた僕に気づいたイゼツタは、反射的にだろう、助けを求めるような視線を僕によこしてきて……しかしその直後、再び振るわれるゾフィーの鞭。

先程、太ももとらえたそれは、今度はわき腹にあたり……イゼツタの息が詰まる。

二度、三度とそれを繰り返したところで……イゼツタの股間のあたりから、しよわわ……と、水音が聞こえた。

涙を流し、失禁までしてがくがくと震えるイゼツタを見て、ゾフィーは楽しそうにしていた。

その笑みを見て、がくがくと震え、その身を縛る鎖をがちやがちやと鳴らすイゼツタ。

このまま発狂か精神崩壊するんじゃないかっていうレベルだったので、僕の方からゾフィーにそれとなく、やりすぎないように注意したものの——っていうか、『尋問』って言いつつ痛めつけるばかりで何も質問とかしてないぞこいつ——しかしゾフィーは

聞く耳持っていない感じ。

何、また僕が治せばいいだろうって？　こないだの墜落の傷を治したみたいに？　時間もかけず、後遺症もなく治せるだろうって？

そりやできるけど、それを必要とするレベルに痛めつける前提で話すな。

あくまでこの場での『尋問』の目的は、必要な情報を聞き出すための……え、皇帝陛下も黙認してくださってる？　こいつ、臣従してるわけでもないのにこういう時だけ……

いや、まあ僕だって別にあのおっさんに忠誠誓ってるわけでもないけどさ。

言ってみれば、代々仕えてきた我が生家への義理立てと、将来楽できるだけの実績を積むために、エリートコースに乗る目的で従軍してるだけ、みたいなもんだし。

結局、しばらくやめる気なさそうだったので……せめてというか、僕も牢に残って、ゾフィーがやりすぎないように監視させてもらって……このままじゃ『尋問』じゃないので、質問はこっちで口頭でさせてもらった。

答えは返ってこなかったけど。意志の強い子だな。

……口を割らなければ、それを格好の理由にしたゾフィーが過熱するのはわかってたろうに。

結局、適当なところで、治療中なのを理由にドクターストップをかけ、その日の尋問



は終わりにさせた。途中で止められてやや不機嫌そうだったけど、ある程度発散してすつきりしたような表情のゾフィーが出てったのを見送ってから……彼女の身柄をベッドに移し、治療に移る。

士官学校の特設クラスで講習受けて合格して、軍医師免許持ってるんでね、僕。

服を脱がせて裸にする。……若い女の子の裸体も、こうまでびつしり痛々しいミミズば腫れだらけになってちや、欲情つてもんも浮かんでこないな。

あらかじめ持つてきておいた軟膏薬を、全身の傷に塗り込むようにしていくと……見る見るうちに、傷が治っていく。

これには彼女も驚いていたけど……すぐに、拷問で体力を失ってた上、精神的にも限界だったんだろう。軟膏薬のおかげで、じんわりと熱を帯びて温まってきたであろう体が、その熱をちやうど心地よく感じたのか……とろんとした目になって、そのまま寝てしまった。

僕は気にせず、彼女の全身にきっちり薬を塗りこみ、さらに治療のための栄養分の補給のための注射を打ってやり、持つてきていた予備の囚人服を着せて、牢屋を後にした。牢番の奴に、今日はもう誰も中に入れるな、と厳命して。

……これが明日からもずっと続くのかな……敵なのはわかるけど、気が滅入りそう

※月\$日

昨日とほぼ同じ。

朝起きる。

やはり何の断りもなく拷問が始まっている。

牢屋に急行。

今日もまた、ゾフィーはイゼツタを、完全にサンドバッグ代わりにしている。

もうすでに、昨日と同じようにイゼツタの体は傷だらけになって……太ももの内側と床の水跡を見るに、また失禁もあったようだ。

そして、それと同じくらいはつきり、涙の後も……だから、痛々しいって。

それでも、同室にいる書記官——ゾフィーが来たら、どうせ無理だから止めなくてもいいから、記録はとっておけ、ってことで昨日のうちに配置しておいた——の、記録ノートがほぼ白紙であるところを見ると、どうやら今日もまだ何もしやべっていないらしい。

というかそもそもゾフィーが、尋問だ拷問だと言いつつ、何も喋らす気がなかったりする。

だって、尋問に関係あるなしに関わらず、何か言うたびに『誰が喋っていいといった

かしら!』つって鞭をパァンと……じゃ、どうすりやいいんだよつて話になるよね。

しかし……話によれば、彼女つてまだ15歳なんだよね? それなのに、こんな目にあつても口を割らない忠誠心……かもしくは、友情か……。

どつちにせよ……見上げたもんだ。

もし僕が同じ目にあつたとしたら……あそこまで黙つてる自信はないな。

僕はMではないので、普通に痛いのは嫌だし。さつさとしゃべっちゃいそうさ。

……いや、彼女も別にMじゃないだろうけど。痛そうにはしてるから。

今日は昨日のに加えて、ゾフィーが鎖で締め付ける拷問までやつたもんだから……跡が残るところか、締め付けや鎖が噛んで裂傷ができたり、骨がきしんだりして……

鞭の打撃によつて出る、絹を裂くような悲鳴と違つて、喉の奥から絞り出されるようなかすれた悲鳴。こっちはこっちで痛々しいのなんのつて……

僕にリヨナ趣味はあんまりない——皆無とは言わないが——ので、できれば目を反らしたい。

けどそうすると、なんかゾフィーが調子に乗りそうなので、耐える。鉄面皮死守。

……普通、父の仇+自分の左目の仇が目の前で痛い目にあつてるんだから、喜んでよさそうな場面なのかもしれないけど……そんな気にならないよ、やっぱり。

可愛い女の子……しかも性格が悪いわけでもなく、普通にいい娘が、いじめられてん

だから。

それに……今だからいうけど、父は父で、結構裏で色々やってたつばいしな……。

代々帝国に使える古参の家だし、軍部に影響力も強いから重用されてたといつても、その過程で敵を作らなかつたわけじゃないようだし。その地位に調子に乗って、暗愚とは言わないまでも、バカやつてた部分はかなりあるみたいだった。

それに、僕が従軍中に色々と仕上げた新兵器・新戦術理論なんかも、実家の手柄にして、本来なら僕に入るはずの儲けをピンハネ……というかほぼ横取りしてたりもしたし。

ナチュラルに、子の手柄はすなわち家の手柄、とか言ってたな。まあ、別にいいけど。恵まれた環境で、何不自由なく育ててもらったことに、恩は感じている。だから、その分の義理立てとして僕は家に、ひいては帝国に仕えているのであって、別に『愛国心』とかはない。

現代日本で育つた記憶のある僕にとって、どっちかっていうと祖国はあの日本だし、そもそも今日び『愛国心』で……ぶつちやけ僕の中で、旧時代のカビの生えた考え方だと思つてたり。

何を信条として、何のために力を尽くすかなんて、人それぞれだろう。

それを、この国に生まれたからこの国のために生き、この国のために死ぬことこそ誓

れ……なんて考え方は、少なくとも僕には、到底理解できるものではない。

別に、そう考える人を否定する気はないが、だからといってそれを他人に押し付けたら、そうしない人を糾弾するようなやり方は嫌いだ。愛国心がないってことは、愛国心を持たれないような国の状態があるっていう見方もできるだろうに、そこに目を向けないで何をバカな。

……そこ行くと、エイルシュタット公国は、よく考えると……すごいな、と思う。

統治者は国民みんなから好かれ、粘り強くタフな心根や、相互に助け合う絆の強さが国民性として根付いている。……一朝一夕でこうはいかない、長きにわたって続けられてきた、確かな善政が打ち立てた、まぎれもない大名家の功績だろう。

しかも、軍備も小さく武器も旧式のものが多い小国でありながら、正確無比な戦争機械たるゲルマニア帝国相手に、一時とはいえ進攻を耐えて見せていた。

それだけ士気が高かったってことだ。兵士たちの誰もが愛国心を持ち、後ろにいる家族を、仲間を、国民を守って戦い抜いてみせるっていう自負と決意に満ちていた。

……愛されてるんだな、あの姫様とやらは。

まだ戦争が始まるよりずっと前の国際式典で何度か見かけたことがあったけど、真面目さと誠実さに手足が生えてるような印象を受けたのを覚えてる。

中身も見た目通りだったようで……だからこそ、国民に慕われてたんだろうな。

……こうして、絶え間ない責め苦に遭いながらも、何も話すことなく耐えている少女もまた……そんな姫様もとい、大公殿下を慕うがゆえに、これだけ強いんだらうか。

……うらやましいな。

そういう感情……僕は、抱いたことないや。

とか思ってる間に、ゾフィーが調子に乗ってきた。これ以上は危険だ。

はい、ストップそこまで。やめやめ。それ以上は骨が死ぬから。

え、治せるだらうって？　ばーか、強力な薬は反動とか副作用もそれなりにあるの。

そんなに頻繁に使っていいものじゃないの。いくら『鍊金術』使っても負担の軽減にも限度があるの。これ以上のペースでの使用は後遺症につながります。というわけでは  
い終了！

——嘘だけど。

ゾフィーを追い出し、昨日と同じように彼女の傷を治す。

あと、後から部屋の掃除をさせる人員を手配しておいた。

2日連続で失禁してる上、血しぶきとか飛び散ってるからね……衛生的に、うん。

イゼツタはだまつて僕にされるがままで……しかし今日は、気を失わずに最後まで起きていた。

その結果、僕が薬品と『鍊金術』の組み合わせで彼女の傷を全部きれいに治すところ

まで見てて……それで、何か聞きたそうにしてただけど……結局最後まで黙っていた。

いや、最後の最後、治療が終わったって伝えた時に、一言『ありがとう』って言われた。

ただし、僕も帝国軍人だからだろう。態度は、怯えたそれだったけど。

……ちよつと悲しい。いや、敵なんだから当然だけど。

※月@日

本当に……あのバカ女……捕虜を殺す気じゃなからうか？

日に日に苛烈になる拷問。それに加えて、新アイテムまで持ち出しやがって……

どこから、誰に頼んで手配したんだ——

——電気ショックと催涙・嘔吐ガスなんて！

おかげで、尋問終わりの治療の時、体に焦げ跡はできてるわ、毛細血管が切れて粘膜から出血してるわ、さらには嘔吐はもちろん、多量に吸い込んだ影響でお腹下して、失禁どころかそれ以上のことまで……僕にはリヨナもス○トロも守備範囲にはないって

何度言ったら！

加虐趣味……っっていうかエイルシユタットへの恨みはわかったから、衛生面考えろっ  
ての！ 血飛沫、尿失禁、ガス充満、その他もろもろ……殺菌消毒終わるまで使えない  
よこの部屋！

イゼツタも虫の息だし、完治させるまでいつもの倍以上時間かかったわ！ ガスの影  
響で上から下からいろんなもの垂れ流して、それらの処理も必要だったし！

その後も牢屋には置いとけなくて、また医務室に運んで経過観察することになった  
わ。無論僕がな。僕以外に鍊金術使える奴いないから！

今回のことはさすがに見過ごせる範囲にない。何せ、あんな処刑や軍事作戦にも使わ  
れるような物騒なもんを黙って持ち出すのは、陛下の黙認云々以前だ。

持ち込み、および使用には管理担当者の決済……すなわち僕の許可がいるわけだが、  
当然僕はそんなものを許可した覚えはない。もしも書類の偽造でもやらかしているな  
ら、それを根拠に更迭……は無理だろうけど、この基地からご退場願うくらいはしてや  
ろう。

そう思つて調べさせたんだが、違つた。

厄介なことにあのドS魔女、僕を通さない正規の手段でアレらを手に入れてやがつ  
た。



というのも、本国から昨日付で赴任してきた査察官——ここ占領地での立場・権限では僕の方が上だけど、向こうは皇帝の息がかかつてる上に階級では向こうが上——が持ってきた『差し入れ』らしいのだ。

僕を通すルートとは別ルートできちんと手続きを済ませ、許可を取り、あれらを持ち込んで……『よかつたら役立ててくれ』ってゾフィーに……。

しかもそいつは確か、今日の『尋問』に立ち会っていた。

牢屋の隅で椅子に座ってニヤニヤと笑っていた、脂ぎつた中年太りの男がそれだったはずだ。

イゼツタが責められ、苦しむ様を、笑いながら見ていたのを覚えている。

……あろうことか、その股間に……ズボンに、テントを張らせた状態で、だ。

……こいつ確か、陛下の……皇族の遠縁で、その権威をかさに着て色々好き勝手やることでも有名だった気がする。しかも、陛下が面白がって放任してるもんだから、放っておくと欲望のままに、どんどんひどいことをやらかすって……

大方、査察その他の任務は名目で、帝国を予想外に手こずらせたこの国の、主力も主力だったイゼツタを見物に来たんだろうけど……ここにきて、また厄介な……。

……どうしよう、こいつがこのまま調子に乗るルートしか見えない。

その場合……イゼツタの身には、これ以上の地獄が降りかかることに……

※月\*日

……早速か。

早速現実になったか、胸糞悪い予想が。

発端は、昨日。本国からゾファイに命令が入った。

他の土地を進行する軍事作戦を再開するから戻れ、つて。

ここ数日、ゾファイは、午前中にイゼツタをいたぶり、午後になってからエイルシユタツト領内の抗戦地域に赴いて、爆弾やら機雷やらを景気よく飛ばして爆発させて蹂躪、というのを繰り返している。物騒な日課だよホント。

ゾファイはこの国、エイルシユタツトに底知れぬ憎悪を燃やしているので、まだまだ足りない、つて感じで……今回の帰ってこいコールにも難色を示してただけど、復活させてもらった義理か、あるいは帝国の協力下でまだやりたいことがあるのか、最終的には従う決断をした。

で、そのゾファイがいなくなった途端……彼女が変わって捕虜の尋問を買って出やがったのがある。

言うまでもなく、あの査察官共である。

朝一番……それこそ、イゼツタに何かする暇もないくらいに早いうちに、ゾファイは

この基地を去った。しばらく帰ってこないだろう。少なくとも、数週間単位で。

それを見送った後、最近また増えた書類仕事に戻った僕だけど……その数時間後、血相を変えた部下から、また新しい面倒ごとが始まった報告を受けることになる。

牢屋に走っていつてみれば、そこには……悲しきかな、予想通りの光景が。

裸に？かれ、査察官と、その子飼いの兵士共によつて……見るも無残に凌辱されているイゼツタが、そこにいた。

いつもの鎖ではなく、手錠によつて拘束され……囚人服は、乱暴に破り捨てられてい

る。上も下も、隠すべき部分は、全く無防備にあらわになっている。形のいい、豊満な乳房も、毛の生えていない、ぴったりと閉じた一本筋の陰部も。

どちらもすでにさんざんに罵られたようで、体中に白濁の粘液がべつとりとこびりついていた。

そして今も、床に仰向けに押し倒され、怒張した男性器をその股間に突き入れられて、苦痛と快楽がまじりあつた悲鳴を上げている。それに興奮した兵士が、さらに腰を振るのを加速させ……おそらく、何度目かになるだろう射精を……遠慮も何もなしに、イ

ゼツタの体内に放っていた。

脈打つように体を震わせながら、『あ、ああ……』と、悲壮感に満ち満ちた声をこぼしつつ……女としての地獄を味わっているイゼツタは、ぼろぼろと涙をこぼし……満足した様子の兵士が肉棒を抜き取って手を放すと、そのまま力なく崩れ落ちた。

無理やり蟹股に開かれた足はそのままだに……股間からは、ドロドロと精液が漏れ出ている。

部屋の隅にいる書記官は、生ごみを見るような目でその光景を見ながら、居心地悪そうにしている。記録することでもないからだろう、ノートは閉じられていた。

いくら何でも、と抗議しようとして……気づく。

この光景を見て……自分のアレが、どうなっているかということに。

……目の前のこの光景は、言うまでもなく、凄惨なものだ。

昨日までのゾフィーみたいに、痛みを主軸にした凄惨さはないとはいえ、かわいい女の子がスタボロに犯されて、床に転がされているこの光景は……正直、きつい。

本心として、僕はそう感じている。できれば、目を背けたい。

……だというのに、僕の股間は……雄としての本能に、実に正直に変形していた。

とつさに僕は踵を返し……うつろな様子で、おそらく僕が来たことにも気づいていないだろうイゼツタを一瞥し、

イスに座つて一休みしつつ、部下にイゼツタを犯させてそれを見物している査察官——自分はもう済ませたらしい。下半身裸で、ペニスがテカテカと光っていた——から、『何だ、混ざらんのか?』なんてからかい気味に言われたりもしたけど、極力気にしないことにして『終わったら教えてください』とだけ言い残して、足早に歩き去った。

自室に帰つてから、副官に銘じて、査察官共の『尋問』が終わつた後に、女性の衛生兵に彼女の世話と後始末をさせるよう言いつけておいた。

……ゾフィーのそれと違つて、傷の治療なんかはいらなそうだから、大丈夫だろう。もし必要なら、僕が行くけど。

それと……アフター用の避妊薬の投与も。

『錬金術』で作つた特性の奴だから、アレ使つとけばまず安全だろう。

そしてその後しばらく、あの凌辱の様子が頭から離れず……僕の下半身も元に戻らなかつた。

このままじゃ、仕事が手につかない。

仕方ないので……軍付きの娼婦を手配して、部屋に呼んで抱いて発散した。

……自慢するわけじゃないが、僕は童貞じゃない。従軍してしばらく後には、上官に連れられて行つた娼館で、大人の階段を上っている。

こういう施設は立派に必要なものとして認知されてるので、別に誰にも何も言われな

い。

……それでも……今日は、どうも……かつてないくらいに、熱くて……

追加料金まで払って、媚婦のおねーさんに『お盛んね』ってからかわれる羽目にまできなりつつ、何度もやって……ようやく収まった。

## 03 恥辱と被虐の日々

「おらっ、さっさと口を開けろ！」

「へへっ、いいもん持つてんじやねえか、魔女さんよお？ 初めて見た時から、気になつて仕方がなかつたんだよなあ」

「んっ、ぐう……うぶ、うえっ……」

薄暗い牢の中……凄惨な光景が繰り広げられていた。

手錠でその身を拘束され、自由を奪われた少女。

幼さの残る整った顔立ちに、赤い髪が特徴的な彼女……イゼツタは、この基地に居を構えるゲルマニア帝国軍……通称、ゲールと呼ばれるもの達にとり、仇敵とでも呼ぶべき存在だった。

ある日突然、エイルシユタツトとの戦場に現れた彼女により、祖国は、軍は今まで、苦汁を嘗めさせられ続けてきたのだから。

しかし、今彼女を取り囲み……裸にして辱しめている彼らの脳内には、祖国の敵を誅せんと言うような高尚な志は微塵もない。

ただひたすらに……雄としての欲望をぶつけているばかりである。

服は剥ぎ取られ、手錠で拘束され……場所の不利を理由に抵抗もできない彼女は、ただ黙つてその身に恥辱を刻まれることしかできなかつたのである。

ほんの数分前、下半身の衣服を脱ぎ捨てたゲール兵の男達に囲まれたイゼツタは……流民か旅人に近い身の上、育ち方をしたがゆえに、そつちの知識には疎かつたもの……さすがにこれから、自分が、何をされようとしているのかは理解できた。

それに青ざめ、抵抗を試みるも……

『や、やめて下さいっ！ は、放して……そんな、いやっ！』

『暴れんじゃねえよ、魔女め！』

『お前は負けて、捕まつたんだよ。だつたら何をされても文句なんて言えないだろうが！』

『俺たちの仲間を大勢殺したお前を、わざわざ使つてやるつて言つてんだ、ありがたく思えよ。おい、そつち抑えろ』

『ささつ、査察官殿。まずは一番をどうぞ』

『うむ、ご苦労……ふふつ、先ほどからの通り、勃ちつばなしでね？ いい加減に我慢の限界だつたところだよ』

『う、うそ……いい、嫌、嫌あつ！ やだあつ！ ち、近付けないで下さい、そんな、汚い



……んあぁっ!!』

『何をいうか小娘め、私のこれを汚いだと? ふん、ならばその汚いものに、魔女殿のかわいらしいここで奉仕してもらおうか!』

『い、嫌……お願い、やめて……う、うあ……あ、あ……嫌ああぁっ!!』

彼女……イゼッタの純潔は、名も知らないゲールの軍人によつて、いとも容易く奪われ、散らされた。

股間の、結合部から流れ落ちるわずかな量の鮮血が、それを痛々しく物語る。

(そんな……これが……こんなのが、私の……初めての……)

気がつけば、ポロポロとこぼれ落ちている涙。小刻みに震えている体。

しかし、喪失のシヨックにうちひしがれる暇もなく……その身には、容赦なく雄達の欲望がぶつけられていく。

「おっ、ほおっ……素晴らしい、これほどの名器はなかなかないぞ。流石は初物……そして流石は魔女といったところか! 素晴らしいものをお持ちだな」

「嫌ああ……ぬ、抜いてえ、抜いて下さい……っ! 気持ち、悪いっ……」

体のなかに、地の通った異物が入り込んで、自分の……自分自身ですら触れたことのない場所を、貪り、なぶっている。

それがもたらす、おぞましいまでの違和感と圧痛、不快感……そして、快感。溢れ出る様々な感情。それらを処理しきれずにごちやごちやになった頭。

そんな頭に、ゲールの男からの無情な宣告が、耳から飛び込んで来た。

「ぬうつ、気持ち悪いだど？　まだ言うかこの小娘……」

「構わん、言わせておけ……お、つ。おお……と、たまらん、もう、出てしまいうだ……！」

「……！　っ!?　い、嫌！　そ、それだけは……抜いてっ、外につ！」

「馬鹿を言うな、むしろ、我らゲールの優秀な遺伝子を注いでもらえるのだぞ！　ありがとう……おっほ、おおおおお！」

——どくん

「あ………そ、んな……」

今度は、悲鳴も上がらなかつた。

その代わりとでも言うように、目から光が失われ……一筋の涙がこぼれ落ちる。

体の中で、突き入れられている肉棒が脈打ち、その旅に、どくどくと粘質の熱い液体が注ぎ込まれているのが、イゼツタには感じ取れた。

彼女にしてみれば……女として最後に残った大切なもの、大切な場所をも穢され、奪われたも同然。

いつの日か、彼女の血を受け継ぐ我が子を宿すはずの部屋が……ゲールの子種に汚された。

絶望に染まった表情で、完全に脱力してしまった彼女は……次の瞬間、床に投げ出された。

その体を支えていた男が、用済みとばかりに肉棒を抜き取り、放り出したのだ。力なく床に倒れ混むイゼツタ。

その耳に、兵士達の会話は聞こえてこない。

しかし、何を話していたのかは……その直後、思い知らされることになる。彼らのトップの男が放り出したその体に……兵士達が群がり出したことで。

「……………」

それを前にしても、最早抵抗する力のないイゼツタ。

その体は……かわいらしい口も、豊かに膨らんだ乳房も、安産型で形のいいヒップも、今しがた吐き出された精液が逆流してこぼれ落ち始めている膣も、

全て、兵士達の玩具として、いのように使われていく。

「へへっ、これからあんたは死ぬまで俺たちゲールの奴隷なんだからな。せいぜい元気

な子を産むこつたぜ」

「おい、こいつの子供なら、魔女になるんじゃないか？」

「そりゃいいや。なら少なくとも、子供が産める内は大切に飼ってもらえるだろうよ」

（死ぬ……まで、奴隷……もう、逃げられない……。ごめんなさい、姫様……私もう、お役に……）

かろうじて頭に届いた兵士達の会話を反芻し、イゼツタは心でも涙を流した。

### ※月#日

ここ最近、イゼツタの尋問は、兵たちの慰安と同義になっている。

査察官に媚びを売って、覚えのめでたい感じの者達から……彼が主催の『尋問』の名を取った輪姦パーティに呼ばれる、という感じである。

今日もだ。朝から、四つん這いにされて後ろから膣をえぐられている。

数日前まで処女だった彼女に対し、あまりに惨い、えげつない仕打ち。

人体の一部でありながら、ピキピキに硬くなつて怒張した肉棒。熱くて硬いその逸物が、異物が、彼女の膣内に叩き込まれてゴリゴリと中をえぐり、好き放題動いて快樂をむさぼり、好きな時に、無遠慮に注ぎ込んで抜き取られる。その繰り返し。

尊厳も何も考慮されず、ただただ性処理用の肉便器としていいように使われる。

イゼツタは、ある日は朝に、また別な日は夕方に、また別な日は夜になってから、時間は決まっておらず……ただ単に、査察官の気が向いた時に、ひたすら犯される毎日だ。それも大体は、1人じゃなくて集団で輪姦す。子飼いい、あるいは気に入った兵を数人連れてきて、これでもかかってくらいにドロドロのポロポロになるまで犯して帰っていく。

その都度、あらかじめ手配しておいた世話役が彼女の後始末をして、必要なら僕が治療もして、なるべく回復させてやる、という感じの毎日だ。

毎度毎度破り捨てられるか、あるいはドロドロに汚されるので、もう何着囚人服がダメになったか……。

いつそ裸でいさせておく、っていう意見も出たけど、温度調節が的確にできるような環境下でもないのです、僕の権限で却下した。消耗品費が余ってるから、そこから出して補充する。

服はきちんと着させておかないと、これも衛生上よくない。

特に査察官のおっさん……毎度毎度、親子ほども年の離れた少女を組み伏せて、お盛んかつねちっこい交合に興じている。

お世辞にも見た目がいいとは言えない査察官のおっさん、いやむしろ汚っさんは、な

んというか本当に欲望に忠実であるというのがわかる。自分のしたいことを一切遠慮せずにイゼツタに強要し、目を覆いたくなるような責め苦を幾度となく突き付けて辱める。

唇を奪つたり、乳房に吸い付いたり、陰部や……菊穴を舐めるなんてのは序の口。

汗……というよりは脂ぎった体で、イゼツタに抱き着いたり、上から覆いかぶさつてねとつと密着するような形でへこへこ腰を振り、その間ずつとイゼツタの首筋やらうなじやらを舐め回したり、首に吸い付いてキスマークを付けたり。

後ろの穴……アナルを犯すなんてのも平気でやる。まあ、そら舐めるくらいなんだから、やるわな。そのくらい、普通にやるわな。

口に……喉の奥まで突っ込んでのイラマチオ、豊富な胸で挟んでパイズリ、その他、素股に腋に髪の毛まで、何でもかんでも使う。

……どんだけ遊んでんだよ、この人は……。

犯されるつらさ、苦しさに加え、自分の体をいように使われている不快感、屈辱。それらが織り交ぜられて、言い表しようのない感情がイゼツタの中に渦巻いている。

毎日、そんな感じで存分にイゼツタの体を堪能し、汚しつくすと……連れてきた兵たちには『後は好きにしろ』と。

そして始まる輪姦。汚っさんはそれを、椅子に座って休みながら見ている、と。

あるいは、汚っさんがまだやってる最中から参加させたりすることもあるようだけど。

悲鳴や嬌声すらだんだん上がらなくなり……兵たちが満足するまで犯されて、犯されつくして……終わったら捨てられる。

それが、ここ数日の間、イゼツタが受け続けている責め苦の内容だ。

そして僕はそれを、ゾフィーの時と同じように……参加せずに見ている。終わるまで。

終わったら、さつき言った通りに処置に移る。

疲労困憊の上、精神的なショックから立ち直れていないイゼツタは、されるがまま。

この間までは、ゾフィーの責め苦の後に少しは口を利く感じもあったのだけど……それも鳴りを潜めている。

生まれて初めての、女としての地獄。それが毎日繰り返されるこの責め苦に、だんだんと精神を削られているのかもしれない。

……それと、犯されるようになってから2日目以降は、こっそり彼女に避妊薬の投与も始めた。僕の独断で、記録に残さずに。

『錬金術』で作った特製の品なので、調べられても成分は一切検出されない。

これで少なくとも、妊娠することはないだろう。

……そして、彼女に関する一連の行為の間……僕は、前もって飲んでおいた鎮静剤のおかげで、精神と下半身の鎮静を保っている。

数時間で効き目が切れるので、何日かに一回は娼婦を手配してるけど。

……多分、査察官殿なら……僕がもし希望すれば、面白そうに笑って、イゼツタを輪姦するメンバーに入れてもらえるだろう。というか、別にあの人の許可なんかなくても……僕の立場上、その気になれば彼女に手を出しても何も問題はない。

けど……どうしてかな。

なんていうか……自分から出すのは、何かこう……

いや、正確には、出したいんだけど……もつとこう……

※月?日

査察官の汚っさん……またいらんものを用意して……

鞭、低温ロウソク、三角木馬、荒縄……

どうみてもSMプレイのセットです本当に(略)

普通の輪姦に飽きたのか、それとももともと手配していて届き次第コレに興じるつもりだったのかわからないけど、汚っさん方は嬉々としてコレを持ち出した。

ぱっと見ただけでは、すぐにはそれらをどう使うのかがわからなかつたらしいイゼツ



ただが、汚っさんが用意した道具の中に鞭が混じっていたことで、痛い系だと悟ったらしく、顔を青くしていた。

しかし、だからといって汚っさんらのおもちや遊びから逃れられるわけもなく。

荒縄で縛られて身動きを取れなくされ、

三角木馬に跨らされて、股間に木の角を食い込まされ、

熱く溶けた蠟を垂らされ、

鞭で打ち付けられて、肌が赤く腫れあがり、

苦痛に悲鳴を上げ、しかし合間合間で与えられる快感に嬌声を上げながら、今日もイゼツタは辱められていた。

……が、意外にも、体への負担とは逆に、精神への負担は小さいように見えた。

痛みが気付けになってるとか？ そんな馬鹿な。

……いや、でも……よく考えたら、イゼツタってあのゾフィーの拷問にさらされてたんだもん……そりゃ、多少なり苦痛に耐性もできる……のか？

時に骨まで逝きかねないアレに比べれば、あくまでプレイ前提のSMだし、まあ……うん。

木馬も角は丸くなってたし、蠟燭も鞭も、アレはプレイ用で、見た目はアレだし派手に音もなるけど、威力はそこまでじゃないものだったはずだし。

ゾフィーの鞭だと、もつとえげつないミミズ腫れできてたもんな……

そんなわけで、所々に差し込まれる普通のレイプによる快感はともかく……痛みについては比較的耐えられてたのか、イゼツタは今までに比べて余裕ある感じだった。

嫌な慣れ方だな、っていうのは自分でも思ってるのか、微妙な表情だったけど。

けどまあ、結果的にはいえ余裕があるということ……その分の意識をイゼツタは、コトが済んだ後の面倒を見てくれる僕らに向けたように。

しかし、体を拭いてくれたり、精液を膣内から掻き出してくれたりする女性兵士は、皆総じてイゼツタのことを、敵として憎々しい目で見ると、性処理奴隷として蔑んだ目で見るとどっちかである。間違っても、心配なんぞしてくれるものはいない。

であれば、イゼツタとしても話しかけづらいのだろう。黙って処置を受けるままだ。

となると……声をかけられるのは、そういう『女性がやった方がいい処置』を済ませた後に、あるとすればではあるが、体の傷を治す担当の僕くらいであり、

イゼツタにしてみれば、不思議な力で自分の傷を……それこそ、何日もかけて治癒するようなものすら、瞬間に治してしまう、魔女である彼女をしてすら驚く『何か』を使える、前々から興味深い対象であった僕に……勇気を出して話しかけてみるに足る状況だったようだ。

僕としても……それで彼女の気がまぎれるなら、まあいいかな、と思ったり。

色々と話してみたいこともあったし、世間話程度に雑談に応じた。

体を休めるのが優先なので、ベッドに寝かせた上で。

思ってたより捕虜收容房のベッドは、寝心地が良くて助かってるとか、

薬や『錬金術』で処置してくれる時に、場合によっては色々と触られるので——今回なんかは三角木馬で負担かかった股間とかも触ったしな——それがちよつと恥ずかしい、とか、

食欲がないのはわかるけど、きちんと食べないとだめだとか、もしどうしてもつてい  
うなら、病人用の流動食とかにメニューを変更しようかとか。

当然ながら、僕がたびたび使う、治癒の力についても聞かれた。

あれも魔法なのかって。自分の一族には、あんな魔法は伝わってなくて……ただ触れた物に魔力を流して動かすことしかできないのに、傷をいやすなんて魔法があるのか、って。

残念ながら、それに対して答えられることは少ない。

言うまでもなく、『錬金術』のことについては……軍事機密扱いである。いずれ公表する予定である、ある程度のことについてくらいしか話せなかった。

『私にも使えるんですか?』って、なんか元気になつてきた感じで、興味津々、好奇心たつぷりで質問されたけど……無理(きつぱり)。理由? 禁則事……もとい、軍事機密で

す。

それでも、ここ数日……というか、捕まえてからは一度もなかつたくらいに、彼女は生き生きとしていたように見える。そんなに楽しかったのかな、ただの雑談が。逆に、こつちからも質問してみた。帝国にとつて、有益になりそうな情報を。喋つてくれれば、僕の権限で多少なり待遇を改善できる、つて言い添えて。

まあ、やはりというか、『それは……言えません』つてさ。ダメだった。

この子ホントに意志強いよな……。いや、単に僕が信用されてないからかもしれないけどね。話したからつて変わらないかもしれないつて……。まあ、無理ないけど。

話が途切れたあたりで、僕は仕事に戻る、つてことでお暇させてもらった。

?月◇日

……ホントにあの汚っさんは……こないだのSMといい、ろくなことを考えない。

同じように犯してるのに飽きてきたんだろうか? またいらんこと考えて、僕に相談もなしに実行しやがつて……!

何をしたかというと、だ。

あのボケ、イゼツタを外に連れ出しやがつた。

もちろん、タダの散歩とかそんなもんじゃなく……一応、公務つてことで、戦闘があつ

た跡地や、公国政府関係の場所の『実況見分』っていう名目で外に出したんだけど……もちろんというか、言葉通りに実行されるはずもなく。

外出当日、イゼツタは……ぼろ布のような服を着させられただけの姿で、屋根なしのオープンカーみたいな馬車に乗せられ、鎖で縛られた姿で連れ出された。

そしてその状態で、わざと大通りとかの人目に付きそうなところを、ゆつくりとしたスピードで進んでいくという……

こういうの、昔の日本で言う、ほら……『市中引き回しの刑』ってやつだ。まんまアレだ。

必然的に、市民の目が……絶望と悲壮感に満ちた視線が突き刺さる。

イゼツタの顔は、ここランツブルックのみならず、エイルシュタットの国民皆知っていると言っている。プロパガンダでめっちゃ宣伝されてたし。新聞にもよく載ってた。

エイルシュタットの、帝国に屈しない奮戦の、そして周辺諸国との協力・反撃の象徴として、広く知れ渡っていた。

そのイゼツタが、見るも無残な姿で、抵抗することもできずに、無力な一人の小娘として自分たちの前にその姿をさらしている、という図。

そりやまあ……シヨックだろう。うん。

もちろん、汚っさんはコレを狙ってやっている。

フイーネ大公殿下と双壁をなす、国の希望そのものであった彼女……現代の白き魔女・イゼツタの、無残な姿を衆目にさらすことで、今なお水面下で反抗し続ける者達の心を折るために。

実際、見ていた市民の何人かは、そうだったっぽいことが見て取れた。

わかりやすく絶望を顔に浮かべて膝を折る者、あまりの痛々しさにぼろぼろと涙を流して泣き崩れる者、がくがくと体を震わせ、これからどうなるかという恐怖におののく者……

……しかし、それと同じくらい……こちらをにらみつけてきたり、何かを決意したような表情になったり……中には、今にも飛びかかってきそうな形相の者もいた。隣の、比較的冷静そうな奴に止められてたけど。

……まあ、そうなるよね……。

心折れる者もいるだろうけど、逆に火が付く奴もいるよね……あーあ、また何か面倒なことが起こりそうな予感。

てか、絶対起こるだろ。イゼツタ奪還の動きとか。レジスタンス連中が元気になりそうだ。

……また仕事が増える。

折角僕が、蜂起とか起こらないようにうまく占領政策回してたのに……

ちなみに汚っさんは、イゼツタに対して『お前らのせいで俺たちはこんな苦しい生活をする羽目になったんだ!』とか『あんたたちが戦争で負けたせいで!』とか、罵声が飛んでくるとかの反応も予想してた——ついでに言うならイゼツタも。怖がってた——そんなんだけど……そういうのは一切なかった。本当に、ただの一声もだ。

……もし同じことを、帝国が負けた時に帝都でやったら、こうはいかないだろうな。むしろ、汚っさんの予想通りになった可能性が高い。

どれだけ、国民からの人気や信頼、人望に差があるかってのがわかる。  
改めてすごいな……エイルシユタツト公国。

……できるなら、僕、そっちに生まれたかったかも、って、ちよつとだけ思った。  
基地に戻った後、雑談の中でぼつりとそう漏らしたら、嬉しそうな顔をされた。

## 03・5 イゼツタ視点

※月&日

目が覚めると、知らない天井だった。

服も変わっていて、腕には点滴……その時、一体何がどうなっているのかわからなかった。

訳も分からず、とりあえずベッドから出ようとしたところで、体中に……思わずうめき声が出てしまうような、鈍い痛みが走る。

同時に、何日も寝っぱなしだったかのような、体のだるさも。

それにますます混乱していると……部屋の扉を開けて、誰かが入ってきた。

その服装は、なんとゲールの軍人のそれで……しかし、とつさに魔法を使おうとして……できなかつた。

「目が覚めたか……エイルシユタットの魔女イゼツタ、貴様は今、我らゲルマニア帝国軍の捕虜となっている。じきにこの基地の指揮官が来る……それまで大人しくしている。それと、ここはレイラインが通っていない、魔法は使えないから、無駄な抵抗はやめることだ」



そう言い放ったゲール軍人は、そのまま扉から出て行った。

残された私は……その瞬間、全部思い出した。

ゼレン回廊に出撃して……あの、本物の白い魔女だっという人に出会って。

魔法が使えるはずの場所で、突然飛べなくなっ……墜落して……そのまま意識が

……

ということとは、私はあの後……ゲール軍につかまったということだ。

そして捕虜に……でも、この部屋は牢屋っていう感じじゃない。むしろ、医務室みたいな……あ、そうか、大怪我してたから治すために……

……見ると、体中にけがをしていたはずなのに……それがほとんどなくなっている。

つまり、それだけ長く、私は眠っていた……？

そんな、じゃあ戦争は……どうなったの!? エイルシユタツトは!? 姫様は!?

そう思って、顔から血の気が引いた……その時、また部屋の扉が開いた。

「……お、ホントに起きてる。気分はどう……って、いいはずないか。敵陣のど真ん中だもんね」

来ていたのは、同じゲールの軍人……軍、人?

軍服を着てるけど……私と、同じくらい年頃に見える、男の子だった。

すらつとした体格で、金髪に、ちよつとかわいい……女の子みたい……中性的、っ

ていうんだっけ？ そんな感じの顔。なぜか左目に眼帯をしている。

眼差しは……敵であるはずの私を前にして……優しい感じだった。さっきの軍人さんみたいなのに、憎々しげな視線は向けられなかった。

でも……軍服についている階級章は、それに見合わないくらい立派さだった。

姫様のところで勉強した、ゲルマニア軍人のその知識に当てはめると……

(階級……少佐!? ゲルマニアの……将校クラス……!)

さっきの兵士が言っていたことを鑑みれば……まさか、この人がこの基地?の責任者なんだろうか? 何度見ても、私と近い年ぐらいい見えるのに……

……そのくらいに、優秀な人だ、ってこと……?!

「あー、っと。さっきの兵士から聞いてるかもだけど、一応もう一回言っとくね。イゼツタさん、あなたは負けてつかまって捕虜になってます。ゾフィーにやられてケガがひどかったんで、一応治しました。これから色々取り調べとかさせてもらうのでよろしく……あ、ごめん自己紹介まだだったわ。僕はこの基地の指揮官で……あと、ここランツブルックの暫定的な占領統治のかじ取りもやらせてもらってます、ソロモン・フォン・サンジェルマン少佐です。よろしく」

内心ひやひやな私のそんな思いなんて知らず……同じように軽い感じの口調と、敵に對して言ってる感じのしない表情で、彼はそう言った。

※月?日

戦争で捕虜になった私は……敵国につかまったんだから、ただじゃすまない。

それはもちろん、もしそうなれば……って考えたことはあるから、覚悟はしてたつもりだった。

尋問……いや、拷問されても、姫様に関することは絶対に話さない。耐えてみせる……安心してください、姫様………そう、私は、生意気なことを考えていた。

………甘かった。

拷問のつらさ……その意味………どれだけ追い詰められるのか。そんなことを私は、全くわかってなかった。

本物の『白き魔女』……ゾフィーからは、鞭やそのほかの色んな道具………それこそ、見たこともないような道具を使って……経験したこともない、信じられないくらい苦しさや味わわされた。

歯を食いしばって耐える、なんてことがそもそもできない。身を切られるような痛みには、私は……泣き叫んで、涙を流して……お、おしつこまで漏らして……

瞬く間にひどい有様にされて……それでも、何とか姫様に関することは話さずにいら

れている。

……その分、苦しみが長く続くんだけど……

ゾフィーは、エイルシユタツトに憎悪を燃やしている……だから、その国も、そこに暮らす人も、何もかも滅ぼさないと気が済まない、許せない……つて、言つてた。

もちろん……その国に味方している、私も……彼女を裏切つた王族の末裔である、姫様も。

絶対に、彼女を姫様に近づけるわけにはいかない……そのためなら……

痛みだろうと、辱めだろうと……

……そんな風に、またしても甘いことを考えていた私は……今度は、ゾフィー以外のゲルマニア兵の手で……女としての地獄を味わうことになった。

裸にされて……拘束されて、床に転がされた。

そしてそのまま……下半身裸になった、男の人たちに囲まれて……そのまま……

……初めてだったのに、つて……悲しむ暇もなかった。

まるで私を、物でも扱うみたいに、乱暴に……何人も、何度も、いつまでも……

硬くなった、男の人のアレが……私の中に、無遠慮に突き入れられて……そのまま、体の内側をえぐられる。痛みと……認めたくないけど、快楽で、泣き叫んだ。

もちろん、そんなことでやめてもらえるはずもなく……私はほとんど毎日、ゲールの軍人たちの慰み者にされている。拷問して情報を話させることなんて、考えていないんじゃないか、つていうくらいに……毎日、執拗に。

……私だつて……旅をしている間、幸福な結婚について、夢見なかったわけじゃない。姫様に仕えるようになってからも、いつかそういう風に……つて、考えたりもした。

それなのに、こんな形で……初めてを奪われた上……何回も、中に……

辛いだけならまだしも……ひよつとして、これだけされたら……子供が、出てきたりしたら……

毎日、恥ずかしくて、つらくて、悔しくて、情けなくて……泣きたくなつて……そのまま、結局こらえきれずに、泣いている。

こらえずに泣いた方が、少し楽になるつて知つた。どっちみち、恥ずかしいところをもつとさんさん見られてるんだし、今更気にしない。

……いつまで耐えられるか、正直わからないけど……

……そういえば、拷問以外にも、一応気になることがある。

辛いときは、わざとそつちのことを考えるようにして……気を紛らわしている。いや、本当に気になっていることでもあるんだけど……

拷問では、痛みか、辱めかに関わらず……ケガを負うことが結構多いんだけど……そのたびに、どれだけひどいケガをしても、たちまち直してしまう人がいるのだ。

……目覚めたその日に会った、あの人なんだけどね。少佐さん。

本当に『たちまち』だ。ものの数秒で、切り傷も腫れ物も。

あの人が、薬を塗って……あるいは、飲ませたり注射したりして、

その後、変な手袋をはめて、ケガしている部分に手をかざすと……そこから青い電気っていうか、火花や光みたいのが出て、

けど、全然痛みとかなくて……むしろ、それが当たると、すぐくあつたかくて、気持ちよくなって……見る見るうちに、傷はふさがり、腫れは引き、痕も残さず治つてしま

う。

こんな魔法——薬の効果とかには見えなかったし……あんな治療法があるなんて、聞いたこともないし、魔法だと思った——私は知らない。見たことも聞いたこともない。驚いて聞いてみたら……軍事機密だつていうことで、詳しくは教えてもらえなかったけど……どうやら、ゲールの軍が、というかあの少佐さんが、魔女の力を応用して作り出したものなんだ、つていうことはわかった。『錬金術』つていうらしい。

それを使って、いつも私の傷を癒してくれる。

その時に、時々……他愛もないことを話したりする。

あの少佐さんもゲールの軍人であり、敵だつていうことはわかつてる。

けど、その時間が……私にとつての癒しに、心が休まる時間になっている。

それに、なんていうか、あの人は……ゲールの軍人つぽくない気がする。

まるで、普通の友達と一緒にたつてしゃべつてみたい安んじがあるし、敵である私にも普通に接してくれる。

気のせいじゃなければ……少佐さんも、私との会話を楽しんでくれてる、みたいな気もする。

この間なんて、エイルシユタツトのことや、姫様のことを褒めてくれたし……気のせいじゃなければ、うらやましい、とまで言ってくれた。

繰り返しになるけど……敵の、ゲールの軍人なのに、すごく自然に。

……どうしてこの人が敵なんだろう、と、最近よく思う。

なんとなくだけど……この人なら、私たちと仲良くなれそうな気がするの。

もし、この人が味方になってくれたら……どれだけ心強いだろう。

いや、今からでも……話したら、ひよつとしたら……

……いや、さすがにそれは無理かな……？ いや、でも……もしうまくいけば、今は

苦しい戦いを続けているであろう姫様にも、喜んでもらえるかも……

特に、少佐さんの『錬金術』……あつという間にケガをいやしてしまふ力は、軍の人たちにも喜ばれるだろうし……

……仲間になつてくれないかな……？

？月◇日

……だめ、かもなあ……

甘い、考えだったのかな……仲間になつてほしいなんて。

優しい微笑みの裏で、ひよつとしたら……私のこと、憎んでるのかもしれない。

そんなこと考えたくないけど、でも……

まさか、あの少佐さんの……あの目の、あの眼帯……私が、やった傷だったなんて。

……しかも、あの人のお父さんが……私が出た戦いで、戦死してるなんて……

今日、食事を持ってきてくれた、兵士の人に聞かされた話だ。

憎々しげな視線と、吐き捨てるような言葉と共に。

……『よりによつて少佐殿が、命令とはいえ貴様の世話をしなければならぬとはな

……！』つて。



そのこと、少佐さんは知ってるのかな？ 知ってるだろうな……

知ってて、私にあんな風に接してくれてるのかな……

傷を治して、心を気遣ってくれてるのかな……？

……どんな、気持ちだろう？

辛いのかな、悔しいのかな、憎いのかな。

……明日から、どんな顔して会えば……

## 04 弱りゆく魔女、それを支える者

?月〇日

予想通り仕事が増えた。

全くもう、いらんことやるから連中の反抗心に火が付くんだ……そのくせ、査察官の汚っさん共は何も手伝う気配すらないと来た。

……今度何かあつたら、取り巻きの兵士共だけでも僕の権限で最前線に送つてやろうか。あと、汚っさんは別な任務入れて追い出して……難しいけど、できないことないぞ、僕なら。

まあ言うまでもなくわかつたと思うが、ランツブルックにくすぶつていたレジスタンスの一派による襲撃があつた。イゼツタ奪還のための。

こないだのあの『市中引き回しの刑』でプツン行つたらしい。

『帝国許すまじ』『魔女殿を取り戻せ』的な感じでいきり立つてる連中が……あらかじめ僕が仕掛けておいた『ガス抜き罠』に引っかかるまでに、そう長くはかからなかった。

何のことかつて? そりゃ、あんなことやつた時点でこうなることはわかりきつてたから、連中に見える形で『イゼツタを取り戻せ』のようなチャンス』を用意しておいただけ

だよ。こないだと同じようにイゼツタが連れ出されるって、あらかじめ偽の情報をリークして、待ち伏せしてた。

くすぶった火が、くすぶったまま燃え広がって、酸素にあたつたとたん到大火になるのは避けたい。だから、わかりやすい餌に食いついてもらった。

戦略知識がなく、統制も取れない民兵やゲリラなんて、こんな感じで容易く誘導できる。

……まあ、彼らは彼らで被害者でもあるわけなので、気の毒に思わなくもないけども……これが本当に『大火』になられたら、占領区域全体を巻き込んで騒乱が広がって、余計に死傷者が増えるから、早々に鎮圧させてもらったのだ。

どうにかうまくいった……と安心してたわけけども、

ここでもやらかしてくれたがったよ、あのボケが。

午前中に彼等を捕縛して……汚っさんが動いたのがその日の午後だった。

こんな時だけ何で行動力あるんだよ、その分を少しでも仕事に回せ。

副官が血相変えて執務室に飛び込んできて、『さ、査察官殿が、中庭で……』って言うもんで、窓から下を見下ろしてみたら、そこには……

後ろ手に縛られて、身動きできなくされた状態で並ばせられてる、今朝捕れたてのレジスタンスの方々が、1人残らず連れ出されて中庭の地べたに座らされていた。

そしてその眼の前で……あの時と同じぼろ布の服をまとったイゼツタが、汚つさんたちに輪姦されていた。

繰り返すが、レジスタンスたちの、彼女を助けようと立ち上がった者達の、目の前で。しかも、またどっからあんなもん持ち出してきたのか……新しいおもちゃまで使つて。

あれだ、ギロチン拘束、つてわかる？ その名の通り、ギロチンで頭を固定する部分みたいな感じの……板状の拘束具だ。首元にはめて、さらに同じ位置で両手首も固定する。

多分、グ○つたら出てくると思う。後ろに誰もいないことを確認したうえでどうぞ。

当然ながら、普通の手錠に比べてさらに身動きが制限される上に、変な姿勢を強要されるから動きづらく、そして手が実質使えないので転ぶと1人では起き上がれない。

おまけに首が固定されるので、下や後ろを見ることができない。

そして、その様子をはたから見ている者にとつては、痛々しさ倍増のエロ拘束具である。

それを装着して連れてこられたイゼツタが、あらかじめ中庭に用意されていた台座……イゼツタの首の拘束具をはめ込んで固定するためのそれに、ガチャッと拘束具を合体させられた。

お尻を後ろに突き出して、首と手首を固定されて……本物のギロチンに拘束されたみたいいな姿勢になっている。

で、その状態で……抵抗できるはずもないイゼツタは、前から後ろから犯されていると。

衆人環視の中で辱められ、恥ずかしさと申し訳なさでどうにかなりそうになっているイゼツタ。

自分たちの希望が凌辱されている様を見せつけられているレジスタンスたち。

彼らの表情は様々で、絶望、失意、くやしき、怒り……しかし、皆一様に、自分たちには何もできず、ただイゼツタが辱められている様を見ていることしかできない。

じらすような前戯の後、膣に、口に、時には菊門に、容赦なく汚つさんや兵士たちのペニス突き立てられ、水音を派手に響かせながら出し入れされて……その様子が、無駄にレジスタンスの皆さんからよく見えるように位置・角度を調整されてる。

もちろん、射精は遠慮なく膣内や口内で行われ……そうした後の、そこからあふれた精液がこぼれ出る様まで、容赦なく見せつけられる。

最初は『心配しないでください、大丈夫ですから……!』って気丈にふるまっていたイゼツタも、何度も何度も犯されるうちに、悲鳴や嬌声をこらえきれなくなり、数十分後には、目の焦点があつてない状態で、助けを求め、許しを懇願するまでに追い込まれ、

それを見ていたレジスタンスの皆さんは……皆、泣きながら『もうやめてくれ……！』って感じで……ホントもうやめようよこんな鬱展開……気が滅入るよ、まだ明るいうちから……。

結局その後、わざわざ汚つさんが補充のために連れてきた兵士たちまで混ざってしばらく続いた輪姦ショーは、日没間際くらいに終わって……レジスタンスたちは、お通夜みたいな雰囲気ですべて牢屋に連行されていった。

イゼツタはこつちで回収して、いつも通り処置を施して休ませてあげた。

?月#日

……武装蜂起の実行犯たちの処刑が執行された。

公開処刑方式で……しかも、わざわざイゼツタを連れ出して、その目の前で。

……胸糞悪い。どうしてあいつらはこうもアレなことを思いついて、それをすぐに実行するかね。

拷問開始当初、というか、イゼツタが捕まった時みたいな感じで、彼女は鎖で縛られて吊るされながら処刑場へ連れていかれ……真正面から、特等席でその光景を見ることがになった。

そして汚つさんたちは、わざわざ周囲に聞こえるように、『この者達は、この魔女イ

ゼツタを奪還する目的で云々』みたいな感じで、声高に罪状を読み上げる。

イゼツタの罪悪感——感じる必要もないだろうに——が急上昇。冷汗が……。

横一列に、棒に縛り付けられて並ばせられた実行犯たちは、口々にその主張を最後まで叫びながら……たった一度、鳴り響いた銃声を境に……永遠に黙った。

言うまでもなく、その光景を見せつけられたイゼツタ……発砲の瞬間こそ目をつむっていたものの、その後血まみれになった彼らを見ちやつて……目から、ハイライトが消えた。

トラウマ確定だ……これで心が壊れたらどうするつもりだよ、あの馬鹿ども……！

……この日は、ドクターストップ×強権発動でイゼツタはもう休ませた。犯らせん。

これ以上は本当に精神が死ぬ。

他、書くことはなし。

?月?日

アレ以降、彼女は目に見えて意気消沈している。

口数は少なく……汚っさんらに犯されても反応がわずかだ。

……本当にやばい。コレはただ落ち込んでるんじゃない……心が死にかけてる。

幸い、とっていいこともないだろうけど……わずかに生き残ってる彼女の心が、助

けを求めているのはわかる。

事後の治療中に……ひよつとしたら、汚っさんや、男女の兵士たちよりも、今までフランクに接していたからか……治療のために彼女のそばに来た僕に抱き着いて、震えながらうわごとのように『ごめんさい』『許して』『助けて』って……

彼女の心は、限界を超えた精神状態の中で、必死で生き延びようとしている、のだと思ふ。

……早く、どうかしないと……

?月十日

今日、イゼツタとは関係ない……こともないけど、全く別分野の仕事で、比較的大きな動きがあった。

以前から僕が敷いていた、集積物資の移動情報の調査網——すなわち、敵の隠された秘密基地なんかを、直接探すんじゃない、そこに運び込まれる物資の動きから割り出そうというトラップに、そこそこ大きな秘密基地らしき情報が引っかけたのだ。

秘匿性最重視の作戦のため、コレを知っているのは僕が信頼できる部署のみ……：それこそ、あの汚っさんらにも知らせてなかった。

知られれば、いらんちよつかいを出してくるのは自明なので、僕の子飼いの部隊を動



かして即時制圧するように指示を出し、今日摘発させた。

その結果……迅速はいいけど、それゆえに情報の秘匿が雑になり、それがもとで向こうさんには直前で気取られてしまったらしい。

アルプス山脈の中腹、殿軍らしい少数の部隊と森の中での交戦になり……そうして時間を稼がれている間に、大公殿下には逃げられてしまったようだ。

こうなるのも見越して、僕が作った薬品——催涙ガス弾や閃光手榴弾なんかも持たせて、超短期決戦で仕留める算段だったんだけど……敵の士気が予想以上で、頑強に抵抗された。

僕らの戦術が戦術——即時敵を無力化する形だったので、敵味方共に死傷者は少なかった。

……敵の死傷者を少なくするように作戦を立てたのは、今まさに壊れそうになっているイゼツタの心に配慮してである。アレ以上は本当にやばいので、内政共々気を使っている。

その気遣いのせいで攻撃が甘くなり、逃げられたかもと言われれば……否定できないが。

けど、仮に殲滅戦でやろうとしても……今度は、生け捕りにしなきゃいけない、大公殿下やその側近たちまで傷ついたり、殺す羽目になりかねなかったしなあ。

基地、狭い上に入り組んでたそうだから。

それに、向こうも手勢の半分以上をこの戦いで失うことになった上、集積していた物資のほとんどを手放して、夜逃げ同然でここを去ることになった以上、これまで以上に厳しい道のりになるはず。悪いことばかりじゃないといえよう。

……その分、隠密性が増すことも考えると……探すのが大変だけど。

そしてこの作戦で、公国軍の捕虜を大勢手に入れた。ほとんどは摘発箇所の最寄りの駐屯地に収容してあるけど……そこで捕縛した者の中に数名、イゼツタと近い存在らしい者がいたらしいので、その何名かをここに極秘裏に送らせる予定でいる。

数日中には着くはずだ。

彼らとイゼツタを面会させるつもりでいる。うまくすれば、これでいくらかイゼツタの心を癒してくれれば……ゆとりが戻ってくれればと思う。

……まあ、いくら無事だとは言え、大公殿下がさらに追い詰められてる、つて教えることにもなるので……正直、諸刃の剣だろうけど。

どの道、僕らからの働きかけじゃあ何も効果がないんだし……。

捕虜たちもイゼツタを壊したくはないだろうから、『心配するな』とかいくらかのフォローはしてくれろと期待する。

特に、話した感じ、イゼツタと大公殿下、双方と親しそうな女性が1人いたそうだし。

確か、近衛の隊長の……ピアンカとか言ったかな？

？月曜日

幸いなことに、効果はきめんだった。

顔見知りだが、一応は無事な姿で目の前に現れたことに、イゼツタの目に一瞬で生気が戻り……しかし、彼女が拘束されてここにいるという現状に、まさか、と顔を青ざめさせていた。

けどその後、すぐにピアンカが説明して、姫様……オルトフィーネ大公殿下は無事だつて伝えたので、一応は安心していたようだけ。

とりあえずそのまま……監視付ではあったけど、特に何も制限はせず、話したいだけ話させてやった。記録はしっかりとっていたので……機密とかは話さなかったようだけ。

ピアンカはイゼツタを傷つけないよう、情報を選んで伝えていたようだった。

大公殿下は、一応は逃げ延びた。けど、今はどこにいるかわからない。

襲撃で手勢の半分以上がこちらの手に落ちた、しかし意外と死者は少なかった。

あと、ずっとここに閉じ込められていたイゼツタは、世状も把握してないだろうという予想から……すでにエイルシユタットのほとんどが占領下におかれ、各地で散発的に

抵抗活動を繰り返している状態だと。しかしそれも……風前の灯であると。

もし仮に、大公殿下が捕まってしまうでもすれば、この国は終わりだと。

結構辛辣な情報も……必要だと思ったのだろう、はつきりと伝えていた。

その後で『私のせいで』『ごめんなさい』『私が負けなければ』つて自分を責めていたイゼツタへのフォローも忘れずに。いい人だな。

なお、面会終了後、彼女を連行してイゼツタの牢屋から連れ出す際……ピアノカから、憎しみで人が殺せたら、とでも言うような視線を向けられた。あまりの迫力にヒュツとなった。

アレの理由は……僕がゲールの軍人だとか、イゼツタをこんなところに幽閉しているとか、ランツブルックを占領支配している当事者だからとか……そのへんだけじゃないだろう。

何せ、汚っさんが毎日毎日イゼツタをここで輪姦してるから、その分の……性臭、とても呼ぶべき匂いが、いくら消毒してもこの部屋にはこびりついてる。

その匂いから、イゼツタがここでどんな目にあってるか悟ったんだろうな。

……僕は何も手だしてないんだけど……とは言えない。立場や階級を理由にして、何もせずに彼女が虐げられるのを傍観してただけなのは事実なんだし。

親の仇でも見るような、ナイフ一本でもその手にあつたら斬りかかってきそうな、強

烈な殺気を向けてきた。……さすがは大公殿下付きの近衛、ってところか。その心配がないとわかっていても……実力的に僕なら組み伏せられるとわかっていても、怯んでしまった。

……そして、今更だけど……ホント愛されてるな、イゼツタ。

?月XX日

おっさんがビアンカに目を付けた。

当然、犯した。

名目は……最近までオルトフィーネ大公と一緒にいた近衛の幹部で、イゼツタ以上に重要な、それも鮮度の高い情報を握っている可能性が高いため、優先して尋問する、というもの。

……理屈は通っている。

というか、僕も同じ意見だ。

……だからといって、あなたの場合は単に性欲のはけ口としての見方が9割以上なんだから。

まあ、本当に情報を聞き出してくれるなら文句は言えないが……無理だろうな。ビアンカの口はイゼツタ以上に堅いだろうし。

ピアンカは、軍人としての立場や、敵につかまっているという現状を鑑みて、こんなことは覚悟していたようだったけど……やっぱり辛そうだった。

どうやら彼女も処女だったようで……それを、こんな形で散らされたシヨックは、彼女の目の端からこぼれる涙が如実に物語っていた。

それでも、弱音一つこぼすことなく最後まで耐えてみせた。

裸にされ、四つん這いにされて後ろから獣のように犯されても……隠語をぶつけられて辱められながら、何人もの兵士に前後と上の穴を犯され、体中に白濁をドロドロにするまでぶっかけられても、耐えていた。

さすがに声を完全に耐えることはできていなかったけど……まあ、仕方ないだろう。

膣内を、菊門を、口の中を……体の隅々、頭から足先まで汚されても、泣き言ひとつ言わずに済ませただけで、大したもんだと思う。

イゼツタ同様、やるだけやって後は放置された。

犯された穴からはドロドロの精液があふれ出し、起き上がるために床に手をつくだけで、ねとつとした感触にさいなまれ、精液の水たまりと体との間に糸が引き、呼吸のたびに鼻をつく匂いが飛び込んでくる状況。

これまた同じように処置してあげて……ああ、もちろんこうなることを見越して、昨日のうちに避妊薬は投与してあるので。

さすがに強靱な精神で、この程度何でもないと、言わんばかりの様子だった。

けど……これもイゼツタ同様、さすがに初めて見る『錬金術』による治療を目の前にしたときは、驚いていた。

すぐにこれも、帝国が研究して開発した、新しい魔女の力か、と悟った上で、何か考え込んでいたけど……結局その日は、そのまま治療を終えてすぐに休んでいた。

……意味ありげな視線を、退出する僕に向けていた気がしたけど。

……それと、イゼツタの方は今日はお休みかな、と思っていたら……きつちり手を出した。

それも、無駄に趣向を凝らして……ピアンカと一緒に呼び寄せたエイルシユタツトの男の兵士たちに、イゼツタを犯させるという……鬼畜の所業。

こないだのレジスタンス同様、くやしさと憎しみに満ち満ちた視線をこっちに向けてきて……しかし逆らえずに、泣きながらイゼツタを犯す兵士たち。

『気にしないで下さい、皆さんの命の方が大事です』って言ってそれを受け入れるイゼツタ。痛々しさ倍増。

膣内に、菊穴に、口に、乳房に、長らく処理なんかしてないであろう……それゆえに大量の、生物として自然な反応で吐き出された欲望の白濁。

イゼツタの体を、帝国兵の輪姦と何も変わらない監視で汚していく。

そんな痛々しいイゼツタを前にしても、兵士たちの体は正直で……何発出しても生々しく勃起を保たせている肉棒を、絶え間なく小さな体に突き立てて、欲望を発散していた。

終わるころには……さすがに精神が衰弱し、呆然自失のイゼツタ。

頭の前からつま先まで、いつもと同じくどろっどろの精液塗れだった。

なお、汚つさんが今回のプレイの仕上げとして、イゼツタの目の前で用済みになった兵士たちを銃殺しようとしたのは、僕の権限で止めた。

だから、やっと精神安定してきたところなんだっての。やめろバカ。

&月△日

どうやら汚つさんたちは、普段は普通のセックスで責め、時々思い付きでイベント——この前の、味方の兵士に犯させるといったような感じのもの——を織り込んでくることにしたようだ。

最早完全に彼女らは——イゼツタに加え、ビアンカも——慰安婦扱いである。

ここんところ、3、4日に一回くらいのペースでそれが続いている。

こないだは、ギロチン拘束具で基地の一室に固定し、精液便所扱いにして何人、何十人も兵士たちに犯させていたし、



その前は、子飼いの……しかも女性の兵士たちに命じて、レズ乱交させてそれを部下と見物、存分に目で楽しんだ後に、自分たちも参加して乱交。

でもって今日は……SM再び。三角木馬やら荒縄やら、鞭やら蠟燭やらを使つて、痛みと快楽でイゼツタとピアンカを喘がせていた。

そんな日々が続いても、2人とも大したもので……こちらが調べた情報以上に、大公が不利になるような情報は決してしゃべらない。

弱音を吐いても、悲鳴や嬌声を上げても、そこだけはぶれなかった。

これ以上もつと責め苦が過激になればわからないだろうけど、そうなる前に僕が止めてるので。

何度も言うが、イゼツタが壊れないように。ピアンカとの再会で持ち直したとはいえ、いつまたああいう感じになるかわかんないので、やりすぎないように注意している。

その結果、情報を聞き出せないのかもしれないけど……それはそれで仕方ないし。

陛下から、生け捕り……生きてればそれでいいってわけじゃなく、きちんと使い物になるような状態でとらえておくように、って言われてるんだし。そこ遵守しないと。

……そういえば、いまだに陛下からのアクションがないな。

陛下は何のために彼女を生かしてるんだろう？

軍事的な利用価値？ ……従順な（表向きは、だけど）ゾフィーがいるのに？

オルトフィーネ大公への播きぶりのため？　ならなげさつきとやらずに放置しておく？

それとも……妾にでもする気か？　いや、これは絶対にないな。

皇帝は、信頼できない者は絶対に近くに置かない。たとえ、自国にとって多大な功績をなした者でも、自分にとって不利益、あるいは脅威になりそうだと判断したら、容赦なく切り捨てる。

その野心と享樂主義的な考え方に似合わないほどに、臆病かつ警戒的な人なのだ。

これまで占領してきた国から、貢物として出された王族・貴族の娘も、暗殺やハニートラップを警戒して、自分に近い忠臣に与えるにとどめた。

敵国の、しかも魔女なんて論外だろう。抱こうともしないはずだ。

……そういや、ベルクマン中佐も目をつけられた……って聞いたな、風のうわさで。何でも、少佐から中佐に昇進させられると同時に、魔女関係の研究に関わる権限の一切を皇帝に取り上げられたとか……用済み、いや、やりすぎたか。

皇帝の不興を買って半年以上生きた例はない……とも聞く。危ないか。

もつとも、あの人がそう簡単に殺されるとも思えないんだけど……うまいことやつて、他国に亡命するか、あるいは寝返って下剋上でもやらかすなりしてどうにか生き延びそうだ。

案外、エイルシユタツトの方について、イゼツタを使つてゾフィー倒して……とか考  
えててもおかしくないな。

そうなると……皇帝はそれを見越して僕のところにはイゼツタを置いてる？

皇帝の方針や性格を考えれば、イゼツタは元々、とらえて無力化した後はプロパガン  
ダのために公開処刑にするくらいしか使い道がなさそうさ。そうしないってことは  
……大公一味のみならず、自分の保身を図る中佐が接触してくるかもしれないと考えて  
……餌にしてる？

となると、僕に近々命令が来るか？ 中佐が接触してきたら殺せ、つて。

もしくは……あんまり考えたくないけど……

……僕も、目をつけられた、あるいは、つけられつつある……か？

いざとなつたら、中佐やイゼツタごと殺すために。

占領統治の名目で、ここランツブルックにとどまらされてるのも、そう考えるときな  
臭い……。

……頑張らなきや前線で使い捨てにされ、かんばつても警戒されて謀殺される。

改めて思うけど、何て国だ、我が祖国は。

保身以上に、道義的にコレ……マジであの髭、どうにかした方がいいんじゃないかつ  
て思えてきた……貢献しておいてなんだが、このまま帝国にヨーロッパの覇権を握らせ

たら、不味くないか？ あれ、絶対満足しないぞ？

魔女の力の結晶……エクセニウムとかなんとか名付けてたアレを使って、新兵器の開発を着々と進めてるって話だし……新型爆弾が完成間近だとか。

もしそうなら、連邦や合衆国との戦争すら見据えてる可能性も……連邦との不可侵条約なんて、笑って破るだろうし。

……このまま、帝国を肥え太らせていいものやら。

案外、この戦争に負けた方が、世界全体のためになる気がしてきた。そうすると、僕の未来もなくなるけど……

なんか、各国との戦線も最近活発になってきて、僕も近々、指揮官としてこの国の近くの戦線に出張しなきゃいけないかもだし。

そんな時に妙な動きでもすれば、間違いなく粛清対象になるよなあ……。

……育ててもらった恩くらいは、もうそろそろ返した気がするんだけど……

……あー、どうしようか、ホント。

\$月#日

今、出先である。

こないだ書いた通り、他の戦線に指揮官として派遣命令が出て……そこでの抵抗活動

を鎮圧し、戦線を前に押し戻したところだ。

抵抗は激しいけど、ゾフィーが今ロンドンデニウム攻めの最中なので、僕が来た。

さっさと終わらせて戻るつもりだったんだけど……その間に……聞きたくなかった  
凶報が飛び込んできた。

あのバカ共……僕が留守だからって、調子に乗ったな！

## 05 救済と取引

\$月●日

あのバカ共！ 僕がいない間に調子に乗ったことをやってくれた！

指揮官任務で半月ばかりランツブルクを留守にして、同盟軍を押し戻して帰ってき  
てみれば……人が見ていない間に捕虜をボロボロにして！

帰ってから、イゼッタとビアンカの死に体とっていい様子を見て、絶叫しそうに  
なったぞ！

その後、残しておいた次席指揮官から聞かされた報告内容に、もつとびつくりした！  
本当に何をやってんだ、こいつらは！

いくら、出発前に『やりすぎないでくださいよ』ときつく言つといたとはいえ、それ  
で安心できる連中じゃないってのは知っていた。

だから、可能な限りさつさと帰ってくるために全力で軍務済ませたつてのに……予想  
以上にあの汚っさんたちは阿呆だった。

ここぞとばかりに欲望丸出しの、背德的・変態的な……僕がいたら強権発動しても

絶対に許可しなかったであろう類の遊びを次々と！

体調を考えないペースでの強姦はもちろん……囚人なんかを使って人数を水増しして休みなく犯し続けたり、そのせいで睡眠時間が不足&不規則化なんてお構いなし。

変なものを食べさせたり飲ませたり……こいつら、使用した消耗品の報告欄に、キヤットフードって書いてあるぞ!?

それ以外にも、アルコール度数のきつい酒や……医療用の下剤に……精神興奮物質？何やってんだホントに！ コレ扱うのに免許が必要な……ガ○ギマリセックスでもやりたかったのか!?

拳句の果てに……発情させた軍用犬と交尾させただど!? どこまで変態だよお前から!?

衛生面その他を配慮しないままに、好き放題責めるだけ責めやがって！ 一時はどうか力を取り戻した捕虜が、完全に半死半生じゃないか！

そしてとどめに……僕が留守の間に、予定を前倒しにしてゾフィーが帰ってきたって……。

その後再開された、イゼツタへの苛烈を通り越したレベルの責め苦……容赦なく鞭で打ち据えられ、刻まれていく生傷。響く悲鳴、こぼれ落ちる涙。

隣で見させられていたピアンカがどれだけ懇願しても、ゾフィーはそれをやめず……

ほぼ毎日それが続いたおかげで、こうなってしまったと。

医療班が手を尽くしたけど、それでもこの状態が精いっぱいだったそうだ。

即ドクターストップかけて、イゼツタ、ビアンカともに医療班へ引き渡し。

こんなこともあろうかと、出張先から僕の息がかかった、完全に僕に従う医療班を連れてきておいてよかった……病室にぶち込んで、それ以降夜通しで治療に当たった。

無茶苦茶なプレイばかりさせられた2人とも、心も体もボロボロだ。

特にイゼツタがひどい。

ゾフィーの暴行ももちろんだが、汚っさんたちも、反抗的な態度のビアンカの心をへし折る目的で、彼女の目の前で色々無茶苦茶やったらしい。先の軍用犬も、その一環だったようだ。

膣、肛門ともに粘膜は損傷して血がにじみ、体中が鞭やら何やらで傷だらけ。骨にひびが入ってる可能性もあり。変なものの食べさせられたせいで消化器系にもダメージあり。

イゼツタほどじゃないけど、ビアンカも十分重症なので、一緒に治療する。

まず今夜は、ほっといたらヤバそうな傷から治していかないと……『鍊金術』だって万能じゃないんだ、油断はできない。

点滴に包帯にギプスに……足りるかな。



……準備できたみたいだ、早速はじめなきや。

\$月@日

昨日からではあるが、彼女たちの治療は続いている。

今は僕は、ひと段落ついて……とりあえず問題ないだろう、つてどこまで来たので、こうして日記に残している感じだ。

あの後、まずは点滴による栄養注入を行いつつ、『錬金術』で最低限の治療をした後で……色々細かいところの治療を進めていった。

まず、荒唐治になるが、お腹の中の異物を全部吐き出させるため、ゾフィーがこの間使っていたガスを使った。吐くもの全部吐かせて、下からも……恥ずかしいだろうけど、全部出させて、お腹の中を空にする。その上で、体を洗ってやってきれいにして。

できたばかりの新薬も使って各部の治療。骨も、粘膜も、神経も全部治す。

消化器系も直すけど、弱ってる状態でいきなり食べさせられない。というか、食べるだけの元気がないだろうから、ゼリーにして食べさせる。

けどそれもすぐには無理だろうから、当分は点滴になるかな。

当分は絶対安静。ベッドの上から動かさせない。

尋問？ 却下に決まってるだろバカ。

査察官？ 叩き返せ、僕が責任を持つ。

……どの道、あの汚つさんとその取り巻きの連中は、もう容赦しないことに決めた。すでに手回しは進めてある。

ゾフィーは僕と入れ違いでまた別な戦場に行ったそうだ。もう戻ってくるな。

いつ容体が急変するかわからない＋錬金術依然として僕しか使えない＋いつ強引にあの汚つさんが乗り込んでくるかもわかんないので、僕は今日ずっとここ……病室にいる。

書類とか持ち込んで、ここで仕事してる。

戻ってくる列車の中で可能な限りやっというてよかった。ここでも十分やれる。

\$月\*日

中央に手を回した成果がようやく出た。

前々から汚職疑惑があった別な査察官……すなわちいなくなってもいい屑を事故に見せかけて始末して、その後任に汚つさんを設定。ここから追い出すことに成功した。

取り巻きの兵士たちも、汚つさんに同行させるか、あるいは前線、あるいは僻地に飛ばした。

これで、ゾフィーが帰ってこない限りは、彼女たちは安全と言っていいだろう……

少々強権を発動しすぎたから、陛下に目をつげられないかだけ心配だけど。

ともあれ、これで僕も少しゆとりを持った生活を送れそうだ……部屋を元に戻して……あと、眠い。さすがに3徹↓1時間仮眠↓また3徹は、錬金術で作った薬品でごまかしててもきついもんがある。

2人の容体もようやく安定したし……ピアンカの方は、意識も戻ったそうだ。

体力回復のためだろう、2人とも治療を始めて、容体が比較的安定してからは……一度も起きずに死んだように眠ってた。

それが起きたってことは……よかった、どうにかなったみたいだ。

……寝よう。

副官、後よろしく。

\$月十日

久々にたっぷり1時間も寝て、起きてご飯食べた後に、彼女たちの様子を見に行つた。

……僕、軍医じゃないんだけど……今更ながら。まあ、軍医よりもいろいろできるから、仕方ないっちゃ仕方ないのか。データも取れるし。

医務室に入ると、ピアンカが医務官たちの検査を受けていたところだった。

全裸で。

別にいじめてるわけじゃなくて……調べる箇所が体中あちこちに多すぎるからなんだけどね。医務官も全員女性だし、そこまで恥ずかしくもないだろう。

が、僕は男性なので、出直した方がいいかな……とか思っていたんだけども。

ほかならぬピアノカに、呼び止められた。話したいことがあると。

いぶかしむ医務官に対して『いいよ』と目で合図して……とりあえずシーツで体を隠してもらい、ベッドの近くまで行って椅子に座り、話を聞くことに。

……やはりというか、ここんこの責め苦はかなりきつかったんだろう。肉体的にも、精神的にも。僕を見る目に、尋常じやない警戒とおびえが見える。

それでも、体の震えをどうにか抑え込みつつ、ピアノカは話した。

曰く、助けて……治療してくれたことには、礼を言う、と。

おかげで体もすっかり回復したし、イゼツタの方も落ち着いたようでよかった、と。

それはこちらとしてもよかった、と伝えると……しばしピアノカ、黙る。

そしてその数秒後……意を決したような表情になったかと思うと、突然ベッドから降りた。シーツを放り出し、全裸のままのその体があらわになるのも構わずに。

驚く僕らが何か言う前に、そのままピアノカは床にひざまずいて……腰を折り、手を揃え、頭を床にぴったりとつけた。

突然の、まさかの全裸土下座である。

何事!?! とあつげにとられる僕らの眼前で、ビアンカは……絞り出すように話し始めた。

もう、これ以上は許してくれ、と。

自分ではなく、イゼツタに責め苦を与えるのを、だ。

どうやら、汚つさんや、ゾフィーの所業を見せつけられ続けたのが、相当こたえたらしい。

ビアンカは、以前から……おそらく、同じように姫様Ⅱオルトフィーネ大公を敬愛するものとして、イゼツタのことを慈しみ、大切に思っていたらしい。

もちろん、自分も軍人であるし、敗北しとらえられればこういう扱いを受けることになるのも覚悟はしていた。しかし、彼女はもともと、姫様の友達で、魔法が使えるだけの一般人であり——やっぱりそうだったか——このような仕打ちを見ているのはつらい、という。

自分は、この国……エイルシユタットと大公家のために全てをささげた軍人である。

だから、敗北の結果としてどのような扱いを受けようとも、文句は言わない。

でも、イゼツタは……と。

女としての地獄を味わわされ、人間以下の屈辱的な扱いをされ、死んでしまうのでは

ないかと思うほどに痛めつけられる。

このままでは、イゼツタが壊れてしまう。肉体的にも、精神的にも。

本当なら、こんな戦争に関わらなくてよかったはずのイゼツタ。

自分で望んだことだとはいえ、その結果として帝国に大きな損害を出したの事実だといえ、

『見ていられないんだ、もう……こんなになるまで、自分の全てを犠牲にして戦って……その果てに、こんな……』

演技も何もない、ピアンカ自身の、心からの叫びだったように思う。

甘い物言いだとわかっている。都合のいいことだとわかっている。

そもそも、囚われの身である自分に、何か言う権利すらもないのもわかっている。

それでも、と。

『私はどうなつてもいい。鞭つてくれていい、罵つてくれていい、痛めつけてくれていい、殺されたつてかまわない……でも、どうかイゼツタは許してくれ……！ 無罪放免などと都合のいいことは言わない、言えない。だが、どうか……貴殿の力で、どうか……あの子にこれ以上、つらい思いをさせるのだけは……！』

『痛々しいから土下座とかやめて』つて言うのも忘れて、それを黙って聞いていた。

恐らく、涙を流していると気づいてないまま、必死に懇願するピアンカの弁を。

……正直、返事に困る。

ゲルマニアの軍人として、この願いに、首を縦に振るのは難しい。けど……できないわけでもない。今の僕の権限なら。

自分の意向を通すんだから、色々リスクが伴うし、皇帝陛下の意向に左右される部分もある。さらに言えば、それは一時的なもので……一度守った後にイゼツタがどうなるかも保証できない。

そしてその先には……もつと大きな決断を迫られること請け合いなのだ。

……けど困ったことに、心情的にそっちに傾いてしまいつつある自分がいる。

そうする理由を、根拠を探してしまっている自分がいる。

ごちゃごちゃになった頭の中を整理しようと奮闘していると……ふと、ゆつくりと頭を上げたビアンカ、僕の方を見て……何かに気づいたように、わずかに目を大きくした。その先を追って……僕も初めてそれに気づく。

自分の股間に張っている、ごまかしようのない大きさのテントに。

……！ しまった、今日まだ、鎮静剤飲んでない……！

というか、ここんとこ出張行ったり治療したりで、そういう場面を前にすることがなかつたから、必然的に飲む必要なくて……完全に忘れてた！

このシリアスな空気の中で何してんだ僕は、つて慌てっていると……それを見て顔を赤

くしていたビアンカは、さつきも見た、何か決意したような顔になって……

### \$月&日

朝、自室で目を覚ます。

横には……全裸の上、体のあちこちにべとべとした液体をこびりつかせたビアンカが寝ている。

……うん、説明の必要もなければ、弁解のしようもないんだけど……ね。

昨日、寝た。彼女を……部屋に呼んで。

彼女は、イゼツタを助けるために、自分が犠牲になるんだと言って。帝国に対して屈したわけでもなければ、僕に対して心を許すわけでもない、と断って。

僕は……彼女に手を出す代わりに、イゼツタに対して便宜を図るんだと。差し出された貢物を受け取るんだから、こっちも何かしてやらなきゃ不義理になるんだと、言い聞かせて。

……さすがに、その時のことを詳細に描写するのは勘弁願いたい。

ただ何というか、お互い背徳的な部分があつて、それがスパイスになったのか……僕は、今までどんな娼婦を抱いた時よりも気持ちよかつたし、ビアンカは、僕が知る限り、汚っさん達にどんな辱められ方をしたときにも見ることのなかつたレベルで乱れてい



た。

病み上がりに対して何をしてるんだと自分をぶん殴りたくなるが……昨日の夜10時ごろから始まった、取引のためのセックスは……日付が変わってもなお勢い収まらず、結局その欲望のまま、明け方近くになるまで続けてしまった。

……こんなに盛り上がったのも、射精したのも……初めてだ。間違いなく。

僕もビアンカも、お互いに息も絶え絶えになって、出るものも出なくなるまで腰を振って……気絶するように眠ってしまった。

多分、あの時ビアンカが僕を殺そうとしてたら……抗いようもなかっただろうな。

そのビアンカは……ベッドの上で、安らかに寝息を立てている。

……彼女はしばらく寝かせておくことにして。ああ、起きたら色々世話をするよう  
に、メイド達に言っておかなきゃ。

持って来させた水と、清潔な布で体を軽くふいて……着替えにそでを通す。

下着を着て、シャツに、軍服……アクセサリー……それに、眼帯、と。

衣擦れや水音程度とはいえ、横でしばらく生活音を立てたのに……ビアンカは起きる気配はなかった。よっぽど無理をさせてしまったらしい。

……彼女から、対価は受け取った。

なら、今度は僕が義理を通さなきゃな。

イゼツタの待遇、  
どうかにかするよう  
にさっさと動かないと。  
まずは……

## 06 近衛隊長の献身

「おおお……た、たまらん……！　これが、エイルシユタツトの近衛隊長の肉壺か！　よく締まって絡みつく……まるで、我らゲールの男の逸物を加えこむためにあつらえたような名器だ！」

「然様ですか、査察官殿……いや、お気に召したなら何よりですな」

「うらやましいですねえ……我々も早く味わってみたい」

「っ、く……う……っつ」

服を奪われ、四つん這いにされ、後ろからつきこまれるは敵兵の肉棒……怒張したそれが、それまで男を知らなかった膣に容赦なく突き入れられ……結合部の隙間からとろとろと漏れ出る愛液と先走り汁、それに破瓜の血の混じった液体が、床に水たまりを作る。

体の中をさんざんにつきまわされ……耳からは聞くに堪えない野郎の喘ぎ声。

犯されている女捕虜……ピアンカは、目から涙をこぼしつつも、歯を食いしばって、その苦痛と快楽に耐えていた。

（覚悟していたことだ、心を殺せ、この程度で己を乱すな……！　この程度、いままでイ

ゼツタが受けたであろう責め苦に比べれば……っ！)

声に出さずに自分に言い聞かせる。

軍人然とした態度を普段から見せる彼女は、見掛け倒しでなく、その意思の力も地位相応、あるいはそれ以上のものがある。

絶望的な状況下で、名も知らぬ敵兵たちに、自分の体をいよいよ弄ばれているこの現状でも……軍人として、物事を冷静に考えるだけの余裕を保っていた。

……それでも、完全に私情を殺せていたわけではないのは……その目の端からとめどなく流れる涙が、時折うめき声に混じる嗚咽が証明していた。

彼女とて……軍人とはいえ、女なのだ。

その身の全てをオルトフィーネ大公にささげると誓った。それに偽りはない。

しかし……それでも、女としての幸せそのものを考えなかったわけではない。

今でこそ、ヨーロッパ全体がゲールという国の脅威にさらされ、戦火に包まれているが……いずれそれが収まり、祖国に平和が戻ってきた暁には……と。

近衛として大公殿下を守りつつも、今特に優秀な人材として目をかけている部下たちを含め、後進を……大公を守るにふさわしい人材を、ゆくゆくは自分の後を継ぐ者を育て上げる。

いつの日か、部下たちがその力を確かなものとし、自分が安心して姫様を預けるに足

るほどにまで成長した暁には……引退し、若い力に未来を任せることになるのだろう。できるならその時には……今はこれといっておらず、これから先見つければではあるが……誰か良き人と愛を通わす仲になり、幸せな結婚をして……純潔をささげ、愛を育み、子供を作り、女としての幸せを手にする……そんな人生を歩んでみたいと、ひそかに思っていた。

(……それが……こんな……ああっ!!)

瞬間、

腔内の、さらに奥に……叩きつけられた肉棒の切っ先から、熱い何かがほとばしった感触。その衝撃に……強引に意識が現実引つ張り戻される。

「おお、ほう……すばらしい、すばらしいぞ……一滴残らず、私の子種が搾り取られてしまいいそうだ……ふふっ、近衛隊長殿の肉壺は、力強いのですな……っっ!」

「あ……あ……嫌あ……っ!」

まだ見ぬ良人にささげるはずだった純潔は、誰も立ち入らせたことのなかった女人の花園は、下品な笑みを浮かべる敵兵によつて無残に踏み荒らされ……そして今、吐き出された白濁によつて、将来、愛の結晶を宿すはずだった、胎という名の揺り籠すら汚さ

れてしまった。

どうしようもなく……自分が傷物になったのだと、ビアンカは痛感させられる。本人の意思によらず、とめどなく流れる滂沱の涙が、その絶望を物語っていた。汚されてしまった。

女としての私は……私の、女としての価値は……なくなってしまった。

ゲールによって体の奥まで汚された私を……果たして誰が欲しがらう？

いや、それ以前に……こんな汚れてしまった、種がついている可能性すらある自分が、仮にこれより先に助かったとして……姫様の目の前に姿を見せることが許されるのだろうか？

「……………う……………う……………！」

嗚咽を漏らす彼女に構わず、ぬぼつ、と臆から肉棒を抜き取った査察官の男は、兵士たちに『後は好きにしろ』といつも通り言い放つが……それも耳に届いてはいなかった。(姫様……申し訳ありません。どうか、どうか今しばしの間だけ……女に戻ることをお許しください……！ 気持ちの整理が、全て済んだら……私はまた、あなたの知るビアンカに戻って……最後の瞬間まで、あなたに、そして祖国エイルシュタットに尽くします……だから、今だけ……)

「……………う、うつ……………うえつ……………！」

殺到する兵士たちの、興奮した、下卑た声に……彼女の嗚咽はかき消され……そして

……

(……また、この夢か)

ある朝、目を覚ました瞬間……ビアンカはそう悟る。

もうこのところは珍しくもないが、また……純潔を散らされたあの日を悪夢に見たと。

存外、大きな心の傷になっっているらしい。女としての未来を奪われた痛みは、今なお、寝ている間すらも彼女を休ませてくれないのだ。

が……次の瞬間、ふと彼女は違和感に気づいた。

夢はともかく……今、起きているこの現実が、いつもと違う。

いつも寝起きしている虜囚房の粗末なベッドではない。

目に映る景色もまるで違う。殺風景な房ではなく……家具や調度品が整っている、まるで高級な宿屋のような部屋……それこそ、彼女本来の身分でも住むことができないうな。特に、戦争中という今のこの情勢下では。

おまけに、自分が体を寝かせて……その体が沈み込んでいるこのベッド。肌触りとい、沈み込む感触といい……明らかに高級品だ。

なぜ自分がこんなところに……しかもよく見れば裸で寝ているのかと、一瞬考えたビアンカだったが……即座に思い出す。

昨日の夜、何があったのか……否……自分が何をしたのかを。

『もうお預けらめええっ！ らめ、なの、ほしいのおっ！ もつと来てえ、激しく、してえ！ おかひくなっひやうう！ 乱暴にして、もつと気持ひいいのくださいいいいっ！！』

『ああああああっ！ お、奥っ、奥にあたる……私のごこっ、熱いので突かれて喜んでるっ！ 熱くてっ、硬くてっ……っああだめええ！ そこ、ひきゅっ……赤ちゃんの部屋のお！』

『出てるうっ、赤ちゃんの部屋につ、熱くて濃ゆいのでてるうう！ 孕む、孕んじやうう！ わ、わらひっ、えいるひゆたつとの軍人なのにいっ、げーりゆの子供できひやううっ！』

「……………あ、あああああああっ！」

……………絶望ではなく、羞恥心の悲鳴が口からこぼれ出た。それも……自分に対しての。かあつ、と熱くなる顔。ゆで上がるように。



思い出されるのは……無理やり犯されていた時とは180度違う、自分の態度。

昨夜ビアンカは、『取引』のために自分の身を差し出した。

敵兵にくれてやるという意味では、今までと変わりない……と、思っていた。

……しかし、だ。

実際に抱かれてみれば……その手つきは、扱いは……強姦などとは程遠いもので、

こちらの体を、少しでも乱暴に扱えば破れる薄絹を扱うかのように、丁寧にやさしく

……

予想と違いすぎるその扱いに、戸惑いを覚えたところまでは覚えていて……次第に、その手つきが、空気が、心地よく思えてきて……取引の行為だという冷めた考えが薄れて消えて……

気が付けば、自分の中の『女』が、もたらされる性の快感と多幸福感に浸りきりに……

(あ、あんな風に乱れて……あんな、恥ずかしいことをっ！ 無防備にッ！ あまつさえ、こ、こど、子供とか、孕むとかっ！ は、はしたない……なんて姿を彼に見られて、いや別に敵なんだし見られたところでこれ以上ああでもあんなっ！ あ、あれではまるで……言の葉だけで敵呼ばわりしているだけの、良人同士の……どうしてあんなになつてたんだ昨日の私は——っ!!?)

恐る恐る記憶を引っ張り起こせば……責められてよがるばかりか、自ら腰を振った

り、抱き着いてより大きな快感や、口づけを請うたことまで思い出される。

中でも最もとんでもない記憶は……胡坐でベッドに座る彼に、これまた挿入されながら、その膝の上で、足を彼の体に回してがっちり……そのまま、子種を受け止めた。

ちなみにコレ、のちの世にて『だいしゆきホールド』と呼ばれる。

いつもと違いすぎる、やさしさに満ちたそれに酔ってしまった、あるいは比較しての丁寧さに心が緩んでしまった部分もあるのだろう。

(だ、だがそれを差し引いても……昨日の私はっ、まるで、ほ、本当の……あ——！)  
思い出すだけで頭がゆで上がりそうになる記憶と戦いながら……ビアンカは、全裸のまま、1人ベッドの上でゴロゴロと転がって悶え続けていた。

\$月\$日

ビアンカを抱いた翌日から僕は、すぐさま伝手を使って色々と細工を進めたわけだけど……早くもその成果が出た。彼女の希望を叶える形で。

結論から言うと、彼女たちの待遇を一定以上のレベルにするように、軍上層部、および皇帝陛下からの実質的なご裁可を得ることができた。これで、今までみたいな幽閉生活よりもだいい暮らしをさせてあげられるし、あの査察官共みたいな連中から手を

出されないように守ってやることも可能になった。

手段は簡単。彼女たちの利用価値と、そのための『品質』の保持、加えて、現時点において彼女たちから我が軍が受けることができた利益の報告。

それらを総合しての、今後の占領政策その他を見据えた、彼女たちを『飼い殺し』にするためのプランについて、多方面に甘い汁の気配をさせながらばらまいたのである。

まず、イゼツタの利用価値はもはや言うまでもないだろう。小国であるエイルシュタット公国を今に至るまでゲルマニアから守ってきた、その軍事力、戦闘力。

いくらゲールにはゾフィーや、そのクローンがあると云っても、アレにはアレの弱点があるし……そもそも性格的に扱いづらい。現状、いつ暴れるかわからんから常にガクブルってるし。

クローンに至っては……ちよつと前までのゾフィーみたいになら、使えるようになるかどうかともわからない。毎度イゼツタの血飲ませてうまくいくとも限らない。

それに、彼女の原動力は復讐心だ。エイルシュタット公国を滅ぼして本懐を果たしたら、もう戦わない、なんて言い出すかもしれないし……ファンタジーな物言いになるけど、成仏？しちゃうかもしれないしね……未練なくなつて。

対するイゼツタは……姫様Ⅱフィーネ大公命ではあるものの、そこをうまく利用すれば、こちらの戦力として動かさないこともない。極端な話、彼女の命を盾にして脅迫す

るとか。

……そんなんじや、恨みつらみが募っていつか破たんするだろうから、実際は適當な落としどころを見つけることになるだろうけどね。

まつすぐで純粹、誠実だからこそ……『使いこなす』という選択肢が取れ得る。

加えて、彼女たちをある程度とはいえ、無事なまま捕らえておけば、今後大公殿下やその部下たちを捕らえ、エイルシュタット公国を完全に支配下に置くことを考えた場合、利点足りうる。

民に人気のある統治者・関係者を皆殺しにして、怨嗟憎悪の中で統治を進めるより、それらを手駒にしてうまく使いつつ、懐柔する感じで進めていく方が楽だ。反発も抑えやすいし。

パルチザンの危険はあるけど、その辺は内政の進め方次第だろう。

イゼツタやビアンカには大公殿下を利用して言うことを聞かせ、逆に大公殿下たちにはイゼツタたちを利用して同様に。友情と臣従が同居してる彼女らは、そういう使い方ができる。

さらに、それらを後押しするために『情報』の操作も使った。

彼女たちへの『尋問』の結果としてわかった事実は何一つない。2人とも口が堅くて……こつちで調べられた以上のことは、その口から聞き出すことはできなかつた。

けど、彼女たちだけが情報源じゃない。諜報部隊を使って、独自に色々調べてもいるのだ。

そのルートで手に入れた情報のうち、よさそうなのをいくつか見繕って、『尋問の結果』として報告し、さらにそれによってある程度の手柄を立てる。

具体的には、諜報部隊に見つけさせた、エイルシユタットの小規模物資集積地の情報を、イゼツタ達への尋問によって聞き出したことにする。さらに、そこを摘発して成果を上げる。これにより、『尋問の結果わかった情報が役に立った』という事実を作り出す。

これが、彼女たちからの……消極的とはいえ、帝国への貢献になる。

これらを利用して、彼女たちを籠の鳥として『飼う』方針の有益さを軍全体にそれとなく喧伝、認めさせることに成功した。それにより、彼女たちはすでに『丁重に扱う』存在になった。

決して、拷問・尋問と称して兵士たち性処理に使える立場ではなくなったわけだ。

使えらるとすれば、彼女たちの身柄の管理責任者である僕がせいぜいだ。

とりあえず、そんな風なことを……まだ一応、イゼツタ共々病室泊まりであるピアンカに知らせておく。それを聞いて……まあ、プロセスがプロセスなので色々複雑だったようだけど、これ以上イゼツタが酷い目にあうことはないとわかり、ほっとしているよ

うだった。

ただし、と……彼女には、この策を弄したことによる『副作用』についても話しておく。

一応、彼女たちを丁重に扱うことができるようにはしたけども……この先ずつとこのままいけるわけではない。扱いを決めた上で……いずれは、『その範囲内で』最大の利益を上げられるように、彼女たちの身柄をうまく使う必要が出てくるのだ。

それも、彼女たちばかりでなく……これから捕えることになるであろう、大公殿下たちも。

例えば……帝国のためになる相手と政略結婚させるとか、ね。

それを話した際は、まあ……何も思うところがないわけではないけどはなさそうだった。

しかし、本来ならもつとひどい目にあつたり、容赦なく処断されても文句は言えない立場だというのもわかっているのか、反論はなかった。

とりあえず……それについて、いつ何が決まるかはわからないけど、覚悟くらいはしておいてくれ、と言つて、部屋を後にしようとしたところで……

後ろから、服の裾をつまむようにして……ピアノカが僕を止めた。

え……何？　なんか、顔赤いけど……

……『今日はしないのか』つて？

………いいの？

その代り『今後もイゼツタと、できれば姫様についても、格段の配慮を』？

……なるほど、またさらに取引を行おう……いや、いつそ続けようとするか。いいだろう……その誘い、乗らせてもらう（棒）

\$月△日

他人が手が出せないように大義名分作って保護しといて、自分は何してんだって話

……

いや、その……本来そういうキャラじゃないのに懸命に色仕掛けをしようとする、本当なら『くつ、殺せ』とか言いたそうな人を組み伏せるのって思いのほか興奮して……ね？

っていうか、実際捕まった当初とか言ってたし。彼女。

生で初めて見たわー、感動したわー。

そんなわけで、ここ数日は毎日ビアンカを抱えています。我ながら……はまった。

ビアンカは、最初こそ『好きにするがいい』みたいな感じで、嫌々だけど体を開いてます、みたいな感じで来る。ベッドの上で、服を全部脱いで、一糸まとわぬ全裸になつて……蠱惑的なポーズとか、無防備な姿とかさらして自分を差し出す。

そこで、何ていうんだろ……がつつきつつもがつつかず、とても言うかな。

お言葉に甘えて、喜んでいただくんだけど……言葉とは裏腹に、反発して角が立つて  
る部分をきちつとなげてほぐしつつ、ペろつといたただくというか……。

ビアンカの裸を見て、フル勃起状態の肉棒を、何の遠慮もなく性欲のままにそのオマ  
ンコにつきこんで、暴力的に腰を振って快感をむさぼりたい衝動を……あえて必死に抑  
える。

勢いのままにやるんじゃなく、スローセックスみたいな感じでじんわりと、徐々に、時  
間をかけて丁寧に、お互いにじわじわ快感を感じてため込むように抱く。

壊さないように、大切に扱っているんだと、行為をもつてビアンカに言い聞かすよう  
に。

それまで散々、肉便器扱いで乱暴にされてきた……しかしそれに耐えてきたビアンカ  
だが、どうもこういうのにはさすがに慣れてないようで、しばらくそうして責めている  
と、物足りないように、ものほしそうに身をよじってくる。顔も、凛々しくもなんかこう  
……とろつとろな感じに。

しまいには、もう雌の本能まみれになってどうしようもなくなつて、息も絶え絶えに  
淫語連発で必死におねだりするようになってくる。演技とか入ってない、素で。

最初の時に……今までひどく乱暴にされるばかりだったから、優しくするべきかな



……って思ってた結果そうなるから、コレが見たくてついつい同じようにしてしまおう。

『さあ、好きなようにしてくれ……約束さえ守ってくれるなら、どうしてくれようと構わない』

が

『え、遠慮などいらん……もつと、好きなように、乱暴に……！　そ、そうだ、あの者達のように、私の体のことなど考えずにくれてよいのだぞ……！』

になって、

『じ、焦らすなあ……こ、こんなの、知らない……は、早く終わらせて、でないと、わ、私……我慢、できなつ、ら、らめになつひやうう……』

を経て、

『もうお預けらめええっ！　らめ、なの、ほしいのおっ！　もつと来てえ、激しく、してえ！　おかひくなつひやうう！　乱暴にして、もつと気持ちいいのくださいいいいっ！！』

これで完成。

こうなつてからは、おねだり通りにハイペースに変更して……で、数時間。頭も体もグズグズにとろけ切ったところを、お互いの体力が尽きるまで犯しつくす。僕もビアンカも、軍人としてそれなり以上に鍛えてるので、体力あるから……結構長く続く。

そして、体力はあつても、快楽で思考能力がまともに残つてないところに、『全部中に出す』『敵国の子種で孕め』とか言つてあげると、

『はひひひいっ！ 孕む、孕んじやうう！ わ、わらひつ、えいるひゆたつとの軍人なのにいっ、げーりゆの子供できひやううっ！ 姫しゃま、ごめんなさいいっ！ わたひつ、近衛にやのに、敵の子ろも産んじやいましゅううう!!』

毎度これが見たくて、徹底的にやっちゃうんだよね……女騎士が墮ちるの、大好きです。

……まあ、避妊薬の投与は続いてるから、孕みやしないんだけど。

終わり際には、僕もさすがに限界で寝ぼけ眼ではあるが……うまくすれば焦点の定まつてないアへ顔まで見れちゃったりする。

汚つさんたちが犯つてた時はこんなことなかったのに……焦らすの弱点なのかな。

それとも、性欲とか尋問でなく、愛情でお互いを労つてやるような感じのセックスが好き、とか？

いやコレ、やってることは僕も思いっきり捕虜凌辱なんだけど……今までが今までだったから、かな。

そして、それが終われば気絶するように眠って……朝を迎える、と。

まあとりあえず、今日もビアンカはくつとして隣で脱力&就寝中。起きない。

欲望そのまま、全部膣内に放ったので……心なしかちよつとお腹が膨れているようにも見える。膣口からは、収まりきらない精液が……寝返りとか、身じろぎのたびに、ごぼりと。

あんだけやつといて、後のことはメイド達に任せて、僕は出勤……というのはさすがに気が引けるので、一応急ぎの要件がない限りは、彼女が起きるのを待つて出かけるようにしている。

……起きた瞬間の赤面↓どうか体裁を取り繕おうとして失敗、が見たいのもある。

今日は出勤時間のだいぶ前に起きてくれたので、朝ご飯をルームサービスの持つて来させた後で解散した。

さて、今日も仕事だ……つて、暇だからって何を仕事前に日記書いてんだろうね僕は。

\$月(日)

今日朝、イゼツタが目を覚ました。

酷い責め苦の果てに、僕の治療の最中に意識を失ってから、もう何日も経っていることに驚いてたけど……僕とピアンカの2人がかりできちんと説明したら、どうにか理解・納得したようだった。

当然、査察官の汚つさん共を追っ払ったことや、これからは多少待遇が改善されること、今までみたいな尋問は行われないこともきちんと話した。

……ピアンカの献身（意味深）については当然言わなかったけど。

それを聞いて……イゼツタは、普通に僕にお礼を言ってきた。

ありがとうございます、って。純粹さ極まる笑顔で。

……心が痛いですが、はい。きっちり対価受け取ってるんだよね……隣の人から。

ついでに言うなら、今まさにピアンカの子宮の中にまだ、かき出す前の精液がいくらか……

一応その日は、簡単な検査だけして……問題なしと判断。

服を脱がせてやったわけだけど、今まで治療とかでさんざん似たような状況で裸見ているので、イゼツタはそんなに恥ずかしがることもなく（全くとは言っていない）、すぐに終わった。

あとは静かに療養。ピアンカと雑談したりして過ごすようだ。

病室から移るのは、明日以降だな。

なお、今日くらいは2人でゆつくりさせてもばちは当たらないと思うので、ピアンカに連日お願いしている『夜のお勤め』は休みにした。

嬉しさ半分、落胆半分、って顔をされた。なぜ？

\$月・日

2人の身柄を、貴人用の牢獄……出歩けない以外はほとんど何不自由なく過ごせそうな豪華な座敷牢に移し、扱いもきちんと貴人の捕虜のそれにした。しかも、2人それぞれ個室である。

今後、彼女たちは尋問なんてものとは無縁の生活を送れる上に、ルームサービスのなものまで活用して（限度はあるが）快適に過ごせるだろう。

本とかも読めるし、毎日じゃないけど風呂にも入れるようにした。食事も今までに比べてかなりまとも、というか上質なものだ。兵士たちよりいいものが3食きっちり食べられる。

無論、この待遇の変化をよく思わない、というか、突然のことに戸惑っている者は多かった。

彼女たちをよく思わない兵士や士官たちからは、もつと厳しい対応を、つて進言が上がつてきたりもする。戦犯なのだから、今までのように、辱めすら伴った扱いを、と。

何割かは『おこぼれ』を期待してだろうけど、もうその可能性はない、と言いつつおく。

れつきとした、陛下やその周辺からの勧告に基づく処置の変化である、と。

さらに、別にこれで終わりではなく……この扱ひの変化は、次に彼女たちを使つて何か外交等政策を行うにあつての『準備』の一環である。

そう言い聞かせると、しぶしぶではあるが収まる。

いくら魔女憎しと言えど、皇帝陛下の命令に異を唱えるなんて命知らずなことではないし……待ってれば、また別な、それも相応の沙汰が下るつていう話だしね。

それが何になるのかは、僕にもはつきりとはわからないけど。

また、幾人かの古参兵や士官は、懐柔する作戦だと勝手に解釈して納得してくれてるようだ。

刑事ドラマとかでよくある手だな。厳しく取り調べる役割の刑事と、優しく対応する役割の刑事がいて……その2人が交互に犯人に対応することで心に隙間を作り、自供を促す。

今回の場合、苛烈極まりない『尋問』を査察官やゾフィーが長期間行つていた後に、僕が優しく相手をする事で籠絡を図っている、と見たわけか（勝手に）。うむ、好都合。まあ実際、イゼツタもピアノカも、自分に対してだいたい態度が軟化してる様子が目撃

されてるし……ピアンカに至っては、僕の部屋に連れ込んでいるのを目撃されてる上、ホントにやることやってるからな。

情報リークの話もあるし、籠絡したと思われても、不思議じゃない。

加えてイゼツタは……前も多少そうだったけど、僕に対して砕けた感じで、結構積極的に話してくるようになった。口調はきちんと？敬語だし、限度を超えてなれなれしい感じになることもないけど……かなりフランクといつていい。

傷を負うたびに治療してあげていたことや、敵だからと邪険に扱わずに僕の方も普通に接していたこと、今回の待遇改善でかなり心を開いてくれてるようだ。

ただ、気楽なばかりでなく……可能ならつて感じで、僕から聞けることは聞こうとしてくるけど。

主に、外の状況……敬愛する姫様こと、オルトフィーネ大公がどういう状況かとか。この戦争は今どんな感じになってるのかとか。

差し障りない範囲で教えてあげてる。

大公殿下のことは……取り逃がして以降は、自分も知らない。

けど、確実に公国もろとも追い詰められつつあることは確かだ……つて伝えたら、さすがにちよつとこたえたのか、表情つらそうにしてたけど。

それと……どうも彼女、若干ではあるが、ピアンカの様子に違和感を感じているよう

な仕草を見せているらしい。

詳しくどう、とわかつてる様子はなさそうだけど……ビアンカが実際、彼女を守るために自分の体を交渉材料にして僕に取り入っているわけなので……それを、なんとなく察しているのかも？

……って、今も僕の隣で寝ているビアンカにさつき聞いた。



## 06. 5 ビアンカ視点

?月Φ日

この身は、全て姫様……オルトファイネ大公殿下にささげた。心も体も、命までも。近衛として彼女に仕え始めたその日に、全てをささげた。

だからこそ、彼女を守って敵につかまったこの現状も……不本意な部分こそあれ、何も後悔はない。彼女が逃げ延びてくれたのであれば……このまま殺されても、本望だった。

しかし、私が送ってこられた先には……私をさいなむ、もう1つの地獄があった。イゼツタ……：エイルシユタツトの白き魔女。

私と同じく、姫様に全てをささげる覚悟を持って戦った……私が認める戦友だ。

その彼女が……ゾファイなる魔女がゲールに現れ、ランツブルックが陥落させられたあの日以来、行方不明になっていた彼女が……そこにいた。

あの日からずっと……帝国軍によって与えられる責め苦に、辱めに……たった一人耐えていた。

話してみた感じ、疲弊はしているようだが、致命的な心の傷を抱えているという感じ

ではないように思えた……今は、だが。

しかし、あの顔を、目を見て、つらそうに沈んだ声を耳にすれば……彼女がいかにつらい責め苦を受けているのか、感じ取ることとはできる。

……部屋にこもっている独特のにおいや、よく見ないとわからない血の跡に気づけば……なおさらだ。

汚らわしい……。こんな健気な少女に、下卑た責め苦を与えているゲール達を、今すぐにも殺してしまいたい……。そんな衝動が湧き上がってくる。不可能だと、わかりつつも。

それどころか……。明日には、私もそうなついてもおかしくないのだ。

……私たちの戦いは、むしろこれからだ。

私も頑張つて耐えよう……。だからすまん、イゼツタ……。お前も耐えてくれ。

身勝手な物言いなのはわかっているが……。私たちが共に慕う、姫様のために。

&月△日

……予想も覚悟もしていたが、やはり……。つらい。

処女などくれてやった。その上で、いかなる辱めをどれだけ受けても耐えてみせた。

隣で同じように辱められるイゼツタと共に、屈せず、口を割らず。

朝起きてから夜寝るまで、一切の自由行動を許されず……好きな時間にやってくるゲール共が、私たちの体をもてあそぶ。

薄汚れた、吐きそうな匂いの肉棒でもって、私たちの……女の秘所をむさぼり、痛めつけ……遠慮も何もなしに、欲望を吐き出していく。

汚らわしいゲールの子種に……姫様にささげたこの体を、内側から汚される。

ゴリゴリと膣内をえぐられ、種を注がれる……妊娠、してしまつたかもしれない。

全て終われば放り出され、私の体は異臭を放つ白濁液にまみれている。

呼吸するたびに、嗅ぎたくもない匂いが鼻の奥に流れ込んでくる。

悔しい。苦しい。……許されるなら、死んでしまいたい。

しかし、それもできない……自殺すれば、そこで終わる。これ以上、姫様の役に立つことができない……いつか必ず立ち上がるであろう、姫様のそのお側にはせ参じ、共に戦うことが。

もしかしたら……そんな機会は永遠に訪れないのかもしれないが……それでも、最後まで。

時に……陰鬱な気分を紛らわすために、イゼツタと無理に話題を探して行つた世間話で……彼女の口から、この基地にもまともなゲール兵がいると聞かされた。

どうやら、初日に見かけた、金髪に眼帯の男がそうらしい。

私はその男を知っている。

と言つても、見たことがあるとか、知り合いだとかではなく……情報としてだ。

帝国軍少佐……ソロモン・フォン・サンジェルマン。私の記憶に間違いがなければ……帝国軍における要注意人物の1人だ。ミユラー首席補佐官も、注意を向けていた1人だったはず。

帝国の参謀将校であり、まだ若いながら多数の戦場で劣勢をひっくり返している名将。

その戦歴はまさに百戦錬磨。

帝国の未来を担う若き俊英、とまで言われており……その期待を裏付けるかのよう  
に、エイルシュタットの占領統治府の、暫定指揮権を与えられていると聞く。

そして、彼の父親……帝国軍大佐、メフィスト・フォン・サンジェルマンは……イゼツ  
タが参戦した戦いで戦死している。

すなわち、イゼツタは彼にとつて……父の仇。

さらに、情報が確かなら……同時に、自分の左目の仇でもある。

そんな間柄なのだから、余計にイゼツタが、彼を誉めるようなことを、ことあるごと  
につぶやく理由が理解できなかつた。

……確かに、あの男が使う『錬金術』の力は驚異的だ。

まさか、数日……あるいは数週間をかけて治すような傷が、わずか数分、短いもので数秒で、跡形もなく癒えるとは……。しかも、副作用らしい副作用もなく。

しかし、やはり心情的にはわからなかったのだが……。どうやら彼が、一般的なゲールの軍人とは違いそうだというのは確からしい。

感覚ではあるが、何度か話してみようちに……。そう、思えてきた。イゼツタは、もつとこの感覚を鋭敏に、あるいは正確に感じ取っているのか……？

\$月#日

……何かに気づけそうになって……。気を抜いたかもしれない。

いや、気を抜こうが抜くまいが……。やられることは変わらないか。

このところ、ゲール共によってもたらされる責め苦が……。ひどい。

今まではやらなかった、身の毛もよだつような内容のものがあつたり……。それについて、後から適切な衛生的処置がなされなかつたり……

加えて、出先から帰ってきたらしいゾフィーによる、イゼツタが死んでしまいそうになるほどの責め苦を何度も……

目の前で繰り返し広げられるそれに耐えきれず、思わず声を上げて止めてしまったのだが……結果、ゾフィーを喜ばせるだけに終わった。

しかもいつからか……拷問の後、私たちの体に刻まれた傷を……そして、他愛ない雑談の中で心の傷すらも癒してくれていた、あの男が……現れなくなつた。

兵士たちの話によれば……：我らが見限られたのでもなければ、作戦でこうしているわけでもないのだが……単に用事、というか、別件での軍務らしい。

その間、『普通の』医療措置しか施されずにいた我々は……特に、ゾフィーの責め苦を連日受け続けているイゼツタは、すでに虫の息になりつつある。

このままでは……死んで、しまう。

\$月十日

……どうにか助かつた。

出先から帰ってきたサンジェルマン少佐が、我らを助けてくれたとのことだ。

ただ傷を癒すのみならず、我々をもてあそんでいた者達をあちこちに飛ばし、我々に近づけないようにしたようだ。……こればかりは、素直に感謝せねばなるまい。

そして、今回の一件で確信した。

彼は、イゼツタの言う通り……優しい。

もつと正確に言えば……甘いのだ。

彼は私たちを、単なる敵国の兵士ではなく、非力な女として見て、無意識に温情をか

けている。

そしてそれに、彼もはつきりとは気づいていない。

……利用できる。

そうしなければ……できなければ……この先、まずい。

今までのように責められることはもうないのかもしれないが、どの道戦犯、ろくなことにはならないだろう……。

だが、この男なら……。

傷ついたイゼツタを……彼女を助けることができる。

なんなら今すぐにでも、できないことはないはずなのだ……そしてそれを、恐らくはサンジェルマン自身も望んでいる。

しかし、本人がそれに気づいていない上、踏ん切りがつかなくてここに介入することができずにいると見た。

つまり……必要なのは、きつかけだ。

奴の背中を後押ししてやればいいのだ。奴の力を行使してイゼツタを助けるための、確たる理由を……より正確に言えば、『言い訳』ないし『口実』を……こちらで用意してやればいいのだ。

敵兵であり、本来は憎み、痛めつけなければならぬ立場の私達を、逆に『助ける』。

奴がそれに踏み切るための……他でもない、自分を納得させる大義名分。

それさえあれば……

……そう気づいた私は、覚悟を決めた。

頭を下げた。無様にも裸で、床に額をこすりつけた。

恥も外聞も意地も捨てて、許しを請うた。イゼツタを助けてくれと懇願した。

そして対価に……私を差し出した。

それを……色々と葛藤しつつも、最終的に無理やりに近い形で押し切り、受け取らせた。

すなわち……私は自分から、奴のベッドの上で股を開いて……体を差し出したのだ。

奴はそれを受け取った。すなわち、私を抱いた。

そして、私の読み通り……その『対価』を受け取ったことを理由にして、私の願いを聞いてくれた。それどころか……イゼツタのみならず、私の身の安全の保障まで。

……万事、うまくいった。これで少なくとも、今以上に状況が悪くなることは……彼の上から何か言われたりしない限りは、ないだろう。

後悔はない。今はこれが、最善の方策。

私の体で、イゼツタの心身の安全が保障されるなら……安いものだ。

……いや、待て。



1つ……あつた。不安な要素が。

……そ、その……今まで、激しくつらい責め苦しか味わってこなかったからなのかもしれないが……彼の手つきというか、手管というか……こちらをいたわるような抱き方がその……こ、心地よくて困る。

愛すら感じるその手法は、私の体を内側からじんわりと温めてくれるようで……安心する。

そのあまり……ついつい、心を許して甘えなくなつて……加えて、ふ、普通に快感が、しかも怒涛のように押し寄せるものだから……

……いつも、最初こそドライな感じで応対しているのに……最後には……

あ、あんな風に乱れて！ いやらしい娼婦のように！

い、いや……娼婦でもあんな言い方はしないぞ、演技ならともかく……ほ、本心から！ あ、あれではまるで……身も心もゆだねてしまうかのように……。

い、いや逆に考えろ。

あんな風な……あ、あえて言うなら、愛に満ちたようなセックスを施してくれるのだ。相当彼は私の肉体に入れ込んでいるに違いない。

ならばその分、私も彼を操りやすくなる……そうだ、何も問題ない。これはいいことなんだ。

言い訳でも何でもなく、彼をより確実に抑えることができれば、エイルシュタットの有利性が増すのだから……

……だから、昨日一昨日と抱かれていない私が、改めて女の味を彼に味わわせるため、こうしてその……誘うように声をかけるのも、至極自然なことなのだ。

な、なあ、今日、その……そ、そうかわかった。後で行く。

うん、これは仕方ないんだ……決して、私が快樂に溺れつつあるなんてことは……  
彼とのセックスが忘れられないとか……そんなことは決して……

……………♪

## 07 魔女の意地と揺れる心

@月〇日

……なんだ。その……前にもこんなことなかったか。

具体的には、2週間くらい前に。場所は病室で……ピアノカから、全裸で。

ただし、今回僕の目の前で、差し出すように垂れている頭は、鮮やかな赤髪なんだけど。

ことの発端は、昼間だったと思う。

もう大丈夫だとは思うんだけど、一応まだ続けていた健康診断の時……ふと、イゼツタとピアノカが、医務室の机の上に置きっぱなしになっていた、昨日の新聞を見つけた。本は読めるけど、基本外部と情報のやりとりを、一方通行でも遮断している捕虜たちに対しては、新聞は支給されない。なので、2人は興味を示し……僕に許可取って読み始めた。

そして……見る見るうちに顔色を青くした。

……まあ、書かれてる内容がね。

彼女たちの視点からすれば、かなり絶望的な流れができていることを示してたから

ね。

ゾフィー無双によるロンデニウム陥落。ブリタニア降伏寸前。

連合軍、多数の戦線で乾坤一擲の攻勢に出るも、帝国軍の戦線を食い破れず。逆に各個撃破される軍も出てくる始末。

加えて、帝国軍は新たな兵器をいくつも、次々に戦線に投入。破竹の勢いで進撃を続けている。

すでに連合軍を構成する国家群の4割は制圧・占領された。もしくは自分から降伏した。

他国の機密情報を手土産に……すなわち売り渡す形で恩赦を願い出た国もある。

今や連合軍は加速度的にその力を失ってきている。崩壊も時間の問題。

ここにきて帝国を止められるとすれば、不可侵条約を結んでいる連邦か、大西洋の向こうの合衆国のみ。そのどちらも、今の帝国を危険視してはいるものの、すぐに動く兆しはない。

動くとしても、おそらく連合軍の壊滅には間に合わないだろうという見通し。

……というか、おそらく動き出したところで無理だと思うけど。多少寿命が延びるだけだ。

とどめに、連合軍……というか、現在帝国を困らせている国の首脳陣の首に、西部劇

張りに賞金がかけられている。もちろん……オルトフィーネ大公殿下にも。

占領地拡大と外交政策により亡命もできなくなりつつある状況下、これら戦犯たちが捕まるのも時間の問題か………という感じで、記事は締めくくられていた。

それっきり、2人とも沈んだ感じになっちゃったので、部屋に返したんだけど……その夜、見張りの兵士に連れられて、僕の部屋を訪ねてくる者がいた。

てつきりビアンカかと思っただけ………それにしちやちよつと時間が早い。

通してみたなら……イゼツタだった。

そして、冒頭のシーンに至る。

大雑把には、ビアンカの時と同じ。『何でもするから、お願い事を聞いてほしい』って奴。

今回イゼツタが望んだのは……このままでは遠からず捕まるであろう、大公殿下について。

エイルシュタット公国は、この大戦において、物質的・面子的に最も帝国にダメージを与えた国だ。その実行犯はイゼツタであるとはいえ、大公殿下はその元締めであり国の象徴。反発感情は大きく……戦犯として処刑されることもありうる（つて、ビアンカに聞いたらしい）。

それだけならまだ……よくは決してないけど、あえて、『まだ、いい』。

悪ければ……イゼツタらと同じように、地獄のような責め苦を味わった末に死を迎える、なんてことになるかもしれない。大公殿下のみならず、その周辺の者達もだ。

それを危ぶんだイゼツタが、こうしてわざわざ夜になってから僕の部屋を訪ねてきて……まあ、予想通りではあるけど、『どうにかお力添えを』つてことらしい。

これまたビアンカと同じく……自分の体を、否、『全て』を対価に捧げる覚悟で。

全裸でこそないものの、この短期間に二度も美少女に土下座かまされて怯んでいる僕に向けて……イゼツタは、必死さを感じ取れる声音で、

『私にできることなら、何でもします。体も……魔法も……全部、全部差し出します。だからお願い……姫様を、助けてください。このままじゃ、姫様は……どうなるか……！』

『今まで私は、帝国との戦いで……たくさん戦車や戦闘機を壊して……たくさんの人命を奪ってきました。だから、この前まで受けていた、ああいう仕打ちも仕方ない、つて思っていました。帝国の人達にとつて、私は憎い相手だから……もちろん、あなたにとつても』

『部下の人から聞きました……あなたのお父様と、あなたのおその目……私のせいで失つたつて』

『そんな私が、こんな風にあなたに頼みごとをするなんて、ひどいと思います。恥知らずだって、厚かましいって……わかってます。でも、私にはもう、これしかできないんで

す……私、頭悪いから、これしか思いつかなくて……！ 捕虜だから、私もう、差し出せるものなんて、他に何もなし、戦い以外は任せきりだったから、情報も知らないし、持つてないけど……せめて……』

顔を上げて、服を脱いで……裸体を隠そうともせず、僕の目の前まで歩いてきて……また跪く。

『全部、あげます。何でもします。だから……姫様を……フイーネを……少しでも……！』

うるんだ目で、そう訴えてくるイゼツタ。

その、女性らしい魅力的な体に……時間的には、いつもそろそろピアンカをベッドに連れ込んで色々始めるあたりで、徐々にそういう欲求が持ち上がったこともあり……反射的に、というか本能的に……恥ずかしさで顔を赤く染める彼女の裸体に、手が伸びそうになって……

扉をばたん、と開けて『までイゼツタ！ それは私の役目だ！』と叫びながらピアンカが乱入してきたところで、僕もイゼツタもひっくり返りそうなほど驚いた。

@月&日

今日は一段と、太陽が黄色い……いや、やっぱいつもと変わらない気がする。

いつもの違いはむしろ、もっと近くにわかりやすいのがある。

左隣を見れば、いつもと同じように、裸で色々塗れてべとべとのビアンカが寝ている。……で、右隣にはもう1人……同じように裸でべとべとのイゼツタが寝ている。

2人とも……ほとんど夜通し僕の相手をして、くたくたのはずだから……しばらく起きないだろうな。

昨日あの後……ビアンカが乱入してきて、イゼツタに『それは私の役目だ！』って言い放つてから……なんだかんであつてこうなつた。

え、具体的に？

『止めないでくださいビアンカさん！ 私、姫様の……フィーネのためなら、このくらい！』

『もういいんだイゼツタ……もうお前は戦わなくていい。十分に姫様のために尽くしてくれた……だから後は私の役目だ！ もう何も背負わなくていいんだ……！』

『そんなことありません！ 私、まだ姫様のために、私にできることがあるなら、全部やりたい！ 結局私……偉そうなことを言っておいて、それなのに、最後まで姫様のために戦い続けられなかった……だから、せめて姫様を守るために、私の全部を使いたいです！』

『それこそ、そんなことはない！ お前はもう十分苦しんだ！ これ以上自分を犠牲に



する必要などない！ お前に姫様が、我々が、エイルシユタツトがどれだけ助けられたか……もう、これ以上は見えていられないんだ……！ 頼む、もう……休んでくれ……！』

『……ありがとう、ビアンカさん。でも私……最後の最後まで、姫様のために戦いたいです。それが……私が命全部使ってもやりたい、たった一つのことだから……』

『……お前はっ、どうして……そこまで……』

と、この辺でビアンカが泣き出したかと思つたら……突如、不意打ち気味に僕に突撃してきて、そのままベッドに押し倒された。

そして、まるで『イゼツタには手は出させない、自分が全部やる！』とでも言いたげな感じで、僕の服を脱がせにかかつて……そのまま、開始。

急ぐあまり、前戯もそぞろに僕のペニス（勃起済）を受け入れたビアンカは、そのまま……結果的に、自分で動いて僕に奉仕する感じでセックスを進めて、

いきなり始まった交尾を前にして、イゼツタは顔を赤くしてあつけにとられてた。

生々しい行為を目にして……というよりは、普段凛々しいビアンカが自分から男にそういう行為を……っていうこのシーンが、ギャップ的な意味で目が離せなかつたらしい。

汚つさんらの輪姦の時は、基本向こうが強引に、って感じだったし。

しかも……ここんどこ毎日抱いてたせいで、いい具合にビアンカの体、僕好みに関発

が進んじやつてる感じだから……徐々に声に艶が入ってきて、またそこが普段とのギヤツプ。

『え？ え？ び、ピアンカさんが、あんな……う、うわー……』って、独り言が丸聞こえ。

しかし、ピアンカが程よくとろんとしてきたところで……ようやく我に返ったイゼツタは、自分も加わろうとして、しかしピアンカに止められた……と思つたら、何を考えたか、僕じゃなくてピアンカに突貫して責めにかかった。

これにはピアンカも驚いたが、すでに脱力に近い状態だったので、抵抗もろくにできず。

後になってみると、あれって彼女のなりに考えて……ひよつとしたら、ピアンカが限界になったら自分も加われる、とか、テンパった頭で考えた結果なのかも。

え、僕？ ……眼福だったので放置しました。

いや、だって……裸の女の子が2人、目の前で、しかも片方は僕のを啜えこんだ状態でくんずほぐれつ……ね、眼福でしょ？

そのままなんやかんやで……気が付けば、立場が逆転。

思わぬ強襲で、早々にダウンしてしまったピアンカを押しつけ……騎上位で僕のを啜えこんだイゼツタを、いつもピアンカにやるようにスローセックスで責めてあげて。

その様子を、ビアンカが何とも言えない……色々混じった表情でガン見してるとい  
う。

最初こそ『私が相手をするからイゼツタには手を出さないでくれ!』って言ってたもの……いつもの自分と同様、徐々に快楽でいっぱいになってきたイゼツタの乱れ方を見て、しかしそれがほほイコールでいつもの自分の姿だと気づいてショートして、

そうこうしている間に、雌の本能か、はたまた条件反射か、色々うずきだしてきたよう  
うで。

そしてさらに……今まさにやっているイゼツタの方も、意外にまんざらでもないとい  
うか、行為に抵抗がない感じで、割と積極的に奉仕してきて。

……気が付けば、3Pになっていた。

交互に僕のを膣で受け入れる、ビアンカとイゼツタ。一方が僕とまぐわっている間、  
もう一方は僕に、あるいはもう一方に援護射撃的に奉仕して責めたてて……って感じ  
で。

幾度となく彼女たちの膣内で射精し、あるいは体にぶっかけてマーキングするかのよ  
うに。

最終的には、同じようにとろつとろになったイゼツタとビアンカに、膣内の一番奥で

思いつきり一滴残らず注ぎ込む、言葉責めも忘れないでの種付けプレイ（付かないけど）。

『孕め』の殺し文句で、雌の本能を刺激されて、快感をこらえきれず、多幸福感を隠そうともせず喘ぎ散らす2人に、思いつきり欲望をぶつけ続けたあたりで……記憶が途切れている。

それから数時間。寝て、体力を回復して起きてみれば……この有様。

……まあ、いい。しかしまた、やるが増えたな。

この2人の保護に加えて……まだ捕まってない、しかしもう捕まるのは時間の問題であろう、オルトフイーネ大公殿下の身の安全の保障まで、どうにかして考えないといけなくなつた。

……面倒ではあるが、これも前と同じく、すでに対価をもらった事柄だ。

あれだけ濃密に交わり、相手をしてもらい……好きなように彼女の体を堪能した上に、何度も何度も膣内に注ぎ込んで、ピアンカ同様あふれるくらいにいっぱいにしておいて、約束を反故にするという選択肢は……僕にはありえない。

誰かが、交渉や約束事は、立場が対等でなければ意味がないって言ったらしいけど、知らん。

さて、そうなる……今度は『姫様』の利用価値を喧伝なり何なりする必要が出てく

るか。

立場が立場だし、今回はそれほど難易度高くはなさそうだ。すぐできるな。

というか、イゼツタ達の喧伝の時にある程度一緒にやつてたから、土台はできてるな。

……問題は……どう利用するか、その後の安全をどう確保するか……か。

こないだの裏工作でそこそこ目立ちちゃった上に……最近、魔女関連の技術革新、それによる各担当将校への陛下の警戒が増している現状を考えると……中タリスキーで難しい問題だな。

さて、どうしたもんか。

………いつそ……いや、何でもない。

@月^日

表向き、何事もなく、今まで通り過ごしている。

形だけの聴取、そこでの雑談……時々、きまぐれで座敷牢に出向いて雑談。

夜になれば……その日の調子とか体調を見て、あるいは気分で、どちらかの部屋へ。

あるいは両方を自分の部屋に呼ぶ。

ピアノカとの……口調の端々に反発するような感情をにじませつつも、最終的には快

感に屈してしまう、女騎士を征服するような一晩を楽しむもよし。

イゼツタとの……好感度も悪くなく、従順で、尽くすように奉仕してくれるプレイに、思う存分甘えて、欲望のはけ口になってもらうもよし。

特にイゼツタは、慣れない手つきでも……なんていうか、ホントに真剣に相手を、と  
いうか奉仕をしてきている感じなので、単に気持ちいいだけでなく、その……征服感  
があつていい感じ。心の奥底にある、支配欲が満たされる……とでも言えればいいか。

なまじ、汚っさんらの拷問で色んな目に合わされている分、男性器の扱いや気持ちよ  
くなり方にある程度知識があるため、それを活用して感じる。

まあそれも、自分で積極的に奉仕していくだけの余裕があるうちの話で……こつちが  
攻めに回ると、されるがままによがる感じで……まあ、こつちはこつちで気分いいんだ  
けど。

たぶん、と弾む豊かな胸に、形がよくて安産型のお尻、そして、やわらかいのに締ま  
りがよくて、ぎゅううう……と心地よく肉棒に絡みつく、名器と言つていい肉壺。

どれをとつても、最高に楽しみ甲斐のある女体を好きにできる。これらを使つて奉仕  
してくれる。

初めて抱いたときは……正直、汚っさんらが夢中になるのもわかる気がしたもんだ。

彼女自身の内面の清純さ、まっすぐさも相まっていいスパイスになり……ため込んで

性欲全部ぶつけるつもりで、何度も何度も犯してしまつて……抜かすの何発だつて感じで、ひたすら彼女の膣内に子種汁を注ぎ込み続けた。

避妊薬の投与を行つてなければ、ほぼ間違ひなく妊娠させてたであろう量を。

実のところ、このまま自分のものになりたい、という欲求さえ、最近を感じる。

愛人にして、囲つてしまつて、毎晩、いつでも心行くまで愛して……ゆくゆくは、孕ませて。

永遠に、骨の髄まで僕のものにしてしまいたい。

……なんかもう、ピアンカとあわせて……僕の方が本当に2人に籠絡されてしまったような気がしなくもない。

何度か僕の部屋に2人そろつて呼ばれてるため、ちよつとした噂としてささやかれてる程度のものであるんだけど……嘘から出た真、になりつつある、かも。

というか、僕の気のせいじゃなければ……2人とも、それも視野に入れてる節がある。

もろに籠絡して手駒に、つて感じでは別にないんだけど……情を湧かせて、自分たちに感情移入させて、意見を通りやすくして……おねだりを聞いてもらえるような間柄になつてもらふような。

その延長上で……大公殿下の身の安全とか、そのあたりに役立てば、つて感じだ。

実のところ……そっちについては、手を出した責任で最大限の便宜を図るつもりなので、そこまで必死にならなくてもいいんだけどね？

まあ、力を入れてくれる分にはこっちも気持ちいいので、助かるけども。

@月%日

とうとう、というべきか。

中央……というよりも、陛下からアクションがあつた。

といつても、それほど悪い知らせが来たわけでもなく、むしろ、こちらとしては大歓迎な内容だったりする……文面通りに読み取れば、だけど。

通信使によつてもたらされた指令は、『ランツブルックにおける占領統治府における暫定責任者の任を解く。中央から派遣される後任者に速やかに引継ぎを行い、本国に帰還せよ。なお、戦略的見地における重要虜囚については同行させ、引き続き少佐の管理下に置くこと』とのことだ。

一見すれば更迭ともとられかねない内容だが……そもそも僕は、ランツブルックの『暫定』の責任者だった。元々本職が来るまでの間に合わせでここにいた軍人に過ぎないのである。なので、特に問題はない。

……問題は、それと一緒に入ってきたもう一つの指令だ。



『今後、エイルシュタット公国占領統治府および前線司令部は、ランツブルックからゼルンへ遷移するものとする。引継ぎの条項に盛り込みの上、速やかに準備されたし』  
エイルシュタットの首都であるランツブルックではなく、わざわざ副都心のゼルンに……何で？

交通の要所であるとはいえ、利便性についてはランツブルックに圧倒的に劣るのに……。

……そして、さらにもう一つ。

これは、指令としてきたわけじゃなく、僕が部下に調査させた結果として別口で入ってきた情報なんだけど……

……どうやら、『エクセニウム』を使って研究されていた、例の新型爆弾が完成したらしい。

実験風景を記録したフィルムを入手したので、見てみたんだけど……何だコレ。

……見事な、キノコ雲。

しかも、形からしてアレな弾頭を、『ミサイル』という名の新兵器に搭載し、それをゾフィーの……魔女の力で発射して目的地に着弾させるって？

一撃で戦略爆撃以上の威力をたたき出すって？

……どう見ても核です本当にありますがどうございました。

ベルクマンの研究を、軍事利用目的に徹底的に発展させた結果がコレか……。

僕の前世の原爆とかとは違って、燃料が魔力だから、放射能とかはまき散らさないよ  
うだけど……ほとんど何の慰めにもならんぞコレ。威力がそもそも凶悪すぎる。

前世とはいえ、類似品を2発も落とされてる国の出身者としては……コレはさすが  
に、祖国最強！ともろ手を挙げて喜ぶ気にはなれない……。

コレ、本気で帝国このまま突っ走らせたらまずいんじゃ……。

そしてだ。そもそも、このタイミングでランツブルックから帝国軍の施設を遷移……  
つまりは、撤退させる理由を考えると……最悪の予想が組み上がる。

……ランツブルックを……ここを的にして、火力実験やる気か……あのヒゲ。

……これはいいよ……覚悟決めなきゃいけないかもわからんね。

## 08 未来の分岐点

@月%日

ベルクマン中佐が行方不明になった、と連絡があつた。

親衛隊についていった何かの作戦行動の途中で、消息が途絶えたらしい。

まあ、そんなに驚くことじゃない。ある意味当然というか……予想通りだ。

ヤバそうだが、つて話は前から聞いてたし。時間の問題だろうと思つていた。

あの人なら、いくら皇帝に目をつけられたからといっても、そう簡単に殺されやしないだろうと。

転んでもただじゃ起きない男だ。自らの目的達成のために、手段を選ばない。

しかしこうなると、次の彼の行動は……亡命か、あるいは……「勝ち馬に乗る」かだ。

しかし、追われる身となっているであろう以上、その「勝ち馬」はゲールではあり得ない。他に用意する必要がある。

となると、その最有力候補は……

……まずいな。下手をすると、こっちにまで火の粉、もとい、とばっちりが来る。

が、上手く利用出来れば……

……これはちよつくら、時間をかけて慎重に考えなきやいけないかな。

作戦参謀の腕の見せ所だ。

……こつちもまあ……祖国のためにじや、ないけどね。

@月\*日

汽車の上なう。

第二次大戦ちつくな世界観ゆえか、この世界ではいまだに蒸気機関車が活躍している。

馬力もあり、壊れにくいので、大量の物資や兵員の輸送には重宝されている。

当然、軍は戦争中には頻繁にお世話になる。

今日も僕は、ランツブルックの駐屯地を撤収し、そこからの物資と人員の移動のためにこうしてお世話になっている。

自分や、イゼッタ、ビアンカも含めてだ。

彼女達には、今後の予定も話してある。

これからエイルシュタットを出て、ゲール本国の僕の家に向かう。そしてそこで、これから君たちがどうなるか決まる……と。

正確には、どうするか決めた陛下の勅令を聞く。

なおその際、ランツブルックと違ってレイラインの通っている…すなわち、魔法か使える地域を通るわけだけど、問題はない。

イゼッタの首には、僕が錬金術の応用で作り出した、魔法を封印する効果のある首輪がはめられている。

これがある限り、イゼッタはどれだけ太いレイラインが通っていても魔法を使えない。

事前にそれを説明した時、2人共、少しがっかりした様子だった。

直後にそれに気づいて、ぼつが悪そうにした。

まあ、そりゃ、隙があれば逃げようと思えるのは当然だしね。別に責めたりはしないよ。

けどそれ以上に…特にビアンカが、ゲールの魔法関連の技術が、大きく進んでいることに戦慄していた。

すでに、レイラインの有無によらずに魔法を無効化することまで可能になっている。

であれば、他の応用ないし補助技術…それこそ、魔女に力の強化や、最悪は汎用化すら可能になっているのではないかと。

つい最近、魔女という手札を得て、最初から強力過ぎるそれに頼りきりだったエイル

シユタットからすれば、想像すらしづらいのも無理はない。ずっと旅ばかりの人生の中で、「魔女の力とはこういうもの」と教えられ、その通りの考えしか持っていなかったイゼツタも同様だ。

ただでさえ強力なこの力を、より強く、より使いやすく改良した技術が、敵にある（かもしれない）。

その意味がわからないほど、2人も鈍くはなかった。

まあもちろん、どこまで進んでいるかなんてのは軍事機密だから答えなかったけど……暗に「樂觀視はしない方がいい」とだけ言っておいた。

ちよつと意地悪な言い方なのはわかってるけど……事実だし。

それを聞いて2人は、思案するような顔になり……しばらくすると、どちらももとの調子に戻ったようだった。

そこに至るまで、彼女達が脳内でどんな考えを張り巡らしたのかは……わからなかったし、特に聞きもしなかった。

……もうじき、考える必要も無くなるんだけどね。

上手く行けば、だけど。

@月?日

鉄道ダイヤの関係で、エイルシユタツトから出るまでに一泊して間を置くことになった。

物資・兵員の輸送の都合によるものとのことで、路線を使えないそう。

まあ、もともとエイルシユタツトへ侵攻した当初の目的が、同盟国である連邦とのそれらの流通を円滑にする為の経路の確保だったわけなので、何も別におかしくはない。

陛下の命令に基づいた異動とはいえ、突然なのはこつちだったわけだし。

……問題は、その一泊する間に、派遣先から戻ってきた査察官という名の汚つさんが合流することになったことと、

付近で散発的に起こった戦線の整理のため、僕の旅程が一部ずれることになったことだ。

これに際し、汚つさんからわざとらしくも「陛下のご意志による人事を少しでも円滑に実施するため、捕虜の護送を自分が引き受けたい」との連絡が入った。

つまり、イゼツタとビアンカは自分が預かって責任もって本国まで運ぶから、お前は残って仕事してから来い、ということだ。

その間にナニをする気なのか、魂胆が見え見えであるが。

さぞ面白くなかったことだろう。他人の後始末のための人事異動で、それまでお気に入りだった女体という名の玩具×2と引き離されるのは。

行った先でもどうせ娼婦なり捕虜なり抱いてたんだらうけど。

僕と彼女らを引き離して、その間に何をする気なのか……まあ、考えるまでもない。久しぶりに、その欲望を彼女らの若い体につけるつもりでいるはずだ。ご丁寧に、部下……というか、取り巻き達も伴ってるし。

保護以降も、僕が彼女らと懇ろだったのも、噂レベルなら話に聞いてるだらうし、叱責されたらそれを理由にごまかすつもりなんだろうな。

……まあ、その辺を含めて……こっちの想定内なわけだが。  
さて……明日が楽しみだ。

こちらはこちらで、準備を万全にしておかないと。

☆☆☆

ある場所、ある時間。

アルプス山脈の山麓にある、とある寂れた軍用施設にて。

「それは……確かなのか？」

「はい。信頼できる筋からの情報です。ただ、どうしても伝達の関係上、差し迫った直前のものになってしまいました……」

「それについては構わん。むしろ、こんな状況下で、我々が最も望む情報が手に入った



のだ。これ以上は何も望むまい」

住み心地はいいとは言えないが、地図にも乗っていないがゆえに、潜伏先として優秀と言えるそこに……オルトフィーネ大公以下、逃亡生活を続ける、エイルシユタツト公国の重鎮達はいた。

帝国の占領統治府によつて指名手配され、今や追われる身である彼女らは、ジーク首席補佐官が持ち帰つたある情報に、目の色を変えていた。

『拘留中の重要人物が、近日中にランツブルックからゲルマニア本国へ護送される』  
この情報を聞いて、そこにいる全員が、イゼツタとピアンカのことだとわかつた。

片や、先のゼルン回廊の戦いで囚われの身となり、奪還も失敗、未だに帝国の手中にある……フィーネの親友。

片や、公国に、フィーネに忠誠を誓い、いついかなる時も彼女らを守ってきた……先の撤退戦で、自分たちを逃がすために殿を務めて捕まつた、皆からの信頼厚い近衛の隊長。

その2人を奪還するチャンスが巡ってきた事実……食欲も衰え、以前に比べてすっかりやつれてしまったフィーネの瞳に、光が戻っていた。

もうひと月以上もその顔を見ていない親友と、いつでも自分を守ってくれていた懐刀。ともすれば、もう二度と会えないのではないかと何度も思つて枕を濡らした、彼女

達と。

しかし、同時に不安もある。

単純に……その隙を突いたとしても、圧倒的に数で勝るであろうゲールからの奪還が可能なのか、ということもある。

が、それ以上に……これからどうするか、という点にも不安があるのだ。

「国境の管理は厳重、周辺国家への圧力もあり、亡命申請も移動も困難である以上、勝機をこじ開けるにはここを狙う他にない……それも事実だ」

直近に襲ってきたゲールの部隊。そこから国を裏切る形で彼女達の一団に入ってきた、アルノルト・ベルクマン中佐。

彼によってもたらされた、ゲルマニア帝国が完成させた新型爆弾の存在。一撃で大都市を吹き飛ばす威力だというその矛先が、祖国・エイルシュタットはランツブルックに向けられているという、最悪の状況。これを打開しなければならぬのだ。

追われる身となったがゆえに、自己の保身のために彼女達についての彼の言葉は、あまりにも当然であり……同時に厳しいものだった。

最早、フイーネがその身を差し出してさえ止まることのないであろう凶行。これを止めるには、およそ常識の限界を突破した戦術が、そしてそれを成すだけの力が必要になる。

その最も確実な方法として、発射と誘導を担うゾフィーを戦闘によって抑え込むというものがあるが……それを成せるとすれば、同じ力を持っているイゼツタだけだった。

それが、彼女に更なる負担を強いる結果となることがわかっていても……それすら勝算は低いとわかっていても……ここで止めなければ、祖国は滅び、そこに暮らす人々が死に、ゲールは本当に世界に災厄をもたらす存在となってしまう。

何もできない自らを責めつつも、ファイネはイゼツタ奪還のため、そしてミサイル発射阻止のための戦略を練り上げる会議に臨む。

しかしその場において、ベルクマン中佐からもたらされたのは……吉報であり、さらなる凶報でもあった。

「クローンである彼女には活動限界がある。全力戦闘はせいぜい2時間程度が限界……魔法の運用次第ではそれ以下だ」

「つまり……それをしのぎきれば、ミサイルが発射されることはない、と?」  
「ああ……その、はずだ」

「? どういうことだ? 歯切れが悪いな……何かあるならはつきりと話せ」  
不適な笑みを絶やさぬ印象があったベルクマンが、ふいに浮かべたその表情、そして言いよんだその態度に、不安感を滲ませる一同。

しかし、彼が続けたのは……その不安を打ち消してくれるものではなかった。

「……彼女のその活動限界時間の問題は、僕がまだ帝国軍にいた数日前時点での最新のものだ。が……厄介なことに、帝国には、その問題を解決してしまいうる技術を持った人物が一人いる」

「何……どうということだ？」

「ゲールは何も、戦闘分野だけに限って魔法というものを研究してきたわけではない……軍での戦闘行為における利用の研究・開発を進めていたのが僕なわけだが……もう一人、医療・薬学の分野において研究を進め、一定以上の成果を出した人物がいる」

「……占領統治府暫定統括……サンジエルマン少佐、だな？」

と、ジークハルト・ミュラー首席補佐官が、冷汗を垂らしながらつぶやいた。

全員の視線が集中する中、彼は構わず続ける。

「今回の異動で本国に戻るとされる張本人。彼の活動内容自体が機密扱いゆえ、ろくな情報が手に入らなかったが……眉唾物のそれで、再起不能の大怪我をも一瞬で治してしまおうと聞いた」

「その情報を手に入れた部下は優秀だな……大事にしたまえ。まあ、さすがに一瞬などということはないが……事実だ。現に、彼はイゼツタ君の傷を、全て跡形もなく消してしまっている」

「イゼツタの……どうということだ!？」

「ゼルン回廊でのゾフィーとの戦いにおいて、イゼツタ君は高所からの落下をはじめとして、様々な深刻な負傷を抱え……特に、足はそのほぼ全ての運動機能を喪失するレベルだった。日常生活を送れるようになるにも超長期の治療とリハビリが必要と見られ、一生後遺症が残るのではないかと、とも言われていたが……それを彼、サンジェルマン少佐は、僅か数日で完治させている」

「……なんだと……!」

「まさしくおとぎ話の魔法使用のように、彼は超常の治療能力を、魔法技術によって発現するに至った。彼はその力を、学問体系化して『錬金術』と、自らを『錬金術師』と呼称しているよ。名前はジョークのようだが……その実力は本物だ」

「……医学・薬学における魔法の力の応用……その進捗具合次第では、クローンであるがゆえに生体機能が虚弱なゾフィーの弱点を、後天的な処置によって克服しうるわけか……」

「そうでなくても……現時点における技術水準でも、極端な話、ゾフィーが疲弊するたびに治療してしまえばいい話なんだ。仮にイゼツタが時間稼ぎでしのぎ切ったとしても、数分後から十数分後には、疲弊した状態で完全回復したゾフィーとまた戦わなければならなくなる。そうなれば、結果は火を見るよりも明らかだ」

「そんな……!」

あまりにもこちらに不利な状況に、ジークハルトを含めてその場にいる全員が絶句する。

ゾフィーだけでも目的達成が至難だというのに、これでは……サンジェルマンが敵にいる限り、勝ち目があまりにも薄い。

「……つまり、こちらが勝利するには……イゼッタの奪還はもちろん、どうにかしてサンジェルマン少佐の無力化を図らなければならない、と」

「理想は捕縛。彼の技術は今後の役に立つ……それができなくば、暗殺かな」

「言うほど簡単ではないだろうがな……何にせよ、それしか手がないのなら……」  
「……やるしか、ないということか」

生唾を飲み込み、憔悴した顔色を隠そうともせず、冷汗を流しながら……フィーネは祖国のため、友のため、決意を固める。

その様子を見て、その場にいた者達もまた……死地へ飛び込む決意をした。

それを見届けたうえで、ジークハルトは地図を指し示しながら、会議を前に進める。

「作戦目標は、イゼッタ君の奪還と、サンジェルマン少佐の確保または抹殺だ。一応、策はある。まずは、今回の地理的有利を最大に生かす形で……」

☆☆☆

@月／／日

………成功した。

あーあ、成功しちゃった。

あーあ、うまく行っちゃった。

あー、もう引き返せない。

……ま、別に後悔もないけど。あ、でも不安はあるな。

まあでも……これ以外にない、つてのは僕が自分でさんざん考えて結論出したことだから……こうなりや、全力で行けるところまで行くしかないわな。

この先の未来……ゲルマニアが、エイルシユタツトが、そして世界がどうなるか。神のみぞ知る、とでも言うのかね。

## 08. 5 3人の夜宴

@月^日(夜) ビアンカ視点

裸でベッドの上に仰向けになり、隠すことなくすべてをさらけ出している……イゼツタ。

その上に、サンジェルマンは同じように裸になって覆いかぶさり、イゼツタの秘所に、いきりたつた逸物を沈めていく。

やわらかな、しかしびったり閉じたその割れ目をこじ開けて、その先の肉の壁を押しつけて進み……やがて、そのペニスが根元まですっぽりとする。

表情からは……挿入されているイゼツタはもちろん、組み伏せている側のサンジェルマンもまた、恥ずかしさでか、顔を赤く染め……頬を汗が伝い、快楽でいっぱいになっていることが見て取れる。

その状態で、ほどなくして余裕が出てくると……今度は、ゆつくりとしたペースで、徐々にテンポよくなるように、サンジェルマンが腰を振る。

ばん、ばん、と……素肌同士が打ち付けられる、単調だがどこか淫靡な音が部屋に響く。



そこに至っても……快感をこらえて、固く目をつぶったり、息を乱して酸欠のように呼吸を荒くする様子は……何というか、初々しいものを感じる。

まるで……童貞と生娘のまぐわいのようだ。

この様子だけを見て、軍人と捕虜——支配する側とされる側の間柄だとわかる者はいないのではないかと思う。

無理やり組み伏せて慰み者にするのなら普通にあるが……目の前で繰り広げられている、ぎこちなくもどこか一生懸命なこの交わりは、恋人同士にすら見える。

もちろん、本人達になんともいふ必要はなく……お互いの欲求を満たし、あるいは要求を通すための行為であることに間違いはないのだが……やはり、そうは見えない。

イゼツタの上ののしかかり、その裸体を慈しむように抱きしめるサンジェルマン。それを抱きしめ返し、首元に顔をうずめるイゼツタ。

胸板に圧迫されて、たぶん、と変形するイゼツタの乳房。

下から突き上げ、突き上げられて震え、動く2人の体。わずかに音を立ててきしむベッド。

若者同士の交わりによくある、お互いをいたわり、想うことに必死な感じが伝わってくる。

……案外、本当にそうなのかもしれない。

サンジェルマンは、こういった行為に真剣な部分があつて……捕虜相手でも本気で愛した相手にするかのよう……こう、全身全霊？な部分があるし、イゼツタは今まで、口にするのはばかられるほどにひどい目にあつていた分、こういったノーマルなセックスはより心地よく感じるのだろう……私もそうだったからわかる。

とはいえ、これはあくまで取引のセックスなのは間違いなく……であるならば、姫様の親友でもあるイゼツタにそのようなことをさせるのは忍びない。

代われるものなら、代わりたい。

……しかし、それもできない。

さつきまで、あのイゼツタの立ち位置に私がいて……すでに、この身はサンジェルマンの情欲を限界まで受け止め、とろけ切つてしまつている。

足腰には力が入らないし、脱力のあまり手も動かない。息はまだ全然整つていないし、何より……精液と一緒に注ぎ込まれたような多幸感のせいで、若干意識がもうろうとしてゐる始末。

とても……少なくとも今すぐには、彼の若い情欲を受け止める余裕はない。もしやつたら……確実に気絶する。

……これでも、軍人として、近衛としてそれなり以上に鍛えていたつもりだったのだが……やはり、男と女ということなのだろうか？

そんなことを考えている間に……向こうはいつの間にか一区切りついたようで。

絶頂の快楽に体を反らせ、部屋に響くイゼツタの嬌声の中……サンジェルマンとの結合部から、注がれてあふれ出た子種が垂れてきて、ベッドにシミを作っていた。

しかしそれでも……イゼツタ、サンジェルマンともに互いを放さず、たくましいことに、抜かすの2回目に突入……今度は、上下を入れ替え、イゼツタを上にして下から突き上げるようだ。

正常位に騎上位、バックに対面座位……何度も形を変えて続いた、イゼツタとサンジェルマンのセックスは……何度お互いが絶頂に至ったかわからないくらいに続いた。

イゼツタの体力が底をつき……崩れ落ちるように気を失うまで続いた。

それでもなお余裕があるらしい彼の相手は……ここからは、当然ながら私が勤める。

といつても、まだ体力が回復しきっておらず、自由には動けない私であるので……ほとんど、されるがままに犯される形になる。

どうやら今日は後ろからの気分だったようで……気絶しているイゼツタの隣で、四つん這いにされて後ろから尻をわしづかみにされ、高揚しているらしい気分のままに、やや乱暴に突き入れられて……始まった。

……恥ずかしく、情けないことに……この男とまぐわうようになってからというも

の、この身はすっかり快樂の虜になっている。それが……ごまかしようもなく、自分でわかる。わかつてしまう。

いくら、エイルシユタツトの近衛として凜々しくあろうと、いかな辱めにも屈せずいようとしても……先の、あの痴れ者共に輪姦されていたころは、それで通じていたにも関わらず、

サンジエルマンのペニスもたらす快樂の味を覚えてしまった体は、その刺激に容易に狂う。

いくら最初は虚勢を張っていても……気が付けば、姫様には死んでも聞かせられないような、淫乱極まりない言葉が次々と口をついて出て……敵国の軍人に媚びを売る。

……この間、そうなっている状態の私の様子を、鏡で見せられたことがある。

つながっている状態で持ち上げられ、部屋の姿見のところに連れていかれて。

空気を求めてか、だらしなく開いた口。こぼれ出ている舌。口の端からは……よだれが。

見苦しさすら感じる、焦点のあっていない目。快感のあまり、涙まで流している。

糸の切れた人形のように、だらんと弛緩した体。秘部は肉槍で貫かれ、ものほしそうにひくひくと震え……結合部からは精液と愛液の混合物が垂れ流しになっていた。

そのまま、下からずんずんと突き上げられて、乱れさせられて……思い出すのも恥ず

かしくらいに、淫らな言葉を口にしながら……最後には、子種を注がれながら、その粗相を……。

もはや、プライドも何もない。この男の前で……恥ずかしい姿は、それこそ親兄弟以上に見せた。

……この先、これを恥と思うことすらできなくなるのか……と、うつすら感じている。もし、そうなってしまうなら……私は……姫様にお仕えすることなど、できなくなるだろう。ただの、雌になってしまう。『コレ』がなければ……生きられなく、なってしまう。

……意外とそれは近いのかもしれない。

今、意識して頭の中に必死に届かせないようにしている……早くも肉欲に溺れ、私の口から飛び出しまくっている、この聞くに堪えない言葉の数々を考えれば。

☆☆☆

同日 イゼツタ視点

「ひはあああああつ！ い、いいいっ！ おちつ、おひんひんいいのおつ！ わたつ、わらひのつ、オマンコつ、喜んでるっ！ きゅんって、きゅんってなっちやう！ あ

あああああつ、もつと、もつと来てええ、わだしの膣内んあああああそれだめえええ!!」

普段は、男装の麗人としても通用しそうなくらいに、凜とした、軍人然とした人物であるビアンカさん。

そんな彼女が、今、私の目の前で……見たこともない姿をさらしている。

さつきと同じように、普段は絶対に言わない、言っているところを想像もできないようないやらしいことを……サンジェルマンさんに、後ろから貫かれながら、次々と。

ぐちゅぐちゅ、じゅぽじゅぽ……と、そんな喘ぎ声の中でもはつきり聞こえるほどに、ビアンカさんの恥部はびしょびしょになっていて……そこを出入りするペニスをもたらず快感を、全身全霊で貪っているように見えた。

……ひよつとしたら……何も知らずに、この状態の彼女だけを見たら……普段の彼女を知っている人なら、ビアンカさんだとわからないかもしれないなかつた。

最初は四つん這いだっただけど、すでに腕に力が入らないみたいで、とつくに崩れ落ちている。今は、膝だけ立ててお尻を突き出すような姿勢になっている。

それを、遠慮なく乱れ突いているサンジェルマンさん。

脱力しているのに、快感のあまり暴れまわったのたうち回りそうになるビアンカさんを、お尻だけでなく全身を、自分の全身でのしかかるように押さえつけて腰を振ってい

る。

ピストンは、私の時より、多分ずつと強くて……ばん！ ばん！ って……サンジェルマンさんの腰が、ビアンカさんのお尻を赤くするくらい、かいている汗がはじけ飛ぶくらい、勢いよく叩きつけられ続ける。

まるで、獣の交尾みたい……見てて、すごく……いやらしい。

だというのに……それを見てて、じゅんつ、と、お腹の奥が熱くなる。

乱れに乱れてしまっている彼女を見て、憐れむでも、恐怖するでもなく……そんなに気持ちいいのかな、と思ってしまう。

……程度や感じは違っても、私は私で……きちんといやらしくなっちゃってるんだな……。

「あつ、は!? あが……んほおおおつ!? きた、きたああえああつ! せーえき、きたあつ、奥に……赤ちゃんの部屋に、どびゅどびゅって来てるうううつ! 孕ん、じゃう、できひやううう! 私、ゲールの赤ちゃん汁で妊娠しちゃうのおおお!」

もう何度目かになる膣内射精で——射精してる間もサンジェルマンさん、腰止めないんだもんなあ……——いわゆる『あへがお』っていう奴になっちゃいまいながらも、快樂をむさぼるビアンカさん。自分でも腰、動かしてる。サンジェルマンさんの動きに合わせ、気持ちよくなるように。

収まりきらない精液があふれ出し、ベッドにしみこむよりハイペースで流れてくるそれが水たまりになって……それに滑って、ピアンカさんが崩れ落ちる。

蟹股で……すごく、嫌らしくて、はしたない格好で……まるで、カエルみたい。

転んだ拍子にペニスが抜け落ち、だらしなく広がってしまった膣口から、注がれた精液がさらにどろどろと漏れ出てきて……そんな中でも『あ、あはっ……しゅごかつたぁ……』って、恍惚の笑みを浮かべているピアンカさんは……どうしようもなく淫らだった。

しかし、見る限りさすがに第2ラウンドも限界そうで……

……そうなれば、今度は……私の番なわけで。

ふう、と胡坐をかいて一息ついている——しかし、おちんちんは勃起したままの——サンジェルマンさんのところに這っていつて、そこにまたがって……

……ここからは、わたしの第2ラウンド。

私だつて……こんな体になっちゃつて……今みたいなすごいセックス見せられて、興奮してるんですから……ちゃんと可愛がつてくださいね。

今度は、さつきより激しくしていいですから。

結局、さらに1ラウンドずつやって……ようやく終わり。



さすがにもう出ないところまでやって……最後の一発まで私とピアンカさんの膾内に注ぎ込んだサンジェルマンさんは、力尽きる感じでベッドに倒れこみ、そのまま寝入ってしまった。

そこから、私とピアンカさんが、最低限動けるだけの体力と、冷えた頭の冷静な思考を取り戻すまで、数十分。ただただ横になって、休んでいた。

そんな私たちの目の前で、無防備に眠るサンジェルマンさんは……まるで、子供みたいな寝顔。

彼を今、害そうとするなら……魔法も、凶器もいらないだろう。首を絞めるだけで済む。

仮にも敵同士の私たちの前で、こんな風に決定的な隙をさらしている彼は……私たちに信頼してくれてるのか……はたまた、そんなことはできないと計算ずくなのか。

そんなことを考えつつ……私は、恋人同士みたいに、その胸板に体を預けて寝ている。……敵同士なのはわかってる。でも、なんていうか……落ち着くんだよね。

「……すまなかつたな、イゼツタ……また、見苦しいものを見せて」

と、ようやく正気に戻ったらしいピアンカさんが、やや顔を赤くしながら。

あ……記憶はあるみたい。逆に大変そうだけど。

ピアンカさんは、近くにあつたタオルを水で濡らし、それで軽く体をぬぐうと……裸

のままなのを気にもせずに、ベッドから降りて……寝室の中を物色しだした。

最初は私も、この泥棒みたいなのを見てびっくりして止めたんだけど……ピアンカさんが言うには、『了解はもらっている』とのこと。

この寝室から出なければ、何をしてもいいらしい。棚の資料や新聞なんかを勝手に出して見てもいいし、小型冷蔵庫を開けて、中にある飲み物やおつまみを勝手にもらって、食べたり飲んだりしてもいい。そう、サンジェルマンさんも了承済みだつて。

むしろ、私たちに対しての報酬・対価の１つだから、存分に見ていいつて。

本当に見せられないものは、そもそもここに持つてきていないそうさ。

一通りめぼしい資料をチェックした後は、持ち出しはさすがにできないので、内容は頭で覚えて……あとは朝まで、体力回復のために寝る。私も、一緒に。

さつきと同じ……彼の胸板に体を預けて。

このところ、新聞で聞かされるニュースは……どれも、エイルシュタットや連合国の立場からすれば、凶報というしかないものばかり。

多分、このままいけば……連合国は、帝国に敗北する。

姫様もつかまって、エイルシュタットは完全に征服されるだろう……つて、くやしそうにしながらも、ピアンカさんは言った。見たくない、けど見なければいけない現実を前にして。

……そうなった時のために、私たちはこうして……サンジエルマンさんに取り入って  
る形だ。

最初こそ、もう何も考えずに、姫様を助けたい一心で願ひ出た体の関係だったけど、  
……ビアンカさんと話して、この立場を最大限利用した方がいい、っていう話になって、  
あまり考えたくないけど……姫様が帝国の手に落ちてしまった時のために、彼……サ  
ンジエルマンさんを味方にするために……

味方とは言わなくても、讓歩や配慮を引き出せるように、こうして私たちは、彼に抱  
かれ続けている。

手ごたえはある。サンジエルマンさんは、きちんと約束を守って、私たちの待遇もよ  
くしてくれたし……それ以外にも色々と便宜を図ってくれたりしてる。

ランツブルックの占領統治も、圧政を敷いたりせず、穏やかにやってくれてる。

私たちのわがままなら、多少のことなら笑って聞いてくれそうだし……多少の枠内で  
なくても、自分やゲールにも利益のある事なら、交渉に応じてくれる感じだ。

……誤算としては、彼を籠絡するよりも下手したら速いペースで、私やビアンカさん  
の方が、彼との夜の生活の虜になりつつあったり……なんてところもあるんだけど。

姫様……私たち、もし、あなたに何かあつても、少しでもあなたを助けられるように  
頑張りますから……

安心して、なんて言えないけど……どうか、どうかご無事でいてください。

そんな風に考えていた、私たちの……そして、姫様の状況が大きく変わるのは……もう少し先の話だった。

そして、その原因は……この後、訪れた。

「ん、あ……あれ、まだ暗いな……」

「あ、ごめんなさい……起こしちゃいましたか？」

「ん？ ああ、いや、別にいいよ……そこそこ休めたっぽいし。体、平気？ あんだけやっというて僕が聞くのも不自然かもだけど……」

「だ、大丈夫です！ ちょっとやっぱり、腰とか痛いし、だるいけど……朝には治ると思います」

「ならいいんだけど……あー、何か目が冴えちゃったかも」

「あ、私も……よかつたら、ちょっとお話とかしませんか？ まだ、寝る時間あるし……」

話してる間に眠くなるかもですし」

「ああ、そうだね。いいよ？ さて……何話すか」

「……あ、それなら私、その……前からちよつと気になってたことあるんですけど、聞いてみてもいいですか？」

「？ いいよ、何？」

「その……」

「……前に、サンジェルマンさん……『ゲルマニアじゃなく、エイルシユタットに生まれたかった』、って言っていました……よね？」

## 09 信頼が導く反逆

@月一日

昨日はまあ……色々ありすぎて疲れて、日記もろくに書かずに寝ちゃったので、今日まとめようと思う。

まず、汚つさんらの謀略で、僕がエイルシュタットの戦後処理をやってる間に、イゼツタとビアンカだけが汚つさんらに連れられて国を出ることになった。

汚つさんがそれを利用して、僕の居ぬ間に、久々の2人の体を堪能する予定だった。邪魔が入らないよう、直前で人員配置の一部変更何かも行つて……列車の中から始められるように。

プランとしては、夕方発の列車なので、夕飯の後に2人を手籠めにする気だった様子。しかし、その歯車はすでに狂い始めていた。

人員配置の変更……僕に無断でやったその際に、イゼツタとビアンカの奪還をもくろむ、オルトフィーネ大公殿下の手の者が紛れ込んでいたのである。

そのスパイ……ビアンカの部下の近衛たちだったらしいけど、兵員がごまんという駅

や都市周辺にいるうちは大人しくしていたが……国境付近、大きな川を渡る鉄橋のところで牙をむいた。

ちようど夕食を終えて、彼女たちのところへ行こうとしていた汚つさんと取り巻き共を無力化し、列車の各部を爆破して連結を破壊、ちようど、イゼツタ達の乗っている車両が、鉄橋のど真ん中で立ち往生するようにした。

資材をメインで積んでいたために兵員が少なく、しかも仮にも指揮官である汚つさんが早々に無力化されていたこともあり、対応できないまま事態が進む。

炎上する列車から脱出した彼女たちは、鉄橋から飛び降り……時間ぴつたり橋の下を通過した、お仲間が用意したボートに飛び乗って、見事に脱出。

帝国の魔の手から、自分たちの仲間を奪還することに成功した……

……と、思われていた。

さて、そのほぼ同時刻、別動隊によつて……警備が手薄になったところを、僕ことソロモン・フォン・サンジェルマン少佐の捕獲あるいは暗殺のための作戦が行われていた。が、予定の場所に僕は現れず……それに困惑していた、そのエイルシユタツトの別動隊の皆さんは……潜んでいた伏兵たちに襲撃され、瞬く間に全滅してしまいましたと

さ。

あ、殺してないよ？ 一応。催涙ガスとか、特殊部隊のやり口で無力化しただけ。

ここまで言えば普通に分かったと思うけど、この襲撃作戦、僕は予想していた。というか、そう動くように僕が誘導したんだけど。情報から何から、全部わざと流して。

で、見事に引つかかってくれた、エイルシユタットの皆さんを狩ったわけ。

そして、町郊外にいると思われていた僕が実際にはどこにいたかと言えば……無論、前線だ。

前線は前線でも、『彼女たち』を捕獲し返すための前線だ。

ボートでの脱出は、事前の準備なしには陸上から追いかける手段が皆無に等しい、有効な一手だと言える。しかしそれはあくまでも、事前の準備がない場合だ。

加えて、確かにあの川は大きいけど……川である以上、進行方向は限られる。上流か下流。あるいはさっさと接岸して逃げるかだ。接岸するにしたって、あまり鉄橋が近いと追いつかれるし、銃弾が届くかもしれないから、ある程度は移動するだろう。

そしてこの川、すぐ上流に河底段差があるので、遠くまで逃げる事ができない。つまり、下流に下るしかないのだ。



そして下流には……潜水装備で、徹甲弾を装填した水中銃を構えた僕の部下の兵士たちがスタンバイしていた。さらには、川岸に狙撃班も。

で、数分後。

所定の位置に差し掛かったところで……船のエンジンを破壊されて川の真ん中で立ち往生した大公殿下たちは、スポットライトで照らされ、狙撃兵たちに銃口を突き付けられ、さらに帝国軍所有の河川航行用モーターボートで周囲を完全包囲され、あえなくお縄で全滅……というわけだ。

最初から最後まで計画通りである（ニヤリ）。

武装船舶の上から、僕が直接行った降伏勧告に、オルトフィーネ大公殿下が直接応じてくれたので……そこでゲームセット、チェックメイトと相成った。

……というか、大公殿下が最前線のこの船に乗ったことが驚きだったな。

さて、ともあれこれで、エイルシユタツの抵抗勢力中枢の皆さん全員を捕虜にできただろう。

内訳としては……まず、ボートに乗っていたオルトフィーネ大公殿下。

何でこんなところにこんな人が……と思つて後で聞いたら、どうしても彼女たちを自分が助けに行きたかったのと、もし作戦が失敗した時に、自分がその場で降伏宣言をすることで、引き換えに部下たちの助命を嘆願するためだったとか。

その護衛兼前線指揮をしていた、ジークハルト・ミュラー首席補佐官。

なぜか魔石の片割れを持ってたんで、没収しておいた。

軍所属のハンス・オーベルマイヤー少佐……ああ、彼、イゼツタが落とされた時にも救出しようとしてた人だな。失敗だったけど。

軍医だつていうハルトマイヤー氏。2人が負傷している可能性を考慮してたらしい。

スパイとして乗り込んできていた近衛の子たちや、ボートに乗っていた兵士たち。

ルイーゼ、アデーレ、クリスタ……あー、以下省略。

それに……やっぱりいたよ。ベルクマン中佐。

色々この作戦のために暗躍したんだろうな……プラン内でも予想外の事態がいくつか起こったと思つたら、彼の伝手による手引きだったわけだ。余計な苦勞をさせてくれた。

そして……ものの数分で奪還し返す形となった、イゼツタとビアンカ、だな。

さらに、僕の暗殺に向いていた近衛と兵士の皆さん。こちらもきれいに捕獲。

そして、最近ひそかに確保した——と思つていたが実際はこつちで把握していた——アジトで待機していた、シュナイダー將軍にヴァルマー首相。その他首脳の方々数名。

あと、メイドのロッテって娘と、広報担当のエルヴィラ・フリードマン女史。

いやー、護衛の兵力も3分割されてて、殿軍やつて逃げるだけの余力もない中での制

圧戦だったから、楽だった（つて報告を受けた）。

アルプス山中での時みたいに、逃げられちやかなわんからね。

で、それぞれ近くに待機させていた護送車両に乗せて、最寄りの鉄道駅を有する町で合流。全員集合の後、列車に乗せて一路、本国へ向かいますよう……というわけだ。

……こんなところか。

以上、エイルシユタットの頭を抑えるに成功するまでの経過報告でした。

なお、今回僕に黙ってバカなことをやった査察官は、見通しが甘いにもほどがあつたとして、今回の襲撃事件その他の責任をすべて背負つた上で……列車爆破に巻き込まれてご臨終いただいている。

ようやつとあの害虫駆除できた。やれやれ。

……さて、

『準備』は整つた。

ここからが、本番……正念場、だな。

@月 日

僕らは今、一路、途中乗車した特別秘匿列車にて、本国ゲルマニアは首都、ノイエバ

ルリンへ向かっている。

車内には、今回とらえたオルトフィーネ大公殿下以下、部下の方々全員を乗せている。武装解除した上で、一応、役割ごとに分けて。

高級官僚とか軍人、従者とか協力者枠の人、そして中枢も中枢のフィーネ大公、つて具合に。

彼女たちはこれから、ノイエベルリンへ到着次第連行され、戦争犯罪人として裁判の末に処罰を受けることになるだろう。

軍関係者の多くは極刑、あるいは収容所行きだ。

諜報部の関係者とかはまず間違いなく消されるだろうな。

協力者とかは禁固刑とかで済むかもだけど……。

……大公殿下はどうなるだろうな。普通なら極刑だろうけど、懐柔策とかに走る可能性もあるかも。部下の態度次第では、政略結婚で内部に取り込むとかもありうるかもね。

……なんてね。普通ならね。

しかし今回、そうはならない。

というか、なりようがないのだ……何せ彼女たちは、ノイエベルリンに連行されるのではなく……その途中にある僕の領地にて途中下車し、そこでしばらくかくまわれて生活をする予定だからだ。アルプスの秘密基地にいた頃みたいに。

前述の『彼女たちはこれから（略）』から『……なんてね』の直前までが嘘。

本当は彼女たちは……これから、帝国を倒すための乾坤一擲の作戦のための準備に入ります。

そして僕は、彼女たちを助けるために……帝国を裏切ることにした。

理由は3つ。

1つ目は……今まで日記ではさんざん書き綴ったけども、このまま帝国を放っておくわけにはいかないだろう、と思ったから。

このままだと、この国は世界中に戦乱をばらまき続けるだろうから。

そしたら……いくら核ばりに強力な兵器があるからって、こつちが被る被害もバカにできないもんになるだろうし……相手国からの恨みつらみも募る。

国力は無駄に消費していく。その分を当てなきやいけない国家事業も山ほどあるだろうに。

その辺ほとんど一切無視して、あの皇帝は世界征服なんて、大魔王ちつくな野望に向

けて前進しようとしてるわけだから。

……実際にそんなことしてみろ、地獄だぞマジで。

ちよつと考えればわかることなんだけど……国つてのは、大きくなればなるほど、加  
速度的に管理が大変になるのだ。

治安が悪化しないように警察機構を配備したり、軍が出動できるように屯所とか基地  
を整備したり、あとはインフラその他もろもろ……

あんまり大きくしすぎて管理しきれなくなると、国内でよからぬことを考える輩が出  
たり、併合した旧敵国の領地でパルチザンが湧いて出たり……面倒が多い。

だから、世界征服なんてのは……ぶつちやけて言えば、現実的じゃないのだ。だって、  
破たんが目に見えてるんだから。

それを皇帝は……魔女の力と近代科学の力の合わせ技でどうにかしようとしてるわ  
けだけど……絶対うまくいかないだろう。恐怖統治でどうにかしようにも限度あるし。

仮にだ。このままほつといても、世界征服なんて失敗に終わるだろうし……万が一世  
界統一に成功したとしても、その後の色々でゆつくりと崩壊に向かつていくだろう。

最初こそ魔女の力で抑え込もうとも、その魔女がゾフィー1人しかいない現状、限界  
はある。技術が進歩すれば、いずれそれに対応されるだろう……

……というか、対応しうるだけの技術をすでに僕が開発してるんだけどね、色々。

とにかく、だ。結論。

このまま帝国ほつといて世界征服計画進めさせると……長期的に考えて、単純に世界大戦やるよりも何十倍もひどいことになる。世界各地で、帝国に反発する正規兵・非正規兵入り乱れた戦いがあちこちで起こり、戦争に関係あるなしに関わらず大勢の人が死に、国が消えて難民が世界中にあふれ、治安の悪化が……考えるだけで頭痛くなつてきた。

それをまた大量破壊兵器その他で抑え込もうと考えなしに撃つてみる、世界人口の桁が一つ減りかねないぞ。いや、マジで。

さて、そうならないためにはどうすればいいか。

帝国が負けるのが一番手っ取り早いけど……これはこれで難しい。

まず、軍が普通に強い。

帝国は、精強な軍隊と多数の俊英の参謀将校を有し、有事に備えて施設や法の整備等も万全の、正確無比な戦争機械だ。その辺の国と、普通に戦争しても普通に勝てる。

加えて、ゾフィーが強い。

もうコレは言うまでもないんだけど、魔石パワー+帝国製の近代兵器を操って暴れまわるワンマンアーミー。まともに止められる軍が……無い。ブリタニアそろそろ滅び

そうだし。

極めつけに、エクセニウム兵器がやばい。核爆弾だよあれマジで。それたくさん作ってるもの。あんなもんバカスカ撃つたら、ヨーロッパ中が焦土だらけになるわ。

アレは……存在するだけならともかく、使っちゃダメな兵器だ。

さて……長々と帝国放置しとくの無理な理由を語ったわけだが。

次、理由の2つ目。

僕の『錬金術』の研究成果が……ベルクマン中佐のゾフィー関連に引き続き、皇帝にとられそうになつとる。

まだベルクマン中佐の時みたいに、表立って『これから直接管理するから』みたいな指示こそないものの……僕への急務として、後進の育成を進めるように指示が下った。

それだけなら、広くこの技術を広めることを目的にしても取れるけど……同時に、この技術に関しての使用その他権限、方向性なんかについて、僕から皇帝に権限を移して集中させるための法整備を模索する動きがあるよう。

法治国家とはいえ、中央集権で基本的にも思いのままにできるだろう皇帝が、そうまで周到に準備を進めて……おそらくは、これから世界を相手に戦争をするにあたって、この技術がどれだけ大きな力となるかを理解しているからだろう。



前々から、細かいところで予兆みたいなのはあったんだけどもね……

気が付いた時には、乗っ取りの準備は全部が全部整って……そのすべてが終わった暁には、僕は……よくて飼い殺しか島流し、悪くて『不慮の事故死』……かな？

何もかもが不吉すぎて、その時一緒に『中佐に昇進する』って言ってもらえたことが全くうれしくなかったしな……。ベルクマン中佐もこんな気持ちだったのかね？

で、3つ目。前2つの理由で、帝国の持つ軍事力は強大で、全世界から危険視されている。国内のみならず、国外にもその最強説を信じて、傘下に帰順するべきという意見が出るほどに（無論だが、こいつらは帝国が劣勢になればあっさり手の平を返すので、仲間が増えたよわーい、なんて喜ぶのは無理）。

しかしだからこそ、悪役に仕立て上げてぶっ壊すのに丁度いい……という見方もできる。

世界を恐怖のどん底に陥れかねない大魔王を倒すのを大義名分に裏切る……完ペキではないにせよ、かなり物語性があって、民衆受けもしそうな題目だ。

事前に帝国に、国際社会から非難を受けまくるような非道な行いをさせておけば一番いいか。

そういうわけで……今は、絶好のチャンスなのだ。帝国を生贄にささげ、この戦争を

『悪者退治』という、わかりやすく、あとくされのない形で収束させるための。

……アトランタ合衆国が似たようなこと考えてるっぽいけど、あの国に任せると、ヤバそうなのを全部……それこそ、エイルシユタットも含めて滅ぼしそうだしね。

僕も、イゼツタも多分死ぬ。殺される。合衆国へ牙をむきかねない者を残さないために。

それも……戦争が終わった後にだ。闇から闇へ葬られる。

それは勘弁。だから、自分から動いて主導権を握る必要があるわけだ。

以上、これら3つが理由………

………あ、でも、

………本当はあと1つ、4番目の理由あるんだけど……いや、コレは理由とっていいものかどうか。

前3つの理由から、コレ帝国裏切った方がいいかもなー、って考えてた僕が、逃げ道として無理やり用意した、理由とも言えない理由………ただのきっかけだからだ。

………イゼツタを利用して。

まだ、ノイエベルリンから撤収指令が届いていなかったころ。

ピアンカとイゼツタを抱いたある夜………なんか、夜中に目がさめちゃって、眠くなる

までにイゼツタと交わしたピロートークの中で、ふと、こんな話題になったのだ。

前に僕がちらつとこぼした『ゲルマニアでなくエイルシュタットに生まれたかった』というセリフをイゼツタが覚えていて、それについての話に。

まあいいかと思つて話したのは……僕が特に帝国に忠誠心とか感じていないということと、単に育ててくれた家への恩と義理から戦つてゐること。けど、近頃の国際情勢を見るに、それでいいのか悩んでること。

簡単に言えば、さつき言つた『コレ帝国このまま放つといたらやばくね?』つてことだ。

うちに仕えてくれている使用人たちや、毎度秘密の作戦で動かす直属の部下たちも、僕あるいはサンジェルマン家そのものに恩義・忠義を感じて使えていくれている者がほとんどだから、もし僕がエイルシュタットに裏切つても普通についてきてくれるだろうな、とか。

むしろ、現時点でも帝国に不信感持つてる奴もいるからな、とか。

今思うと、結構やばいこと言つてたな……毎晩抱いて、心の距離が近くなつて（僕が一方的にそう感じてるだけかもだが）、しかも事後で疲れて眠くて頭回らなくて、油断したか？

しかし、それを聞いて……イゼツタが一瞬、すごく驚きつつも嬉しそうな顔になつて

……しかし、慌てたようにすぐひっこめた。物理的に、顔を、布団の中に。

けどその直後……すぐに顔を出したイゼツタが、我慢できないような様子で聞いてきた。

『例えば、ですけど……もしあなたに、エイルシユタツトの……姫様の味方になってもらえるように、私が頼めるとすれば……どうすれば、頼みを聞いてくれますか？』

交渉事としてはありえないくらい、まっすぐな質問だった。

けどまあ、彼女らしい。面と向かって、敵に『味方になってくれ』とは。

予想外に、目の前にいる敵が寝返ってくれる可能性がでてきたせいで、こらえきれなくなつて聞いてしまったそうさ。

面白かつたので……そこで僕は、彼女に、自分への発破もかねて、こう申し出た。

『なら、賭けでもしようか』と。

もし、これから先……姫様こと、オルトフィーネ大公殿下が、帝国につかまる、あるいは自分から降伏してくる、あるいは何のアクションも起こさないようなら……僕の勝ち。

イゼツタやビアンカは僕がもらう。僕に忠誠を誓ってもらつて、僕はこのままゲールに所属して……イゼツタには、ゲールの魔女になつてもらおう。そのために力を振るってもらおう。その場合も、可能な限り大公殿下は僕がかばうことは約束しよう。

けどもし、大公殿下があくまで戦うことを望んだら……亡命政府を打ち立てて徹底抗戦を叫んだり、イゼツタを取り返しに殴り込みをかけてくれば、イゼツタの勝ち。

僕はゲルマニアを裏切って、君たちの味方になる。人脈や個人としての能力はもちろん、『錬金術』やその理論なんかも使って全力で協力する。帝国を打倒して、戦争を終わらせて、欧州に平和を取り戻し……『皆が選べる明日』を作るために手を貸そう、と。つまるところ……これは、イゼツタが『フィーネが自分との約束を守るかどうかを信じられるか』という点を核にした賭けなのだ。

フィーネが、イゼツタが戦う限り……イゼツタの希望になってくれるという約束を、違えることがないか。決してあきらめず、夢のために突き進んでくれるか。途中で、弱気になって心が折れて、あきらめて楽な方に流れてしまわないかどうか。

そう問いかけた時、イゼツタは驚いた顔のまましばらく固まって……しかし数秒後には、これ間にないくらいに力強く、自信に満ちた笑みを浮かべて、うなずいた。

賭けは成立。

結果は……ご存じの通りだ。

……とまあ、これらの理由を根拠に、僕はゲルマニアからエイルシユタット……というか、連合軍に味方する形で暗躍し、ゆくゆくは大つぴらに動くことを約束した。

電車の中で、イゼツタを伴って、大公殿下やピアンカ、それにミユラー補佐官やベル

クマン中佐にこのことを話した時は……まー、驚いてたな。

その後、喜ぶ者、疑う者、困惑しっぱなしの者……それぞれだったけど。

ま、いきなり信用されると思ってたわけでもないし……別にいいけどね。

何なら、全部が終わった後で『ああ、ホントだったんだ』とか納得してくれてもいい。僕は僕の思惑の下に、勝手にやるから。

つーわけで反逆だ、覚悟しろ疑心暗鬼皇帝。

僕は……ゲルマニアを、ぶっ壊す。

……ちなみに、イゼツタに賭けの話をしたその時に……イゼツタが承諾した直後、抱き着いてきてキスされた。びっくりした。いきなり何で!? って。

そしたら、どうやら、彼女が前に雑談の中でちらっと話した程度の——たしか、まだゾフィーが彼女に拷問して、それを治療してやってた頃だから……めっちゃ初期の話だ——けど、自分にとっては何より大切な姫様との約束を、覚えていてくれたことが嬉しかった、って。

そして、それに続けて……

『今のでわかりました。あなたは……やっぱり、優しい人です』

『私、こんな形でだけど……あなたに出会えてよかった。ひどい目にあったり、あわされたり、滅茶苦茶な関係だけど……本当によかったです』

『あなたが姫様に……ファイネに手を貸してくれるなら、きつと……きつと優しい世界になる』

『え、もう勝った気に？ わかりますよ……だつて私、ファイネを信じてるから。それに

……あなたのこと信じられるから。絶対に約束を守ってくれるって』

『きつと、皆で……私も、ファイネも、あなたも……笑つて未来を生きられるって、わかるから』

……なんか、逆にプレッシャー感じるくらいに信頼されてしまった。

かわいかったけど。やつぱり、女の子は笑顔が一番だよ。

## 10 丸く収めた（力技）

！月々日

とりあえず、エイルシユタツトの皆さんは……僕の管理下にある別荘みたいな場所で潜伏してもらいつつ、準備を進めてもらうことにした。

これからやるのは……帝国の打倒。

そのためにやるべきことは多いけど、大きく分ければ3つ、上げることができる。

1つ目。魔女ゾフィーの打倒。

今や、全世界にとって脅威として認識されている彼女の排除なしには、ゲルマニアを打倒したことにはならないし……逆にこれを達成してしまえば、一番わかりやすい手柄になる。

2つ目。ゲルマニア帝国の、連合国軍に対する全面降伏。

これはただ負けを認めさせるだけじゃなく、ちよいと細かい条件があったりする。色々、多方面に手回ししておぜん立てをする必要がある。

これについては僕と……ベルクマン中佐にも働いてもらうとしよう。汚い部類の仕事になる。



3つ目。エイルシュタット、及び『新生ゲルマニア(仮)』の、国際社会における立場の確立。

これが一番面倒だ……というか、帝国関係ないのに必要な外交戦略だ。

主に、火種全部消そうとするであろう合衆国を黙らせるために。

これら全部を達成することで……初めて僕たちの望む勝利が手に入る。

犠牲は敵だけにとどめ、余計な手出し口出しが入らないように。エイルシュタットにとつても、僕みたい一部のゲールにとつても、ヨーロッパの各国にとつても、都合のいい形に。

そのためには、言うまでもないけど、事前の周到な準備と、各自の連携・協力が重要になる。

ここにあって僕が不安だったのは……協力することを約束したとはいえ、仮にもゲールの軍人である僕やベルクマン中佐を、最低限とはいえ、彼女たちが信じてくれるか、だったんだけど……それについては、イゼッタとビアンカが説得してくれた。

彼は確かにゲールだが、信頼できる男だ、と。

彼女たち2人が協力して言うことには——その説得自体も人を選んで行っていたけど——帝国軍にとらわれた自分たちは、日々辛く厳しい責め苦を受けていた。

しかし、それに加わらず、逆に自分たちをかばってくれたり、治療を行ってくれたの

だと。

命に係わるケガを治してもらったこともある。彼がいなければ、イゼツタもピアノカも、生きていられなかっただろうと。

……大体本ただけど……一部、正確でない部分がある。

いや、言っていないだけなんだけど……僕は確かに、汚つさんたちのバカな行為に参加してはないけど、その後別個に彼女たちにきちんと手を出してるんだけど……

しかし、うまいことピアノカが話を持って行って、そこには触れず、なおかつ嘘もつかずに……さらに、『確かに彼は、上層部による拷問の間は私たちを助けることはなく、見て見ぬふりをしていました』と、あえて負の側面を語ることで、評価に『底』を作り、それ以上下がらず、その後のフォローで押し上げるように弁舌を振るっていた。

結果……少なくとも作戦行動をとる上では信頼できる、との結論に落ち着いた。

まあ、それで問題はない。大公殿下も……イゼツタの恩人であることは確かだからって、過去の遺恨はお互い考えずに手を組む、ということを了承してくれたし、説得に難儀しそうだったジークハルト補佐官の方は、ベルクマン中佐が受け持ってくれた。

……似てるような似てないような2人だけど、だからこそうまくやれたらしい。

まあ、今はこれで問題ない。

というか、別にこれ以上親しくならなくても……繰り返すが、最低限、協力して作戦

行動をとれる程度の信頼があれば、それでいい。

むしろ、無理して仲良くなるうとしない方がいいだろう。

どこかの第六天魔王も、『呉越同舟とかよく言うがな、危機が迫れば軋轢や不和がなくなるとか、んな事ア絶対に無え!! (中略)』そして取り返しのつかないことになるのだ!!』って言うてるし。

変に無理して相手を理解しようとして考え方をきしませるよりは、あくまでビジネスパートナー、くらいに考えていた方がいいだろう。ジーク補佐官とか、ベルクマン中佐あたりは、呼吸をするように……とは言わないまでも、そういった割り切りは得意なようだし。

そう思ってたんだけど……ピアノカとイゼツタが間に立ったからか、大公殿下やメイドのロツテちゃん、多少なりこつちを気にかけてくれるような気配があるかも。

……まあ、それならそれで、悪い気分じゃない。

少なくとも、彼女たちの信頼や期待を裏切る気はないし……仲良くできるならしとこうか。その方が……こころなしか、イゼツタも嬉しそうというか、気が楽そうだし。

……とりあえず、準備進めるか。

時間的余裕はあまりない。あのおっさんが火力演習をやらかす予定の、ヴェストリアでの会談の日までに……全部済ませないと。

E月F日

……日記をつけるのも久しぶりだな。

随分、間が空いてしまった。

まあ、色々忙しかったからな……。あれから、今まで。

もう現実の世界では、皆知ってることであり……。改めてこうして書く必要があるかは微妙なところではあるけども……。一応、あれから起こったことをまとめておこうか。せつかくだし、最後まできちんと『日記』にしておこう。

結論から言えば、周到な準備の甲斐あって、全てうまくいって、丸く収まった。

まず、イゼッタVSゾフィーの方は、2つの新兵器を見事に使いこなしたイゼッタの大勝利。

一つは、僕が錬金術で作った人造魔石……その名も『賢者の石』。オ리지ナルの魔石より出力では劣るものの、こちらには副作用がない。命も削られないし、激痛も起こらない。

そしてもう一つは、超がつくくらいに高性能の対戦車ライフルと……それと連動させて、出力不足を補うために用意した仕掛けだ。

これが上手いこと機能して、見事ゾフィーに勝つことに成功した。

その仕組みは……簡単に言うと『よし、月が見えた!』……これに尽きる。月だけに……まあ、早い話が、足りないなら外部からエネルギーを送ってやりやいだろってことだ。

某二連衛星砲にエネルギーを供給するマイクロウエーブみたいにして、あらかじめ抽出したエネルギーを超圧縮してイゼッタに送り届ける。このエネルギー加工にも『錬金術』を使った。

照射する施設は、さすがに月に作るわけにはいかないので……戦闘機に機材を搭載して僕が乗り込み、状況に応じて超高高度から行った。

その際、操縦桿を握ってくれたのは……ブリタニア軍のエースパイロットである、グロマン中佐である。イゼッタと、空母ドラツヘンフェルス的一件で知り合いっぽかったので、手伝ってもらった。

個人的に、声がシブくていいひとだな、と思った。

この人のおかげで、ゾフィーがこつちに攻撃を向けてきても、撃墜されることなくイゼッタに魔力供給を続けることができた。

イゼッタが外部からのエネルギー供給で自分に対して優位に立ちまわっていると知ったゾフィーは、供給元をつぶすべくこつちを攻撃してきたもの……さすがのゾフィーも、エースパイロットの操る最新鋭の戦闘機に、イゼッタの猛攻をかわしながら攻撃を当ててはできなかったのだ。

加えて、この圧縮エネルギーを受け取るには、専用の設備が……具体的には、イゼッタの対戦車ライフルに組み込まれている受容システムが必要。これがないと……圧縮を解凍できない。

正しい手順での解凍ができないとどうなるかは……僕らを排除できないと見るや、自分がいゼッタと僕らとの間に割り込み、供給されるエネルギーを横取りして使ってしまうとして……圧縮されたエネルギーが暴発してゾフィーが自爆したことから読み取れる。

あまりに一度に大量のエネルギーが流れ込んだために、ゾフィーは魔石の副作用の激痛なんかも加わって完全に隙だらけに。

そこに、改めて僕らからのエネルギーを受け取ったイゼッタが、対戦車ライフルという名のサテライトキヤノンから放った、メガ粒子砲ばりのビームに、ゾフィーはなすすべなく飲み込まれていった。

次に、ヴェストリアで行われた秘密会談……という名の恫喝外交については、大公殿下が殴り込みをかけて、ゾフィーを倒したとこと、イゼッタによって『エクセニウム』による兵器全て……もちろん、ランツブルックに向けて飛んでいるミサイルも含めて、ある方法でたつた今をもって無力化したことを告げて、議場の流れを一気に変えることに成功した。

魔女のみならず、あてにしていた秘密兵器が全部だめになったことで、ゲルマニアは一気に窮地に立たされたわけだ。

その上さらに追い打ちがかかる。僕の方で調べて大公殿下に渡しておいた、この戦争に関わるゲルマニアの悪逆非道な、国際法どころか国内の法にても違法である行為の数々をその場で告発。ゲルマニアはさらに立場を悪くした。

そしてそれらに団結して対処する、という目的で、参加していたヨーロッパの各国は

結束を新たにし、ゲルマニアに対して改めて徹底抗戦する旨を確認したのである。

……その件を介して関わることでできない合衆国を、ごく自然に蚊帳の外にして。

なお、ゲルマニアがすでに生成し、兵器に加工あるいは保存していたエクセニウムについては……あれは物質化したとはいえ、元は魔力であるため、タンクの中に入つてるとかミサイルに搭載されるとか、そういう状況関係なく、外部から干渉して蒸発させることが可能だ。

例えば、魔石でレイラインの魔力を吸い上げるように、エクセニウムを魔力に還元して吸い上げることで、結果的に蒸発させて奪うともできる。負担でかいからやらせないけど。

なので、ここでもマイクロウェーブ風魔力照射装置を応用し……波長を変えて圧縮した魔力をイゼツタが超広範囲に拡散させ、帝国全土のエクセニウムを連鎖的に蒸発させることに成功した。蒸発したエクセニウムは魔力に戻り、また再び空气中に散って、レイラインに戻るだろう。

そして最後に、魔女を危険視して排除を図るであろう合衆国への対処だけ……これについては、僕が保護する形で、手を出させないように守ることに成功している。

ただしもちろんそれは、ゲルマニアの軍人とか名家として保護したわけじゃなく……



『二つに分かれたゲルマニアの、正義側の代表』として保護したのである。

武器をなくし、魔女を失い、国際社会共通の悪者一直線だったゲルマニアだが、その状況を利用し、僕とベルクマンは情報戦略でこの国を二つに割ることに成功した。

雑な言い方だが……『良いゲルマニア』と『悪いゲルマニア』に。

要は、今まで非道な行為を数々行ってきたゲルマニアは、悪者の皇帝や高級官僚たちによつてかじ取りをされてきた結果であつて、それを知つて正義に立ち上がった者達が、祖国を正しい国に戻すべく立ち上がった。ならば国際社会はこれを支援し、悪の国として滅びそうになっているゲルマニアを生まれ変わらせて、そこに住む無辜の民を、国そのものを救おうじゃないか！

……つてな感じの建前を、連合国で示し合わせて作り出したわけである。

もちろん、こんなものは民衆向けのストーリーに過ぎず、各国首脳がこんな茶番に付き合つてまでゲルマニアの再生に手を貸してくれたのは、ゲールほどの大国が滅んで分割統治されるようなことになれば、その規模から色々と問題が出てくるとわかつていたから。

形だけでも国が残っていれば、簡単になんとかできる問題はかなり多く、面倒を事前に回避できるわけだ。

そしてもう一つ……僕が、各国首脳に提示した……『魔法』というものの、産業分野

での有効活用の可能性について、ある程度国として機能を残しておいた方が、そこで継続的に研究を進めるのに都合良かったからだ。

資源、エネルギー、薬学、医療……様々な分野にこの力の応用が利くであろうことを知った各国首脳は、さらにこちらが戦争にかかる賠償の一環として、当事者となった国々にこの技術を公開すると宣言したことで、ならば保護しようってことになった。

こうした理由から、悪の敗戦国としてのゲルマニアは、皇帝や高級官僚たちをスケープゴートにする形で滅び、『新生ゲルマニア』が発足、そのかじ取り役の一人に、僕が就任することができた。

で、この国における研究の重要なパートナーとして、エイルシユタットを、そしてイゼッタを名指しで指定して保護することとし、その『新生ゲルマニア』を、ヨーロッパの連合国が、『我々の仲間である』と認めて保護し、さらにこちらが提供した技術で武装すれば……合衆国も手出しはできなくなる、というわけだ。

強引な上に物騒だって？

確かにそれは認めるけど、互いにバカやらないよう、できないように監視するような形で平和を保つのは、前世の地球でもあったし……かの有名な『天下三分の計』だっつてそんな感じだ。

ともあれ、こうしてすべての問題を解決しつつ、戦争を終わらせることに成功した僕

らは……国際社会において、魔法技術研究の最先端国家という立場を確立し、その中枢人物として末永く幸せに暮らす人生を手に入れましたとさ……おしまい。

☆☆☆

「さて、こんなところかね」

ことり、とペンを置いて、その場でのびをする。

デスクの整理をしてたら、奥の方に紛れ込んでた日記を見つけて……久方ぶりに書いてみた。

せつかくなので最初の方から読み返してみると、まー色んなことがあったもんだとわかる。

自分の文章力のなさゆえに、その時その時の場面の緊迫感その他が伝わりにくい駄文だったけども……まあ、本として誰かに見せるために書いてるわけじゃなかったわけだし、仕方ないだろう。

しかしこうして思い返すと、ホントに色んなことがあったもんだ。この数年ばかりで。

といつても、戦争中の出来事だけあって、あまり愉快とは言えない事柄も多かったし……中には、自分自身の醜さや不甲斐なさが見てとれる、あんまし眺めていて気分の良くない記録もあった。

それがわかってたから、これを見つけたとき、読まずに捨てようかとすら思った。

幸いにして、今、僕の人生は……所属している国等全て含めて、順風満帆と言つていい充実したものとなっている。

わざわざ嫌なことを思い出してもな、と。どうしても一瞬思ってしまった。

しかし、ここに記してある事柄もまた、僕が歩んできた人生に他ならないのも事実だ。

それはもちろん、彼女達との出会いや……ここに至るまでのあれこれも含めて。

彼女達とは、出会いは最悪だったし、それ以降もしばらくは、友好的とは程遠い関係だったというか……ぶっっちゃけ、今のような形になるとは、あの時は想像も出来ていなかった。

戦争していて敵同士……しかも、そのうち一人は身内の仇なんて間柄だったわけだし。

……まあ、それが逆に、遺恨を乗り越えて平和な世界を作るために尽力しているっていう、プロパガンダ向けの感動エピソードになった部分もあるし……ホント、この世は何がどう転ぶかわからんね。

なんて、感傷的な気分浸っていると、机の上の電話機がやかましく鳴った。

取ってみると、出たのは……今まさに、ここに至るまでのアレコレを思い返していた、あの子だった。

『あ、サンジエルマンさん！ イゼツタです！』

「おう、どうしたの？ 会議、午後からだっと思ったと思うけど……」

一時期は戦場で、傭兵か非正規兵みたいな扱いというか認識を受けていた彼女も……魔法・魔力がひとつの資源となり、それを扱う技術がひとつのきちんとした学問となつた今では、れっきとした公人である。

僕が中心となり、あれから発足した『EU』の後見を受ける形で発足し発展した、魔法関連技術の研究機関の顧問として、彼女自身が社会的な地位を持つてるし……もちろん、エイルシュタット公国やフィーネ大公との付き合いも、元通り続いている。

というか、エイルシュタット公国そのものが、魔法関連の牽引国になつてるし。

大公殿下も、それ関連で戦後は一時期大忙しだったらしい。

そして僕は、『錬金術師』として……その分野の第一人者として活動しているので、必然的にイゼツタ達とは関わる機会も多い……つてわけだ。

………もつとも、

それによらない関係も………続いているんだけど。戦争中から。

「じゃあ、その時間、会議室開けておくから。資料はこっちで用意するから、参加者への声かけだけ頼むよ。急な話だから、出席率には期待できないかもだけど」

『ありがとうございませす！ そ、それで、その……』

「うん？」

『……その後、お時間って、ありますか？ その、出来れば……朝まで、とか』

「……いいよ、待ってる。足はどうする？」

『ビアンカさんに送ってもらいます。なので……ふ、2人一緒に……に、なっちゃうんですけど……』

「いいよ、もちろん。……明日もしかしたら、疲れて仕事にならないかもしれないけど。あ、僕じゃなくて、君らがね？」

『大丈夫です！ 明日一日は、私もビアンカさんも休みとつてありますから！』

「そりゃ周到なこと……なら、泊まっていけばいいよ。……こちらも遠慮なく、2人そろってメチャクチャにするから」

『……はい♪』

——ガチャツ。

## 11—1 後日談 ビアンカ (前編)

B月K日

帝政ゲルマニアの解体後、戦後ということ……しばらくの間、混乱の時期というものはどうしてもあった。

まあ、これは仕方ない部分もある。人心も荒んでるし、社会も結構乱れて立て直しにはしばらくかかり……その間、しばらくは生活とか苦しい時期つてのはあるもんだ。

日本だって、戦後しばらくは復興が軌道に乗るまで大変な時期あったし。

しかしそれも、僕やベルクマン中佐の活躍——もとい、暗躍により、極めてスムーズに帝国崩壊↓復興開始・各国連携への流れを持つて来れたので、かなり早いペースで復興は進んでいる。

軍事・産業・経済・政治……それにおいても、『戦後はこの方針で進めよう』つていうおぜん立てというかレールみたいなのをあらかじめ作つてあったのだ。そのための準備もしてあった。

なので、それをなぞる感じでスムーズに進めることができているわけ。ほとんど社会が乱れる暇もないくらいに。皆、あまりに早く進む戦後復興についていくのに必死。う

れしい悲鳴である。

しかしそれでも、ろくでもないことを考える連中は湧いて出るわけで……そういった連中の取り締まりに、戦後まず初めに機能を回復させた警察機構の皆さんには頑張ってもらっている。

今ではすつかり、僕らがいちいち細かくかじ取りとかしなくても、きちんと国内の治安を維持できるようになった。

それを見計らって、数か月前に僕は……エイルシユタットに引越している。

理由は、エイルシユタットには、今の時代の最先端と言ってもいい『魔法工学』および『錬金学』の、さらに最先端の研究機関が設置されており……僕はその所長に任命されているのだ。

加えて言うなら、イゼツタもこの研究員兼テスターとして在籍している。

そこは、EU本部を除くあらゆる権力から干渉を受けない絶対中立の研究機関であり、生み出された成果は、ヨーロッパの全ての国家の公共の福祉のために公開され、利用される。

ただし、出資国の集合体であるEUの国々がどうしてもひいきされるといふか、優先される感じになるんだけど……まあ、そこは仕方ないだろう。

なので、その防備は一国の王宮もかくやって程に徹底したものになっている。



スパイや泥棒はもちろん、権力による裏側干渉も完全にシャットアウト。蛇の道は蛇つてことで、ミユラー補佐官とベルクマン中佐……ゲルマニアとエイルシュタットの裏側担当が総力を挙げて組み上げたセキュリティに守られ、アリー一匹通さない鉄壁の守りを誇っている。

そして、その実働部隊として働く『警備隊』には、中立性を重んじ、各国から優秀どころが選ばれて構成されたわけなんだけど……もちろん、エイルシュタットからも人材が用意された。

その1人が、ビアンカである。

後任にフィーネの近衛隊長の座を託し、若くして退役した彼女は……今度は第2の人生？として、全世界から注目される研究機関のガードを担当しているわけだ。

女性であることを感じさせない、凛々しく、規律正しく、きびきび働いて男勝りの活躍を見せる彼女は、警備隊の中でも憧れの存在になりつつある……と聞いている。

武力というか、実際に現場で動くよりは、指揮官としての活躍が多いそうだけだ。

……そんな話を聞くたびに、心の中で得意げになっている僕は……小市民なのかもしれない。

皆が知らないビアンカを知ってるってことに……優越感を感じて。

## ☆☆☆

ここで、僕の現況を少し詳しく。

研究所の職員……特に僕やイゼッタクラスの者になると、存在自体が何物にも代えがたい価値を持つ。自画自賛だけど、魔法や錬金術の最先端を突っ走る立場つてのはそういうことだ。

そんな僕らは、ひとたび研究所の外に出れば、よからぬ組織その他に狙われること請け合いです。当然その際の警備には最大限の注意が払われる。大統領でも来てるのだから。

『気軽に出かけられなくなった』ってイゼッタがしよげた。

今日もまた僕は、外部での会議のために、対戦車ライフルの弾丸も通さない頑強さを誇る特別製リムジンで送迎されている。今、無事に会議を終えて帰る最中の車の中だ。

で、その最中……我慢できなかったの、護衛としてついてきてくれるピアンカにいたずらしている。

「ふっ、ん……くう……や、やめっ……い、今、仕事中だぞ……っ！」

それなりに広いリムジンの中、わざわざ隣に座っているピアンカを、後ろから抱き寄

せる感じで……軍服の上からでもわかる形のいい胸と、ズボン装備で視覚的な防御力はあるものの、触ってしまうと感触のわかる股間に手を伸ばして……わきわきと。

恥ずかしそうに顔を赤くして体をよじらせつつも……強くは抵抗して来ないビアンカ。

早くも理性と情欲のせめぎあいが始まってるっぽいことが、彼女の表情と息遣いからわかる。……現状、理性が有利かな？ まあ、さすがに仕事中心だしね。

……けど……今日、蒸し暑い気温の中でずっとこの服着て僕の警護してくれてたせいで、うなじのあたりから漂ってくる香りが結構なことになって……正直、煩惱に悩める。

「かつ、嗅ぐなあ、この変た……んひいつ!? そ、そこ、やつ……あ、擦れ、っ……」  
理性が警鐘を鳴らしたか、ビアンカは、僕からちよつと強引に離れようとする。

しかし、そこで後ろからぎゅっと抱きしめて、抱え込むように。

硬めの生地の軍服の向こうに、確かな女体の柔らかさ、抱き心地を……そして、徐々に火照ってきて熱くなってきている、ビアンカの体温を感じる。

同時に、彼女のうなじ・肩口に頭ないし顔を押し付ける形になったので、汗の匂いと、彼女自身の匂いが混じった香ばしい香りが……あー、女の子ってどうしてこういう匂いなんだろ。

「ひああっ!? や、やめっ……ほんと、ダメだ、からっ……!」

思わずべろっつと舐めちやつた僕は悪くない。

そしてだ……こんな状態でいれば、そりやまあ……反応する場所もあるうもので。

ぎゅっつと抱きよせているビアンカの腰あたりに、僕の股間の硬くなった部分が押し付けられて……それに気づいたビアンカの目が、ひどく蠱惑的な、うるんだそれになる。

現在、情欲が彼女の理性を急激に押し流しつつあると見た。

無理もないかも。肉体の方に火が付きそうになっているところに、大好物の気配を感じた彼女は……気づいてるのかな? 自分が……僕の片足、腿の上にまたがって、股間こすりつけて角オナミたいにしていることに。仕事中心じゃなかったのー?

そして、ズボンでそんなことした日にや、さぞかし中身が大変なことになるだろうに。

——見たかったので、剥ぎ取る。

案の定……彼女のズボンを脱がせた途端、車内にむわつと広がる、濃厚な雌の香り。

その下のパンツもずり下ろしてやると……あーあ、ばつちりぐつしより。糸まで引いてこんな……ドロワーズだから余計に蒸れて、汗のにおいも混ざってすごいことになっている。

男を狂わせる匂いが、鼻から入って、ガンガン僕の頭を内側から殴ってくる。

その誘惑に打ち勝てなかった僕は……恥ずかしさで硬直気味になって、そのせいでは

とんど無抵抗なビアンカを、椅子の上にひっくり返して……いわゆる『まんぐり返し』の状態に。

そのまま、現在進行形で愛液があふれ出ているそこにむしゃぶりついて……ぺろぺろと。

「はあああつ!! や、やめ……だめ、そこ……今、汗でつ、むわつてなつて……汚いからあつ、お願……やめ、やめて……あああああつ!!」

そんな風に言いつつ、ろくに抵抗らしい抵抗もない。

恥ずかしいのはホントなんだろうけど……体は正直だつてことだ。

頭がそれに正直になるのにはしばらくかかるのが、彼女の長所でもあり短所でもあり……可愛いところでもあり、エロさの秘訣でもあり。

とりあえず、少なくとも体が喜んでくれるのは確かなので、このまま続ける。

……よっぽど興奮してるんだな、すすつて飲める勢いで愛液があふれ出てくる。

……途中から思い付きで、遊び始める。

この車はリムジンなので、飲み物とか色々充実している。

冷蔵庫を開ければ、世界各地の色んな飲み物やお茶請けがずらり。主に、僕の好物をセレクトしてたっぷりを用意されている。

その中から、僕は飲み物ではなく、コーヒーとかに入れたり、酒と組み合わせるカク

テルを作ったりする際に使う、甘いシロップを取り出して……かける。

ピアノカの、ひくひく動いてるそこに。たっぷりかける。ていうか、塗る。で、いただく。

……わかめ酒もしようかと思つたけど、さすがに車の中ではね、揺れるしね。ピアノカ自身も揺れるからね、気持ちよがつて。足閉じてらんないだろうし、こぼれるわ確実に。

まあ、シロップをだら〜つとかけたピアノカの下半身だけでも十分に美味しそうだし、実際に美味しかった。満足。

本人が恥ずかしさのあまり、トマトみたいに顔真っ赤にして、言葉も出ない感じだったのがかわいくて、さらに満足。

……イゼツタにも時々同じことやるんだけど、彼女の場合、どっちかっていうと僕に尽くしてくれる感じなので、プレイそのものにノリノリになる。わかめ酒とかも含めて、『どう、美味しい？』って……僕を存分に甘やかしてくれる感じで。

それはそれでいいんだけど……やっぱ、恥ずかしくてどうしようもない感じを楽しみつつ、いじめてさらに楽しもうと思つたら……ピアノカだな。

なんてことを考えながら、オマンコやその周りはもちろん、足の付け根や太もものあたり、陰毛やお尻の方まで全部味わつて……蜜と愛液と汗でべとべとのネチヨネチヨ

だったのを、代わりに僕の唾液で同じ感じになるまで味わい尽くして、

その間に、我慢できなくて何度か軽くイッてしまったビアンカの潮吹きも飲み干したから……まあ当然ながら、僕の下半身の方はもっと手が付けられないことに。

散々舌で煽られ、辱められつつも、ビアンカもそれに気づいていたから……ふう、と一息ついて、僕が自分のズボンに手をかけて……中からそれを取り出した時には、羞恥の中にも確かな期待を込めて、こっちに視線を向けてきた。

形だけ、自分の体をかき抱いて守るようにしつつも……視線は僕の股間にくぎ付け。

目は口ほどにもものを言う、つてのはよく言ったもんだ。

彼女の場合、こうなると全身でなんかこう……いちめてオーラ出しまくるから、より分かりやすいんだけど。それこそ、イゼツタ以上に。

……さて、

このまま彼女の準備万端のオマンコに、僕の準備万端のコレを入れてしまうのはたやすい。いつもはそうしてるし……その場合も、ビアンカは実にいい感じで色に狂つてくれる。

けど今日は……ここはあえて、もうひと手間加えるというか……熟成してみよう。

物欲しそうにしているビアンカをあえて放置し、彼女からはぎ取ったパンツを手にする。

「えっ？」って感じの表情になる彼女に構わず……それを、勃起した僕のペニスにかぶせる。

そして、自分でこすって、しごく。彼女の香りに包まれながら……あえて自家発電。

「え、ええ、え!? あ、あの……そ、それ、そんなっ! わ、私、もう……これ、準備……な、何で……!? わ、私のパンツ、そんな……ええ、何でっ……!?」

目の前にある女体を放置して、よりにもよって自分が脱いだパンツで自慰を始めた僕に対し、ピアンカは、絶望と困惑と焦燥が入り混じったというか……何とも形容しがたい感じの表情になって、震えながらこつちを見つめている。

一応、口先だけの……もう研究所つくとか、時間ないとか、理由を述べておくも……イヤイヤ、と首を横に振って、泣きそうになる。

「やつ、だめ……そんな、嘘……ひどい、よお……やめて……! や、やるなら、わ、わたっ……ここ、ここに……お願い……」

……やばい、かわいい。美味しそう。もうこのまま犯りたい。  
けど、我慢……我慢……。

そのまま、後でおいしくいただくピアンカの肉体を想像しながら全力で右手を動かす……どびゅっ、と存分に精液を吐き出す。ピアンカのパンツに、べつとりとしみこませる。



……よし、じゃあ、はいこれ。

「……………えっ……………こ、コレを、もしかして……………は、履け、というのか……………？　そ、そんな……………」  
ただでさえ愛液でドロドロだったパンツに、僕の精液までしみこんでもっとドロドロになったそれを受け取りながら……………おそろおそろ、といった感じで聞いてくるビアンカ。

そしてそれを……………『ほら、もう着くよ？　降りなきやいけないよ？　ノーパンでズボンなんか履いたら、そのびしょびしょのオマンコで確実にばれるよ？』と僕にせかされ……………『お前のせいだろうが……………』と、恨みがましくしつつも、真っ赤になって言うてるビアンカ。

仕方なく……………しかし、明らかにそれにも興奮しながら、パンツをはく。

大量の水分を吸って、裏地にべつとりと混合液のついたそれを、腰まで上げると……………その瞬間、たしかに『びちゃ』という、着衣の際にあるまじき、粘着質な水音が。

さぞかし大変なことになっているだろうな……………あの中は。

あれで動いたりしたら、もっと大変なことになるだろうな。

気のせいか……………履いただけで軽くいきそうになってないか。

そしてそのままズボンもはいて、どうにか残りわずかな時間で……………目的地に着く前に、呼吸を整えて顔色を元に戻そうとしている。

「こんなあ……ひどいい……っ！　こんな、こととして……楽しいのか、この、変態……！」  
 生殺しにもほどがある状態で強制終了させられ、しかも、目の前にある自分の体を無視して下着オナニーで処理され、挙句それに使った下着を履かされ……羞恥心やら屈辱やら何やらで、頭の中がしっちゃかめっちゃかになっていているらしいピアンカ。

さつきから、何とも言えない感情がごっちゃんになってこもった視線を向けてきている。

ちよつとでも動くと、パンツの中の液体が動いて恥部を蹂躪されるので、もじもじと縮こまって極力動かないようにしているっぽい。顔、赤い。目の端に涙。時折、『ひう』『んあ』とかの声。

……あまりにかわいかったので、唇を奪う。

「んむう!!　ん、う……ふぎゅ……ふはっ！　な、何考えて……ばかあ……こんな、こんなことされたらア……せつかく、せつかく呼吸、整えたのにんんうううッ!!」

再び奪う。今度は舌まで入れる。

舐める。彼女の舌を、歯の表裏を、上あごも下あごも……舐めて、しゃぶって、すすつて……ん？

抱きしめてる彼女の体が、びくびくって……軽くイったか今ので。

しかも何か、下腹部のあたりから、潮吹きか何かにしては大きな水音が……しよわわ

わわ、つて……え、漏らした？

あー……いくら吸水性のいい素材で作った下着とはいえ、さすがに失禁は隠し切れな  
いか……ズボンがびしょびしょになった。何が起こったか、一目ではれるな。

……あ、やべ、着いた。

結局ビアンカ、服装以外は整わないまま、研究所に帰り着いてしまった。

すばやく『錬金術』で、彼女のズボンだけ乾燥させてシミとかを消して——しかし中  
のパンツはそのまま——見た目は問題なくしたところで……リムジンの扉が開く。

あーあー、出迎えご苦労。いいよ、楽にして。

「はあ……はあ……へあ……た、ただいみや、戻った……」

……え、ビアンカどうしたのかって？ ああ、ちよつとね。

走ってる途中、一時うまくクーラーが動かなくてさ、車内がちよつとばかり暑くなっ  
て……で、こうなっちゃたんだよ。軍服だと暑いから上脱いでいいって言ったのに、ほ  
ら、彼女真面目じゃん？ で、これだよ……ちよつとしたら元に戻ると思うから、うん。  
僕のザ・言い訳に応じるように、どうにか調子を取り戻してきたらしいビアンカが根  
性で体を動かし、僕と一緒に車を降りる。

さて、まあ言うまでもなく……僕もビアンカもこれから通常業務に戻るの、『続き』  
はお預けである……今はね。

じゃ、ピアンカ……夜、寢室で待つてるからね。

ああ、着替えちやだめだよ？

錬金術で、匂いは外に漏れないようにしておいたから……このまま、上は汗でべとべと、下は色々な液体でねつちよねちよのぐつちよぐちよのまま、夜まで過ごしなさい。で、夜になったら……この軍服のまままで部屋においで。

合鍵は持つてるね？ 僕より先に来たら、それ使つて開けて、寢室で待つてなさい。そしたら……望み通り、滅茶苦茶にしてやるから。

## 11—2 後日談 ビアンカ（後編）

引き続き、B月K日

研究者という立場上、名前だけでぐーたらして過ごせるようなものではない。

きちんと、いまだかつてない未知なる学問である『魔法工学』と『錬金学』について、研究し成果を出し、それを国際社会に発表することによって、僕は僕の存在意義を果たすことになる。

とはいえ、僕自身望んでこの仕事をやってるし、ぶつちやけ色々楽しんでることもあり……これらの義務を苦に思ったことはない。

文字通りの『錬金術』……すなわち、原子配列の組み替えによる、金をはじめとしたレアメタルの生産に成功したときなんかは、ホントに楽しかったなあ。資源枯渇による文明衰退の可能性が一気に遠のいたことで、有史以来の大発見だつて世界中でニュースになってさ。

極端な話、捨てるしかないゴミから、未来を暮らしていくのに必要な資源が作れるも

同然なわけだから……そりゃ、世界中注目するよね。

……ちなみに今、もう少しで一般的な『錬金術』から、応用に応用を重ねて……『鋼』系の錬金術理論の確立にまで手が届きそうだったりする。w k t k。

とまあ、いくら僕が楽しんでやっている学問でも、世間様から見ればすさまじく難しい学問であることに変わりはない。

なので、僕やイゼツタという研究者や、その施設を守る立場にあるピアンカ達に至るまで、人類の未来を切り開く先駆者たちと、それを支える者達として、尊敬の的として見られている。

……しかし、そんな尊敬を集める先駆者や支持者達も……所詮は人間である。

飯も食えばトイレにも行く。疲れたら寝るし……盛りもする。

現にほら、普段は男勝りの凛々しい立ち姿で知られるピアンカだって……今こうして、僕の帰りを待ちきれなくて、部屋のテーブルの角に股間をこすりつけて角オナに励んで……

「ひ、は……あ、や、つと、きたあ……遅いぞお……っ！ どえ、だけ、待たせ……んくっ！」

そう、すでに息も絶え絶えになりながら言ってくるピアンカは……普段の凛とした雰囲気がほぼ完全に焼失し、とろけきった雌の顔で、だらしなく口を開けて喘いでいる。

というか、今軽くイってしまつたらしく、そのまま脱力して崩れ落ちそうになるところを抱きとめて……あ、ダメだ、コレホントに限界っぼい。服越しに触っただけでビクツ！てなる。

……うん、半日待った甲斐があつた。とつても美味しそうに仕上がってる。

元々、今日は……ホントの意味で彼女を平らげたいと思つてたところだ、実に結構。

彼女を抱き上げて寝室に運び……ベッドの上に下ろす。

その間から、すでに変形してズボンにテントを張っている僕。それに気づいて、そこに視線がくぎ付けになっているビアンカ。

ベッドに下ろしてから、凝視しつばなしのビアンカの前で……僕自身結構もう限界なので、ズボンとパンツを一気に下ろす。飛び出る肉棒。その先端からは……すでに先走りかトロトロと。

それを目にしたビアンカの表情が、もう何か……ご飯をお預けされてる子犬みたいな。

直後……いいよ、って許可出したら……あつという間に飛びついてきて、一気に僕のを、喉の奥まですっぽりと啜え込む。『じゃあ、口でもら……』って、言い切る前に来たよ。

口の中で、一心不乱に舐め回しながら……同時に、胸いっぱい息を吸い込んで匂いとか堪能しているのがわかる。

だって、竿に風感じるくらいに勢いよく息を吸って吐いて……すー、はー、すー、はー、つて。

「はっ、ぐ、む……んー、すー……はあー……つぶ、じゆる……ちゅぽっ！ ああつ、もう、らめ……頭、しびれて……あは、ん……らめになるう……。おちんぽのことしか、考えられなくなるう……もう、今日ずっと、我慢してたからあ……」

本当にそれしか目に入っていないような乱れっぷり。

舌はもちろん、歯や頬の裏、たつぶり出てきて口の端からだらだらと垂れてくる唾液さえ存分に使って、僕のを味わいっつも熱烈に奉仕してくれるビアンカ。

あまりにも可愛くて、そして気持ちよくて……ずっと我慢してたことも手伝って、あっさり達してしまふ。

ビアンカの頭を押さえつけ……あえて、喉の奥に思いっきり突っ込んでじゃなくて、ちよつと引いた位置に持ってきて……口の中に全部出るように、精を放った。

「ん、っ、ぶ……うぐ……むうふ……っ……!!」

直前に『ごぼすの禁止ね』と言いつけた上で、たつぶりと吐き出す。

どぼどぼと口腔内にたまっていく、熱くてねっとりとした白濁液を……ビアンカは必



死で飲み下し、あふれないように……ああでも、やっぱり口の端からちよつとずつ吹き出しちやつてるな。さすがにペース的に間に合わないか。

それでも、最後の一発まで全部口で受け止めたビアンカは、『ちゅぽっ』という小気味いい音と共に僕のペニスから口を話すと……まだ中に残っている分を吐き出してしまわないよう、口を手で押さえて……そのまま、上を向いて……ごくくんつ、と喉を鳴らして飲み下した。

そして、ぷはあ、とこれまた音を立てて息をついたと思うと……

「はああ、ふあ、ふああああ……！」

なんか、感極まった感じで、恍惚の笑みで……自分で自分の体を抱きしめながら、ぞくぞくとその身を震わせる。

な、何かビジュアルル危ないな……やばい薬でも決まっちゃつてるみたいだ。

まあ、さんざん肉体を開発された上に、さんざんお預け食らった今の彼女にとつては……精液は薬みたいなものかもしれないけども。

……それにしたつてなあ……むしろ、薬はこれから使うところなのに。

トリップ中のビアンカはいったん置いて……一発出して少し冷静に慣れた僕は、戸棚から小瓶をひとつ取り出し、栓を開けて、匂いを嗅いで確認。うん、これだ、間違いない。

今日のために用意しておいた……とっておきの、特製の薬。

それを、全部口に含んで……ビアンカの顔をつかんで唇を奪い、口移しで流し込む。

「ん、む!!」

ごくり、とそれをビアンカが飲み干したのを確認し……素早く、ビアンカのお腹に手を当てて『錬金術』を発動……その薬の効能を即座に發揮させる。

すると……

「な、何を飲ませ……へ？ え、あ、え……ふええええ!! はぎつ、あぎや……ああああ  
あつあつあああああ!! いううえあ ああああああつ!!」

びくん、びくん！ と大きく体を震わせるビアンカ。明らかにやばい反応。

同時に聞こえる、しよわわわ……という水音。また漏らしたな。まあ、無理ないけど。

しかし、別に違法なやばい薬を飲ませたわけじゃないので大丈夫……刺激は強いけど、きちんと安全な薬だから。

「な、なにや……何、これえ……び、媚薬、か……う？」

残念、違うんだなこれが。

いや、そういう作用も確かにはあるんだけど……本来の効果はね。

ネタ晴らしはちゃんとしてやるけど、その前に……服を全部脱ぎなさい。

その命令に、ためらいなく従うビアンカ。むしろ、待つてましたと言わんばかり。

まあ……蒸し暑い昼からずつと着っぱなしで蒸れてること間違いなしな上、下はリムジンの中でのアレでひどいことになってるわけだからね……。

ボタンをはずす時間もおしいとばかりに、かなり乱暴に上の服を脱ぎ捨てる。途端、むわあつと広がる彼女の汗のにおい……しつとりと湿った肌の表面が、何とも艶めかしい感じ。

その勢いのまま下着も外すと、彼女の形のいい胸があらわになり……その谷間は、一層蒸れて、もう……美味しそうな感じに。

そしてビアンカは、ズボンに手をかけると……一瞬だけためらったのちに、パンツごと一気にずり下して……うわあ、これは予想以上。

脱いだパンツと股間の間に、糸をひくなんてレベルを通り越して、水あめみたいにぬちゃあつと……

パンツの中で、人肌で半日暖められ続けた、精液と愛液と汗とおしっこ（しかも失禁2回分）の混ざったものが、すごい匂いになって一気に広がって、僕のところまで届き……

気づけば、僕は彼女を押し倒していた。はぎ取って投げ捨てたパンツとズボンが、斜め後ろの方の床に落ちて『びちゃっ』と水音を立てた。

これは……予想以上に強烈だ。一回出して冷静になった頭が、即座に沸騰しそうになった。

これも一種のフェロモン……って奴なんだろうか？ 腹の底から、脳の奥から衝動が湧き上がってくる……目の前にいるこの雌を犯したいと。滅茶苦茶にしてやりたい、今すぐに！

肉棒も、さつきまで以上にビキビキに硬くなつて……痛いくらいだ。

蒸れてグズグズになった蜜壺……ここに入れたら、どれだけ気持ちいいだろう。

けど……だめだ。まだ、最後の仕上げが残つてる。

半日かけて仕込んだ——薬とかその他用意する手間・時間も含めれば、それこそひと月以上だが——この極上の雌肉を平らげる舞台を整えるのに必要な、最後の一手。

『はやく、はやく』って視線で訴えてくるピアンカの、ドロドロになつている割れ目に、つんつん、と肉棒の先端を触れさせつつ……

さて……ピアンカ、犯る前に……ひとつ、いいことを教えてあげないと。

「な、何だ、こんな時に……わ、私もう、我慢が……はあん……もう……欲しくて、おかしく……なりそう、なんだあ……！」

まあまあ、そう言わず。

ピアンカはさ……戦争が終わつて、それでも僕とこういう体の関係が続いてるわけだ

けど……婦人科で避妊薬出してもらって服用してるよね？ 仕事に響かないように、妊娠しないように。

「……ああ、そうだが……」

その、避妊薬なんだけどね……今、無効化されてます。

「……はっ。」

さつき口移しで飲ませた薬あるじゃん？ アレ、媚薬効果はただの副次的なものだし……本命の効能は、女性の体を妊娠するのに最適な環境にする、ってものなんだよね。

避妊薬の効果なんか一発でかき消しちゃう上……逆に排卵を誘発。まあ、これには周期的なものも絡んでくるけど……その辺計算して、今日使うのがビアンカの体的には一番効果が期待できる日取りなので問題なし。婦人科からその辺のカルテは裏から入手済みなのだよ。

加えて、特殊な薬効で膈内の酸性成分を中和し、抗菌作用は残しつつも、注がれた精子が生き残りやすい環境を作る。この環境下では、精子の寿命は数倍に伸びる上……内部で水分が抜けて粘性が高まり、たつぷりそいでもほとんど垂れてこないくらいになる。

おまけに……僕は元々体の各種機能を薬品と錬金術で強化していて……当然、雄としての機能もそれに当てはまる。

自分で言うのもアレだが……絶倫はもともとだったところを、さらに強化してある。そこにさらに、さつき事前に僕、栄養剤でエネルギー補給して『錬金術』で即座に変換させてきたので……スタミナも、君の中に注ぎ込むための残弾も、たつぷり残ってるわけ。

……さて、ここまで言えばわかるかな？

これから僕が、『何をするつもりで』ピアンカを犯すのか……。

「そ、それって……そんな、本当にそんなことされたら、私は……」  
一拍置いて、

「……妊娠、してしまうじゃ、ない、かあ……！」

そのつもりで今日、こうして呼んだわけだからね。

選ばせてあげるよ……君に。

今なら、後戻りもできる……おねだり次第では、そうならないようにしてもいい。

けど……もし、君がここから、これ以上の快楽を求めるなら。

今、ぴとつと君のアソコにくつついてる僕のコレを、もし受け入れるなら……そっから先はもう、後戻りできないし、僕も後戻りなんてする気は一切ない。

ここから先に進むなら……子種が着くのは不可避だと思え。

これからやるのは、交尾だ。子孫繁栄、種族保全の営みだ。

犯す。徹底的に、君を犯す。そして……全部、全部君の膣内に、子宮に注ぎ込む。一発残らず、中に出す。孕ませるつもりで。……いや、孕ませる。

今日、僕を受け入れるなら……もうこの先、僕は一生君を放さない。逃がさない。母親になれ、僕の子を産め。一生、僕だけのものになれ。

そうしたら……僕も、君を一生大切にする。

——さあ、どうする？

「……はあつ、そんなあ……卑怯だつ……お前は、ホントにい……ひどい、男、だあ……」

そーだね、ひどいね。

酷い男につかまっちゃったもんだねー、君は。

「でも……」

でも？

「……私は、そんなお前が、好きになった、から……惚れた弱みとは、怖いものだな……なんだかんだ言つて、私はすでにお前を受け入れる気である……。それに、もう……この、みだらに作り変えられてしまった体を、ゆだねられる相手なんて……お前以外、居るわけがない。だから……」

……

「だから……私の全部を、喜んで差し出そう……。さあ……抱いてくれ。犯してくれ、翻つてくれ、弄んでくれ……。快樂で狂うまで、好きにして……。そして……。種をつけてくれ、孕ませてくれ、私に……。お前の子供をつ、産ませて……。一生、お前だけのピアンカにしてくんああああああつ!? なっ、あ、が、ぼっ! さ、最後までいわしえろ、ばかああああ!」

ごめん、待てなかったよ。

言ってる途中で、思いつきり膣に肉棒を突き入れて……。最初から全力で始めた。

予想通り……。すごく具合がいい。

色々混ぜつてドロドロの潤滑油たつぷりの肉壺は、やわらかくて、でもすごくよく締まって……。きゆうきゆう、絞るように……。! やばいって、こんな……。持たないって!

ピストンの動きとは別に、快感でがくがくと震える。

一擦りするたびに、血が集まって肉棒が熱く、硬くなる。痛いほどに怒張する。

ばちゅん、ばちゅん、と、素肌同士が激しくぶつかり合う。その勢いに、汗が、愛液が、弾けて飛び散って、それらの匂いがまた僕を刺激する。

気づけば僕は、ピアンカの体にのしかかって、力いっぱい抱きしめながら腰を振って



いる。

軍服で蒸れた、ビアンカの匂い……つんとくる汗のにおいや、彼女自身の甘い匂い……股から漂ってくる、香ばしくていやらしい、雌の匂い……全てが僕を狂わせる。

鼻から入ったそれが、神経をしばれさせ、脳内で大暴れし、煩惱を爆発させ……神経を通つて体中をぞくぞくと興奮させ、ペニスに達した快楽は、ペニス自身が直接受ける快楽とも混ざつて……もう、どうしようもないくらいに僕の股間をバカにする。

あ。

ダメだ、出る。

出す。

出た。

どくどくと、膣内に注ぎ込まれる精液。子宮口を通つて流れ込んでいくものもあれば、あふれて外に出てくるものもある。

そして、それ他に構わず……出している間も僕のピストン運動は続き、快楽をひっきりなしにむさぼり、彼女の方にも叩き込み続ける。

本当に……獣だな。覚えてたのサル……いや、そんな可愛いもんじゃない。

徹頭徹尾、女を犯すことしか、孕ませることしか頭にないケダモノ……それが今の僕だ。

けど、それでいい。

今日の僕は……このベッドの上で、この雌に僕の子を仕込むことだけが……

ビアンカを、永遠に僕のものにすることが……僕の望みだ。全てだ。

また、出る。子宮口の奥へ奥へ、流し込む。

「あ——っ、ひっ、ああああああ！ しゅごっ、ひああああ！ お、おぐっ、奥うっ！

熱い……はあん、熱……せーえき、来てりゅ……赤ちやんの部屋、もうたぶたぶなの  
にい……満たされる、熱いので、びりびりっ、びくびくっ……ああ……コレ、孕  
む……絶対孕んじやう……」

耳に届くは……ビアンカの脳が完全にとろけきって墮ちてる状態にある証拠とも言  
うべき、淫語全開の、男の本能をさらに刺激する言葉の数々。

このころには……普段は小難しい理論を相手に格闘できるレベルの僕の脳も、ただひ  
たすらに目の前の雌を犯すことしか考えられなくなって……気が付けば、本能のままに  
交尾が進む。

ビアンカをうつぶせにして、形のいい安産型の尻をわしづかみにして腰を打ち付け、  
思いつき突き込んで一番奥で精液を吐き出し、

そのまま今度は自分も体ごと倒れこんで、体でビアンカを抑え込んでへこへこ腰を  
振って……びったりと密着して、互いの体温を、しつとりと肌を湿らす汗を感じながら

精を放ち、

向かい合つて抱き上げるようにして下から容赦なく突き上げては、重力に盛大に逆らつて噴水のように腔内に白濁を噴き出し、

「あ、つ、ひあああああつ！ もう、らめうえいいあああああつ！ ひゆうんつ、んああ、ああ、あああ！ いい、いいのおつ！ もう、わらひつ、これがなきやらめえつ、生きていけないいっ！ おちんぼなきや、あ、あなたがいなきやダメなのお！ 好つ、きつ……しゆき、大しゆきいっ！ ずつと、ずつと一緒にい……子供、産むから……そばに、おいて……ああ——つ!!!」

心の底から嬉しそうで、気持ちよさそうな顔で……そんなうれしいことを言つてくれるビアンカを下に組み敷いて……僕は、劣情の赴くままに、獣の本能のままに腰を動かし続けて……

……気が付いた時には、絶対に逃がすまいとでも言うように、体全体で、向かい合う形でビアンカにのしかかり、その裸体を抱きしめ……ビアンカもまた、両手両足を僕の体に回してしがみつくようにしながら……穏やかに寝息を立てていた。

下半身はというと……あらら、まだつながつたままだ。

そして、ビアンカの下腹部はぼっこりと膨れていて……僕が一体、昨晚どれだけの量

をここに注ぎ込んだのがわかる。

……動けないので、仕方ないからこのまましばらく休んでいることにして……

丁度いいというか、首だけ動かせば届く位置にあったので、今日何度目かの接吻。ピアンカのやわらかい唇を堪能させてもらった。

「ん、ん——えへっ、えへへ……んう、しゅきい……っ！」

……どんな夢を見てるんだか……幸せそうな寝言と共に、ぎゅつとさらに強く僕の体を抱きしめてしがみつくピアンカ。抱き枕にされるのも……うん、なんとも心地いい。

……さて、いつそのまま、もうひと眠りしちやおうかな？

今なら、なんだか……僕も、いい夢を見られそうだ。

起きたら……色々やらなくちゃいけないことがあるな。

今日の休暇届は、あらかじめ出したからいいとして……。

ピアンカの産休……いや、寿退職に向けての手続きその他、根回しだな。

彼女には今後、仕事でじゃなくて、人生の全部全部で一緒に生きていくわけだし。

それに伴って、色々と外交分野でも進めることも……忙しいな、頑張ろう。

僕に人生をささげると言ってくれた、彼女を……絶対に幸せにしなくちゃいけないからね。

## 12—1 後日談 イゼツタ (前編)

E月T日

こないだ言った通り、僕は今、エイルシユタットの研究所に居を構えている。

基本、そこから離れることは……公務でもない限りはない。というか、許されない。

しかし、今日、というか今、僕は……旧ゲルマニア国内、現EU直管の国際特別中立領域にある……僕の実家というか、生まれた家に来ている。

毎年この日だけは……特別に用事ができない限りは、まあ当然護衛付ではあるけど……遠出してここに来ることが許されている。

今日……父の命日なもので。

ここには、今もなお『ゲールの軍閥の名門』という立ち位置だったころのサンジェルマン家の屋敷が残されていて、人も住んでいる。僕の母と……使用人たちが。

父が結構な階級の軍人だったことで、相応の額の恩給や年金が出るし、僕も今では立場に見合った高給取りなので、仕送りもしてる。なので、ここにいる人らが生活に困ることもない。

よっぽどの贅沢や浪費でもしなければ、普通に暮らしていける。

で、この屋敷の敷地内に……父のどうか、サンジェルマン家の先祖代々の墓があるわけ。

そこに、僕はこうして墓参りに来ているわけで……連れと一緒に。

そして、まあ……その連れつてのが……僕の隣で真剣に祈っている、イゼツタなんだけどね。

……うん、そう。ここに眠っている父を葬り去った……張本人である。

ついて来たい、と言い出したのは、イゼツタの方からだつた。

どこから聞きつけたのかはわからないが——案外ピアンカあたりが口を滑らせたのかもかもしれない——僕が、墓参りでこの実家に帰省することを知ったらしく、その直前になつて『連れてつて！』と、僕の執務室に飛び込んできて直談判してきた。

ご丁寧に、自分に割り当てられた分の仕事、全部終わらせた上で。

こう言つたらなんだけど……最初、正気を疑つた。

いや、だつて……彼女だつて、僕の父がどうして死んだのかくらいは知ってるはずだもの。

それで一時期落ち込んだもの……自分が出た戦場で死んだつて。

しかも、その死因つてのがまた……大槍にどつ腹を貫かれて、つてもんだからね。

間違いなく、イゼツタがファ○ネルばりに暴れまわらせてたあの馬上槍が直撃した結果だからね……敵司令部の壊滅のために、一気に何十本も突撃させたうちのひとつだったって。

……父の遺体を前にして、漫画みたいにきれいに腹部の肉や骨が消失して、ものの見事に空洞になっていたのを見た時の衝撃は……今もよく覚えてる。

まるで、体の中から爆弾で吹っ飛ばされでもしたかのような……しかし、焦げ跡なんかはなく、妙にきれいな円形になって貫かれていた。

いつたいこれは、誰にどんな殺され方したんだよ、って、愕然としたもんだ。

せがまれて、そのことを一度イゼツタに話したこともある。途中から泣きそうになつてた。

そんなイゼツタが……まぎれもなく、歓迎されない立場であろうことを理解した上で……ここについて来たいと言ってきた。どうしても、墓参りをして……父に、そして母に挨拶したいと。

『だって……これから結婚するのに、こっちの都合で挨拶もなしなんて、失礼じゃないですか……それに、これは、確かに私がやったことの結果なんです。だから……逃げたくない』

『恨まれてるだろうなって、わかってます。それでも……私、行きたいです』

で、墓参りつてことで、喪服——持ってないそうなので新調させた——着用の上、案内して連れてきて……今、こうして手を合わせているところだ。

……ごめん、父さん。長いこと留守にして……今、色々忙しくてさ。

ろくにこうして実家に帰省するようなこともできない身の上になっちゃったもんでさ。……最後にこうして墓参りに来たの……まだ、戦争が終わってないころだったよね。

その後、僕、祖国裏切つてこうして戦争終わらせたわけだけど……その時、もしかしたら草葉の陰で、父さん怒ってるかな、とか言つたつげね。

……今回の報告は、もっとあんたを怒らせるかも。

何せ……あんたの仇と、今度結婚することになったからね、僕。

ほら、今僕の隣にいる……あ、ごめん、

本人、直接……あんたに話したいって。

「……えつと……は、はじめまして。その……こういう時、何から言い始めたらいいのかわかんなくて……その、すいません。口下手で。」

……そう言うの関係なく、聞いてて不快かもしれないですけど……それでも、どうし



てもお話ししたくて来ました。

……イゼッタといいます。

エイルシュタットで、その……魔女、というか……姫様……あー、オルトフィーネ大公殿下の下で、戦ってました……あなたを、殺してしまった……者です。

その、今度……息子さんと、結婚することになりました。

多分、もう……お腹に、赤ちゃんもいて……えつと、いきなりですよ。すみません。……自分でも、無茶苦茶だつて思います。

あなたの祖国と、戦争して……たくさん、戦場で戦つて、いっぱい壊して……命も奪つて……それなのに、こんな風にもうのうと生きてるばかりか……敵国の軍人だった彼と、結婚するだなんて……しかも、それを、自分が殺したあなたの墓前で、報告とか……。……それでも……ごめんなさい。私、彼のことが好きなんです。

出会いは、なんていうか……お世辞にもロマンチックとか、まともな関係が成り立つような感じじゃなかったですけど……それから色々ある中で、私、彼にいっぱい助けてもらいました。

彼にとつて、私は敵で……あなたと、自分の左目の仇で……。私にとつては、姫様の祖国を占領した上、自分を閉じ込めて、国の占領もしている敵で……。

それでも、私たち……一緒にになります。なろうと、思つてます。

……命を奪ってしまったこと、許してなんて言えません。

もし……そうですね、私が死んで……天国に行くか、地獄に行くかわかんないけど……もし、その時会えたら、何と言っていたいただいてもいいです。

けど……

……今だけは、私……これから幸せになります。ならせて、いただきます。

あなたの息子さんと結婚して、あなたの孫も産んで……家族や、友達に囲まれて……。

……最後の最後まで、幸せな人生を全うして……それだけでなく、たくさんの人を幸せにして……これから先、ずっと生きていくつもりです。

……私は、イゼツタ。

姫様の……エイルシユタツトの魔女です。

でも、エイルシユタツトだけじゃなく……世界全部を、幸せにします。

姫様と……彼と、協力して……『皆が選べる明日』を、作ります。

それが……この戦争で散っていった人たちのために、そして、これからこの世界を生きていく人たちのために……私がこの手で、この力で、できることだから」

☆☆☆

意外にも、屋敷の使用人たちや……僕の母は、イゼツタを前にしても、邪険に扱った  
り、恨み言をぶつけるようなことはなかった。視線でにらむことさえしなかった。

武家の名門だつてことが逆に幸いしたらしい。『勝敗は兵家の常』つていう言葉通り  
……もたらされた戦の結果を受け入れて割り切ることにしては、皆、僕なんかより心  
得があるようだ。

もちろん、全く何も思うところがないわけじゃないようだけど……それでも、互いに  
全力を出した戦いの結果としてそうなつたのなら、そして、それを礎にすでに国が、世  
界が動き始めているのなら、自分たちからは何も言う気はないとき。

そう聞いて、ぼかんとするイゼツタと僕に対し……締めくくるように、母からこんな  
言葉が。

『あえて、私があなたたちに望むことを述べるなら……あなたたちが、此度の戦で犠牲に  
した者達の命が、決して無駄ではなかったと……新しい時代を作る、確かな役に立った  
のだと言えるような、素晴らしい時代を作りなさい。それが……勝者の務めです』

そして、イゼツタに向き直り、

『夫に……挨拶してきたそうですね。私は、確かに、あなたに夫を……生涯の伴侶を奪わ  
れました。それについて、思うところがないわけではありません……しかし、残された  
息子が、あなたという強い女性を受け入れ、愛し……手を取り合つて未来を共に紡ごう

としてゐるのなら……そして、あなた自身が罪から逃げず、受け止め……それでも未来を強く生きようというのなら、私からは何も言いません。我が義娘として恥ずかしくないよう……この判断が間違つていなかったと、夫の死は決して無駄ではなかったと、後で私が安心できるよう……立派に生きてみせなさい』

我が母の懐の深さ、器の大きさに……改めて驚かされ、イゼツタに至つては……説教とセツトとはいえ、罪を赦されたばかりか、義娘として受け入れまでしてもらつたことに、感激して涙をぼろぼろと流していた。ついさっきのことである。

そして今、僕とイゼツタは……僕の寝室、ベッドの上にいる。

少し早くはあるけども……夫婦としての営みのため、どちらも生まれたままの姿で。

ちなみにこのベッド、キングサイズもかくやつていう大きさの、作りもしっかりした超高級品なわけだけど……僕が物心ついた時から、ずっと使っているものである。

シーツとか、そういう交換する必要があるもの以外……土台とかはずつと同じだ。

母からは、子供のころから……ずっと使えと、それこそ、妻を迎えて初夜に臨む時にもここで、これを使えと、その後も夫婦2人でこれで一緒に寝ろ、とまで言われてきた。

理由は……今まで自分1人で使つていて、その広さをよく覚えているところに、誰かを迎えて一緒に使うことで……自分以外の誰かが、それまで自分一人だけの領域だつたところに、これから加わるんだと、しっかりと体感してわかるように、だとさ。

……なるほど、効果的と言わざるを得ない。

ずっと使ってきたものだから、この大きさは頭でも体でも覚えている。

その広さは、今まで自分一人だけのものだったところ……今はそこに、自分以外に、これから一緒に生きていく大切な人がいるんだと、考えるまでもなく感じる。

目の前で、生娘みたいに顔を赤くし、気恥ずかしそうにして……しかし覚悟を決めて、裸体を隠そうともせずさらしているイゼッタ。

これから僕のものになるその体を、心を、イゼッタという存在すべてを目の前に差し出されている感覚。もう何十回、いや何百回と抱いているはずなのに……不思議なもので、改めてこうして彼女の裸体を前にすると、初めてこの身に抱くかのようにドキドキする。

……ある種の、魔性の女、傾国の美女、って奴なのか……それとも、ただ単に僕が、籠絡されるレベルでベタ惚れしてるだけか……

……まあ、いいや。やることは変わらない。

いつの間にか、自主的に避妊薬飲むのをやめていて……ひよつとしたらすでに、その胎に僕の種がついているかもしれない彼女……数か月後には妻になっている彼女を、改めて僕のものにする。

そのために、僕は、乱れそうになる呼吸を整えつつ……伸ばせば手を触れられるとこ

ろにまで行って、彼女の肩に手をやり、ぐいっと抱き寄せて……抱きしめて……

最初にまず、唇から奪って……そのまま、ゆっくりと押し倒した。

肌を合わせて、じゃれつくように……しかし、ゆっくりと手を、お互いの恥ずかしい部分に伸ばして、さすったり握ったりしながら、徐々に、徐々に体が火照っていく感覚を楽しんでいる。

じんわりと、体の中からあつたかくなっていく。同時に、相手もそうなっているのを感じる。

しつとりと、汗で湿っていく肌が……互いに吸い付くように感じて、これもまた心地いい。

時折、どちらが、あるいはどちらからともなく、首元や頬、唇に吸い付いたりして……手と手を、足と足を、指と指と絡めたりして……密着した体と体がこすれて、むにゅ、とか、たぶ、とかいう感覚が伝わってきて……それがすでに気持ちいい。

性的な快感とも、似てるけど違う。もつとこう……本能的？な部分で……愛しい人とふれあっているっていうこと自体が、喜びになる……そんな感じ。

……僕、ロマンチストでもなんでもないはずなんだけど……これ以外に表現、見つからないんだよね。だから仕方ない。

「何だか、もう何回もこうしてるはずなのに、慣れないです……やっぱり、恥ずかしい」

僕の下で、顔を赤らめながら、そうつぶやくイゼッタ。

その両腕は、僕の背中……肩甲骨のあたりに伸ばされ、回されていて……さするよう  
に動いて、触れたところに、彼女の吸い付くような柔肌の感触がある。

ぎゅつと力を入れて抱きしめられれば……僕の胸板が、イゼッタの乳房に押し付けら  
れて……柔らかさの中に、きれいなピンク色の先端の硬い感触が。さらにその状態で、  
足を絡めてぎゅつと……体全体でくっついてくる。なるべく触れる面積を多くするか  
のように。

直接感じる、彼女の体温が、肌のしつとり柔らかい感触が……ピアンカとはまた違っ  
た角度で、僕の心から余裕というものをガリガリと削り取っていく。

いやむしろ……溶かしていく、といった感じかもしれない。

彼女に触れるたび、触れられるたびに……なんていうか、初めて肌を重ねた時から変  
わらずそうなんだけど……どンドン、引き込まれるというか、彼女という存在に溺れて  
いくというか……そういう、なんとも言えない感触がある。

そしてそれをさらに助長するのが……性格に裏表のない彼女の口から紡がれる、耳に  
優しくとろけるような……素直な言葉だったりする。

ぎゅつと、体全体で僕にくっついて抱き着きながら、僕の肩に顎を乗せる感じにして、  
「……本当に、何度やっても……恥ずかしい。けど……とつても素敵で、幸せな気分

……」

「……いつも思うんだけど……イゼツタって、こういうの好きだよね。」

健全な意味でのスキンシップというか、ふれあいというか……いや、ベッドの上で全裸同士で抱き合ってる時点で『健全』も何もないかもだけど……

何ていうか、性的なところが絡まない、純粹に『愛』からなる交流というか……そういうのを、イゼツタはすごく好いてるように見える。

「今まで、私……誰かに愛されることが、こんなに心地いいなんて……知らなかった。ずっと、ひと所にとどまらず、旅して生きてきて……お母さんも早くに亡くなって、おばあちゃんと2人で……もちろん、おばあちゃんも私のことを大事にしてくれたけど……」

語りだしたイゼツタは……そこで、一度切って、

「こんな風な気持ち、今まで……あなたに出会うまで、知らなかった。あの時、あなたに出会わなければ……多分、一生、知らないままだったと思います」

一旦、僕の背中に回していた腕をほどいて、顔を真正面から見据えるように。

絵にかいたような、幸せそうな微笑みを浮かべ……行為の最中であるがゆえに、しつとりと汗の滲んだ顔で……イゼツタは、僕と目を合わせて、また無防備になっこり笑う。

「……私、正直……姫様の……フィーネのために、エイルシュタットのために戦うこと



に、何の迷いもなかったんです。あの日……フイーネに助けられたあの時から、彼女のために何でもしよう、それこそ……私の命で、フイーネの望みがかなうなら、命だつてさし出せるつて。でも……」

そこで、ちよつとだけ笑みが陰る。

「……今、同じことを聞かれたら……正直、そうは答えられない。もちろん、今でもフイーネは大事です。彼女のために、力を尽くしたい、つて、今でも思つてます……でも……なんていうんだろう、私も……ちよつと、欲張りになつちやつたんです」

欲張り、つて？

「私が戦つて、敵を倒して……それで、姫様やエイルシユタツトの人たちが幸せになつてくれるのを見てきました。だから、私の力で人を幸せにするとしたら……こういうことなんだ、つて思つてた……そのほかに、違った形があるなんて、思わなかったんです」

「あなたに出会つて……あなたとこうして、愛し合う関係になつて……私が私でいることで、誰かが幸せになるなんてことがあるんだつて……初めて知つたんです。バカですよ、私……他でもない私が、姫様が笑つていることで幸せになつたのに……それでも、まさか私のために幸せになつてくれる人がいるなんてこと、思いもしなかった……あなたに、そう言ってもらえるまでは」

「それを知つて、私……すごく、うれしくて……私自身も、それまでより何倍も幸せな感

じになって……それで、思ったんです。こんな素敵なこと……何で私は、今まで知らなかったんだろう、って。なんて、もつたいない人生を歩んできたんだろう、って」

「もつと、知りたい。こんな風に、誰かと一緒に幸せになるってことを……いや、きつと私が知らないだけで、もつと他にも幸せの形があるんだって思っ……それを、知りた  
いと思っただんです。そして、幸せになりたい。今よりも、もつともつと……色んな幸  
せが欲しい」

「どんな形のそれがあるのか……全然、見当もつかないですけど……。できるなら、私、皆と一緒に幸せになりたいんです。私が皆を幸せにしてあげるんじや……足りない。皆に私が幸せにしてみらうのも……違う。……皆で、一緒にです」

「あなたともそうだし……姫様や、ビアンカさん、ロツテちゃん、エルヴィラさん、ジークさん、ベルクマンさん、それに……ゾフィーさん。私、皆と一緒に幸せになりたい」  
「戦争で、敵とはいえ、人をいっぱい殺してしまった私は……きつと、幸せに何かなれないんだ、って……あの牢屋の中でひどい目にあつた時は、そう思つてました。それでいいんだと、仕方がないんだ、とも思つてました」

「でも……あなたに愛してもらつて……こんな、こんな幸せなことを知つちやつたら……私、もう戻れない。あの頃に戻りたくない……それどころか、もつと欲しいって、もつと、もつと……そう、思つちやうんです。寝ても、覚めても……」

「求めて、求められて……愛して、愛されて……与えて、与えられて……捧げて、ささげられて。人とつながって、笑いあつて……そんな、1日1日の、一時の、ほんの一瞬のふれあいから生まれる幸せを……私、もう失いたくない……もつと、もつと……ずっと、ずっと……！ 今日よりも明日、明日よりも明後日……幸せに、なりたい！ だから……」

「……私と一緒に……幸せになつてください。これからも、ずっと……そばにいて……」

……ああ、だめだ。

本当に、この娘つてば……僕にはもつたないくらいにいい娘だ。

けど、だからこそ……あらためて思う。もう、絶対この子を放すもんか、と。

もともと、約束してたことだ。フィーネの作る、皆が明日を選べる世界。

そこで、明日を選べる皆が幸せになるなら……その立役者である、イゼッタが幸せにならなくてどうする。イゼッタを、幸せにしてあげられなくてどうする。

「あなたの、左目を奪つて……お義父様を奪つて……お義母様を悲しませて……最初から最後まで、迷惑をかけっぱなしで、お世話になりっぱなしな私を……こんな、どうしようもない私を……私と……どうか、幸せになつてください。フィーネが、いえ、フィー

ネと一緒に作る、皆が明日を選べる、素晴らしい世界を……どうか、こんな私と一緒に生きて、ください」

とろんとした目で……しかし、どこか不安を声音に滲ませたイゼツタの、そんな言葉を、僕は黙って聞いていて……気が付けば、抱きしめていた。

……言われなくたって、放すもんか。

意地でも、幸せになってやる。幸せにしてやる……君も、君の周りの皆も。

……もちろん……君のお腹の中にいるかもしれない、あるいはこれから宿る……小さな命も。

……けれども、今は……ひとまず、僕らがいるのは、ベッドの上だ。

この期に及んで、どうしても……優しくて人がいいからこそ、消えることなくイゼツタの中にある、罪の意識とか、そういう後ろ暗い感情……

今日、今くらいは……忘れてもいいだろうさ。

忘れさせてあげる。そして……代わりに、君の好きな『幸せ』で満たしてあげる。まずは今日、ここで……男と女の、夫と妻の幸せから……ね。

抱きしめていた体を放し、再びイゼツタを、ふかふかのベッドに押し倒して、その上から覆いかぶさる形になって……うっとりした表情になったイゼツタと、もう一度唇を重ねた。

## 12—2 後日談 イゼツタ (後編)

引き続き、E月T日

いつものことではあるけれども……イゼツタとのキスは、ただのキスで済んだためしがない。

ただ、唇を触れ合わせただけでも、脳の奥や体の芯がびりびりしびれる感じを、毎度味わっている……これが、ベッドの中となると、他にもいろいろとしびれる部分があつたり。

そこから、舌を入れたり唾液を吸いあつたりするうちに……どんどん互いに体が出来上がっていく。恥ずかしさで抑え込まれ、理性で隠された本能が引つ張り出される感じ。

……やっぱ彼女、傾国の美女、だと思う。

抱くこと数百回。いまだに彼女の前で平静を保つすべがない僕は……ないとは思うけど、イゼツタにそそのかされたら、かなり強引なところまで言いなりになってしまいたい。

さつき彼女は、『幸せになりたい』『今の幸せな時間を、手放したくない』って言うたけども……僕の方こそ、彼女とともにある、というこの時間を手放すのなんて、無理だ。

それどころか……すでに手に入れてるにも関わらず、彼女のことを『欲しい』『もつと欲しい』という欲望が出てくる始末……。

イゼツタのせいにするみたいな言い方になるが……ホントに彼女は、男を狂わせる。真面目さが、誠実さが、健気さが、儂さが……時折見える心の強さや、逆の弱弱しさに至るまで……僕の心をとらえて離さない。

「……………ふ、はあ……………」

離れる唇と唇。お互いの口の中から抜き取られる舌、その間に糸を引いて、名残惜しそうに僕は顔を放す。

彼女の大きな目の、うるんだ瞳に見つめられ……少し荒くなっている息遣いが耳に届く。

今、離れたばかりの唇を、また合わせたい衝動に駆られるも……そういえばもう4度目だな、と思い出して、踏みとどまる。……たしかに甘美なひと時だけでも、いつまでもコレだけというわけにもいかない。彼女なら……受け入れてくれるかもだけど。

けど、僕は今……彼女を抱くためにここにいるのであるからして……と、思っていた

ら、今度は彼女の方から、僕の体を下に抱き寄せてきた。

そのまま、ぎゅつ、と抱き着いてきたイゼツタは……

「……………はむ、んゆ……………」

ぱくつ、と……………僕の耳を、そのやわらかい唇でつえばむようにくわえ……………そのままにゆもにゆと。口の中で愛でて、唾液まみれにしたと思つたら……………おもむろに口を放した。

そして今度は、僕の首筋に吸い付いて……………ちゅうううう……………と。

「……………ぷは」

はつきりと引つ張られる感じがするくらいに吸つて……………放す。

たぶん、少ししたら……………僕の首元には、見事なキスマークができていることだろう。

その感覚にすら、じんわりと温かみを感じている僕に構わず……………イゼツタは、次いで肩口、胸元と……………いくつも追加のキスマークを付けていく。

「……………ぷふう……………ふふつ、なんだか……………名前書いてるみたい。私のだー、って、皆にわかるように……………ちよつと楽しいかもです」

そう、今度は無邪気な笑みを見せたかと思うと……………今度は頬に、同じようにされた。

それにドキツとさせられた僕は、負けじとイゼツタの首元に吸い付いてマークをつけてあげた後……………今日、やろうかどうか迷っていた……………ちよつと稚拙だけど、魅力的な『い

たずら』を、実行に移すことを決めた。

『ひゃ……ん♪』と、首元の感触にびくびくしているイゼツタを押さえつけたまま……僕は、口を首元から下の方に……彼女の豊かな双丘にもつていつて、そのまま吸い付いた。付け根に、中腹に、先端に……時に加えて、こりっ、と軽く歯を立てたりして。

「あ、ん……っ！　もお……おっぱい、好きなんだからあ……」

困った子を甘やかすように、イゼツタは僕の頭を優しく抱きしめて、自分の胸に溺れさすように押し付けて……その温かくて柔らかい感触に、脳がとろけそうな心地よさを僕は感じていた。

そのまましばらく、夢見心地でイゼツタの母性に包まれていた僕は……位置取りの関係から、僕のお腹のあたりにあたっている、彼女の恥部が……しつとりを通り越して、水気を感じるくらいになりつつあるのに気づいた。

見れば、自分でもわかるのか、顔が赤く……恥ずかしいのか、目を反らしている。

それでも、時々、一瞬だけこっちに向けられて……それが見えているものは、僕の顔だったり……自分が今しがたつけたキスマークだったり、すでに大きくなっているペニスだったりした。

……3番目が、彼女の今の望みというか、期待を如実に露骨に物語っている。

内股でもじもじした態度にまでなってるあたり……実に雄弁である。



赤く染まり、上気した彼女の顔を見ながら……僕は、『期待に応えてあげる』とでも言うように、彼女の両足をつかんで横に開き……その間にある、とろとろに濡れている縦筋がよく見えるような形にした。

いざ目を向けられると、それはそれで恥ずかしいのか、『あつ……』と声を漏らすイゼッタだけど……ここでもちよつと、さつき言つたいたずらを。

ベッドに備え付けている小さな戸棚に手を伸ばし、中から用意しておいた薬を取り出して……イゼッタの膣内にぴとつと塗る。

『?』って感じの顔になつているイゼッタに構わず、鍊金術を発動。一瞬で終わった。

膣内で、施術する時におなじみのあつかい感じと……その後には何かが変わつたような違和感を覚えたらしいイゼッタだが、その直後、僕が肉棒の切っ先をその入り口につぶつ……と沈ませたあたりで、また、期待に目をとろんとさせた。

……が、その表情は……僕がもう少しそれを膣内に侵入させたあたりで……困惑に変わる。

僕の肉棒が……膣内の『何か』に引つかかつて、止まった。

「……えっ? こ、これ……な、何で……?」

それは……イゼッタからしてみれば、とつくの昔に失つたはずのもの。

女として、とても大切な……しかし、無残にも散らされ、一生戻つてこない……そう、

思っていたものだった。

そういうこと……僕がさつき、錬金術でやったのは、コレ……処女膜の再生である。

さかのぼること、もう実に一年以上も前。尋問と称したレイプによつて、無残に散らされてしまったイゼツタの処女。もちろん、そんなこと気にせず、僕はイゼツタを今まで愛してきたわけだけど……この間、ふと思つたというか、欲が出てしまったのだ。

イゼツタの全部が欲しい……それこそ、失つてしまつたはずの『コレ』も含めて。

そう思つて……所詮は再生させた、疑似的なものではあるもの……僕はこうして、今日、彼女の『初めて』を奪おうと決めていたのである。

それを知つたイゼツタは……最初は困惑していたようだけど、次第にその顔を泣き笑いに変えて……同時に、切っ先がちよつとだけ入つている膣内が、ぎゅつと引き締まつて、熱くなつて。トロトロに濡れ始めた。

それだけでも気持ちいいし……ともすれば、男側の自己満足ともとられそうなこの茶番、こんな風に喜んでくれるイゼツタがもうどうしようもなく愛おしくて……このまま一気に、と思つたところで……ふいにイゼツタから、『それなら』と声がかかった。

「……今まで、その……どこか、まだあなたに対して、罪の意識があつて……でも、いつか……と思つてたことがあつたんです。あなたが、私の全部を欲しがってくれるなら……求めてくれるなら……私も、あなたの全部を欲しがってもいいですか？」

欲しがる……っていうと？

酷い言い方だけど……男の場合は、その……女の子と違って、何か明確なものがあるわけじゃないから、仮に『童貞が欲しい』とか言われたら、うれしいけど困るというか……

「ううん、そうじゃなくて……」

そう言つてイゼッタは、僕の首に腕を回して抱き寄せ……その拍子に、処女膜に切つ先が押し付けられて軋み、もうちよつとで破れそうになる。

イゼッタは構わず、もう少し前に出るだけでキスできそうなくらいに、顔を近づけて……

「来て……私の全部、もらつて……『ソロ』」

そこから先は……毎度のことながら、滅茶苦茶やった。

『ぶつつ』という、薄いけど確かにある膜が引きちぎれる音を聞きながら……快感と同時に、破瓜の痛みに耐えるイゼッタの一番奥に肉棒を押し込んで……その瞬間達してしまつた。三擦り半どころじゃなく、つながつただけで。初めてだこんなの。

ただ、それを疑問に感じないくらいに、頭は沸騰気味だし、体は本能で動いてるし、陰

囊の中身の精子たちは彼女の中に出たがるして……

イゼツタも……二度目だからだろうか、徐々に痛みも薄れ、精液を飲み込む膣内をひくひくさせながら……もつと欲しい、とでも言うように腰を小さく動かし始め、

それに応えるように……そこからは、僕も獣に……いや、違うな。覚えてたの童貞みたいな感じに、征服欲と多幸感で頭がいっぱいになった状態で、滅茶苦茶やった。

耳元で……『ソロ、ソロおつ！』と……何度も僕を呼ぶ、イゼツタの声を聴きながら。僕を『ソロ』と呼ぶのは……家族だけ。今となつては、母さんだけだ。

もうちよつと昔は、古参の使用人あたりも『ソロ坊ちやま』って呼んでたりしたんだけど……今では『ソロモン様』ないし『旦那様』だ。

軍や研究所での部下や上司は、一様に苗字か階級呼びだし……士官学校では飛び級しすぎてほとんど同年代の友達がいなかったので、せいぜいいても名前呼び。

だから、結果的にだけ……僕にとつて、『ソロ』と呼ばれるのは……そして、僕がそれを許すのは……僕が家族と認めた人だけ、みたいな認識を、僕もイゼツタも持っていた。

イゼツタは今まで、僕のことを『サンジェルマンさん』と呼んでいた。

それが……望んで、名前呼びをすつとばして『ソロ』と呼んでくれた。

なんていうか……たったそれだけのことなのに、すごくうれしくて。

まるで、本気で彼女が僕の家族になろうとして……いや、なつてくれたみたいに感じた。

さつきまでの会話から見れば……彼女からすれば、罪の意識から、僕や僕の家族、僕の家とこれ以上近づくと、親しくなることがためらわれるような感じだつたらうにも関わらず……自分からそれを振り切つて、僕の家族になつてくれた。

すぐく、幸せな気持ちの中で……僕らは、底なしに求め合つた。

奥まで挿しこんで、抱き合つて、腰を振つて……ただひたすらにそれだけ。

本当に初めて同士のセックスみたいなのに、テクニクとか、言葉責めとか、そういうの全然考えず……余裕もなく、思う存分にお互いの体をむさぼつていた。

僕のをやわらかく包んでくれる、イゼッタの肉壁の熱くて柔らかい感触に酔いながら、こつん、こつん……と、何度も何度も彼女の子宮口を突き上げて。そのたびに、イゼッタの膣がきゆうきゆう締め付けてきて……体が僕の腕の中で、びくつと震えて、かわいい声が上がつて。

頭も体も、そのたびにどんどん熱くなって、余裕なくなつて。

ひたすら腰を振つて、イゼッタの体を味わつて、

達すれば吐き出して、それでも腰は止めないで、

もうすでに、最初の方に射精した分の精液は、収まりきらなくて続々と子宮からあふ

れ出し、逆流して、ぼとぼとベッドに零れ落ちている。

それでも、止まらない。どんどん吐き出して、どんどんあふれさせる。

結合部はもちろん、それが伝って流れ落ちているイゼツタの太ももやお尻は、もうべとべと。その下のシーツも、大きなシミができています。

イゼツタの方も、もうほとんど本能と衝動だけで……何度も受け止めている僕の肉棒を、今日初めて性に目覚めたみたいに食欲に……加えこんで離さず、そのまま滅茶苦茶に乱れた。

腕を、足を回して離れられないようにしがみついで……ただの一度も放さなかった。突くたび、射精するたびにどんどん強くしがみついで……。

している間中、何度も『ソロ……ソロ……』『あぁっ、もつとお！ もつと来てえ！ ソロお！』って……名前を呼んで。よがって……喘いで……。

何回か、背中や肩口にチクつとした痛みが走ったこともある。

多分だけ……快樂を抑えきれなくて、がむしやらに動いて……ひつかかれたり、噛みつかれた、つてところじゃないだろうか。

……後で気にしそうだから、治しといたほうがいいかもだけど……個人的に、何とうか……せつかくだしそのまま残しておきたい気もするから困る。

そう珍しくもないことだけど……限界まで盛って、やって……気が付いたら朝だった。

ほとんど同時に目を覚ました僕らは、しばらくしてから周囲を見渡して……苦笑した。

なんかもう……ベッドの上が、ホントに獣の交尾のあとみたいな惨状だったもんだから。

シーツも、布団もしわくちやの上に、僕ら2人が出したいろんなものでぐちゃぐちゃだ。

これ、メイドに洗わせるの、ちよつとためらうな……なんかもう、汚れてるとか濡れてるってレベルじゃないし。浸ってるってレベルだもん、いろんな液体で。

ほとんど僕の精液と、イゼッタの愛液……あと、2人の汗と……途中で失禁したイゼッタのおしっこと、それから……小さな赤いシミになってる、破瓜の血。よだれとか涙もかな。

あとで錬金術で汚れ分解しとくか、とか思いつつ……2人とも同時にあることに気づいて……そのまま、また苦笑。今度は、顔を赤くして。

そして、これだけ出して、この期に及んで、たくましくもイゼッタの中で朝勃ちしてしまった僕の肉棒を……同時に、じゅんつと濡れだしたイゼッタの肉壺を満足させるた

めに、そのぐちゃぐちゃの布団の上で、けっこうな性臭に包まれながら……何回も。

その後、一緒に風呂呂に入って……そこでもやってしまった。何回も。

なんかもう、お互いに、お互いの裸を見るだけで我慢できなくなるんだもん……発情期の獣でももうちよつと慎みあるんじゃないのか。大丈夫か、僕ら。

ともあれ、どうにかこうにか汚れを全部落として、ようやく遅めの朝食をとれるようになったところで……食堂に向かうまでの廊下、僕らは、腕を組んで歩いてただけども。

「……えつと……不束者ですか……だったっけ？」

上目づかいで、ちよつと照れくさそうにしつつ……歩きながら、そう声をかけてくる。「それだけじゃなくて……色々まだまだで、頭も残念で、仕事は忙しくて……その上、心も体もえつちでどうしようもない妻だけ………これから、よろしくね。ソロ」

敬語もやめて、親し気にそう言ってくるイゼツタの晴れやかな笑顔は………これから彼女と生きていく、何十年もの時間が、きつと幸福に満ちたものになるだろうな……と、予感させるものだった。



## 13—1 後日談 フィーネ（前編）

F月N日

……どうしてこうなった。

目が覚めて、初めに思ったことがそれだった。

目が覚めると……裸で、ベッドに寝ていた。

まあ、それ自体は珍しくもない。イゼツタやビアンカ、もしくはその両方と朝ちゅんで目を覚ますなんてのは……よくあることだ。

数か月前になるが、僕は、2人と結婚した。公式発表はもちろん、式も、届け出も、引越しも済んでる。正妻がイゼツタで、ビアンカが側室つて感じ。

となれば、ベッドの上で毎晩愛を育んだとしても、何もおかしくない。問題はない。朝ちゅんしてしまったところで、何の問題もない。むしろ、その後朝からやることすらある。

……問題は、というか……いつもと違うのは、今はまだ暗く、朝ではないこと。

そしてもう一つ……僕の隣にいるのが……イゼツタでもビアンカでもないということだ。

さらさらの金髪に、整っていてかわいらしい顔、紫色の瞳、絹のように滑らかな肌……そして、ぺったんk……もとい、スレンダーで凹凸のない体。

「……ほ、本当に、すまない……こ、このような不義、どう詫びればいいのか……！」

この国……エイルシュタット公国の国家元首。

オルトフィーネ大公殿下が、同じく裸で、僕の横で小さくなっている。

そして、そんな僕らを……徐々にお腹が大きくなり始めている状態の、イゼツタとビアンカが、困ったような表情で見ている……その後ろで、ロツテちゃんがあわあわしつっ立っている。

さつき、僕が結婚した話をしたけど……実は同時に、大公殿下も結婚している。

国内の有力者から、婿を取って。

エイルシュタットという国の……ひいては、その頂点であるフィーネ大公の価値は、ここ数年から数年でうなぎ上りどころじゃないことになっている。戦争が終わって、世界情勢がある程度落ち着いてからは……ひっきりなしに政略結婚の申し出が来ていた。

それをかわすために、さつきと手を打ったわけだ。

魔法関連学問の発展によって身についた発言力のおかげで、文句が出ることもなかった。

た。いやまあ、悔しそうな声はあちこちから上がってきたけど。

なお、大公殿下が結婚した相手は、野心もなく、実家も含めて身の上も清廉潔白な……よく言えば安心できる、悪く言えば都合のいい相手だったりする。名前は……何だっけ、忘れた。

結婚の後は、無事に初夜も迎え……国政運営を隣で支えてくれているようだ。

……ただし、その婚姻……1つ問題があった。

それは、相手の男に……将来を約束した相手がいたことだ。

それも……親が決めた相手とかじゃなく、恋愛中の。

しかし、フィーネ大公の夫に選ばれたとなれば、それに逆らうわけにもいかない……が、一国の王族であれば、妾・愛人を持つくらいは普通にする。僕も、その扱いでピアンカ娶ったし。

その恋人さんが、フィーネの旦那さんの『愛人』に収まったそうなのだ。ゆくゆくは、第2婦人みたいな感じで娶ることになる、と。

旦那さん、公務とかでは一生懸命にフィーネに、ひいては国に尽くしてくれているそうだし、その忠義に一点の曇りもないそうだけど……その愛だけは、前からの仲のその人に注がれている。

フィーネも、元々政略結婚だし、さすがにそこまで束縛する気はないと言って、困っ

ているその人と仲睦まじく——ただし、あくまで公には自分の夫という立場を考えろ、  
と言いついて——2人で愛し合うことを認めている。

なんなら、彼女との間に生まれた子に……王権はさすがに渡せないが、実家の方の家  
督なら継がせても構わない、とまで言つてあげたらしい。

しかし、その結果何が起こつたかと言えば……当然のごとく、夫婦間のセックスレス  
だった。

本当に愛し合っているのが、旦那さんとその愛人さんなので、夜はほとんど毎晩そつ  
ちにかかり切りで……フィーネとは、結婚後に数日、数回だけ。

その数回で種が付くこともなく、しかし『そつちを愛してもいい』と言つた手前、自  
分を抱くように言うのも気が引けるし……そもそもその人、けつこう堅物というか真面  
目らしく、

『夫婦として大公殿下を政治的に支えることには何の異論もございません。しかし、真  
に愛することができないにもかかわらず、あなたの体に出すなど……失礼は重々承  
知であります、不義理であると愚考いたします。何卒姫様も、御身をゆだねるに足る  
方をお見つけくださいますよう』

てな感じで、フィーネに手を出しづらいそうで……まあ、本心から彼女を大事に思つ  
てるのはわかるんだけど、結果的に夜の生活がもう何ヶ月もない状態だそう。

……そして最近、イゼツタとピアンカが……每晚抱いてた当然の結果として、妊娠した。

結果、母体に負担がかかるような激しい運動が禁止に。

もちろん、性の営みもだ。

イゼツタは、ちよつと残念そうにしつつも、子供ができた喜びの方が勝っていたらしく、普通に受け入れていたけども……ピアンカが軽く絶望してたっけな。子供はうれしいけど、夜の生活が何ヶ月も禁止とか……絶対耐えられない何とかして、つて泣きつかれた。

かといって、こればかりは薬品とかでどうにかするわけにもいかない。下手なことして、お腹の子に何かあったら目もあてらんないし。

どうにか、イゼツタ共々、愛撫とかフェラからの飲精で性欲をこまめに処理すること  
で我慢してもらい……まあ、そのおかげで僕の方も、禁欲生活にも耐えれてるんだけど。  
なんか、2人を娶ってからというもの……というか、それ以前だな。2人を抱いてか  
ら、娼婦とか手配する気にならなくなってるんだよね、全然。なので、妊娠中も2人に  
処理してもらえるのはありがたい。手とか、口で。

……ボテ腹妊婦ゆえの魅力つてもものも感じることだし。母乳も出るようになったし。

さて、ここで話を戻す。

昨日のことだ。イゼツタ、ピアンカ、そしてフィーネと、それぞれ理由は違えどセツクスレスになつてゐる3人が集まつて……愚痴を言い合つたりお酒飲んだりする（ただしフィーネのみ）……女子会みたいなのが開催された。

そこで色々話して楽しんで、多少なり皆ストレス解消になつたらしいんだけど……問題はその後。

時間的に遅くなつたので……というか、元々そのつもりで準備してたらしく、用意した部屋にフィーネは泊まつていくことになつた。そして、風呂に入つてから寝よう、ということになつたのだが……寝る前にトイレに行ったフィーネは、酔つぱらつていたこともあつて、道を間違えた。

で、ここにたどり着いたかという……僕の部屋である。

そしてそこでは……タイミング悪く、ピアンカが僕のを啜えて奉仕してるところだつた。

なんか……ストレス発散にはなつたものの、その最中の猥談で我慢できなくなつたつて。

突然視界に飛び込んできた淫靡な光景。

しかもだ、ピアンカつてほら……いつもの凜々しい姿からは想像もつかないくらい

に、ベッドの上だと乱れるからさ。本番こそしないとはいえ、淫語を次々発しながら、男のアレを美味しそうにしやぶるその姿は、フィーネには余程衝撃的だったようだ。

しかも、まだフィーネは酒が抜けきっておらず、その影響で頭がめっちゃ混乱状態に。そしてこの後、その回ってない頭で問題行動に出る。

そのまま最後まで僕とビアンカの淫行を見届けた後……僕が寝静まったのを見計らって部屋に不法侵入。ベッドで眠る僕の元に忍び寄り……布団をはいで、ズボンを下ろして、その刺激でちよつと大きくなった僕のアレを、さっきのビアンカの様子を思い出しながらその口で……

……この時僕は、少ない時間で効果的に疲れを取れるよう、栄養剤兼睡眠導入剤を飲んでたことで……それに気づけず、随分と起きるのが遅れてしまったのもまずかった。

で……股間に妙な違和感——というか、強烈な快感を覚えて目を覚ますと……そこに……はなんと、勃起状態の僕の肉棒を、奥までその膣でくわえこんでいる大公殿下が。

ここ2か月ほど全くご無沙汰だった快感が……しかも、ビアンカともイゼツタとも違う感触が、急激に僕の意識を覚醒させ……しかし、そのせいで同時に快感もどつと押し寄せた結果……僕の目の前で、姫様の膣内にどばつと精液が注ぎ込まれた。

赤い顔で……心底気持ちよさそうに、びくつ、びくつ、と体を震わせながらその奔流を受け止めた姫様は……そのまま僕の胸板の上に倒れこんできて、すうすうと寝息を立

て始めてしまった。

その直後……あまりの事態に呆然としていた僕だったが、再び薬が効果を發揮し始めて眠くなってきたことで……『きつと夢だな』と一人納得してそのまま寝た。

で、今さつき……フィーネが部屋にいないことに気づいたロツテちゃん、『行方不明事件発生!』と考えて、どうしていいかわからなくなり、僕に判断を仰ぐためにここにきて……まさかの不倫セックス事後でくつと寝ている僕ら2人を発見。

もつとどうしていいかわからなくなり、イゼツタとビアンカを起こして連れてきた。

「じゃ、じゃあ姫様、つまり、あの後……酔っぱらっちゃって部屋を間違えてここにきて……ビアンカさんが、ソロにお口で奉仕してるところを見て……」

「自分でも抑えが効かなくなり、寝ている彼の陰茎に色々といたずらして、口で射精させて一発飲み干した挙句、そのまま挿入して膣内射精を……と……?」

「ほ、本当に……すまん……わ、私はっ、た、立場ある身で、しかも夫がいながら……そなた達という妻がいる彼を相手に、大変なことを……あ、あまつさえ、この身に精を……!」

酔いがさめ、次第に自分のしたことを認識し始めたフィーネが……がくがくと身を震わせ、顔を蒼白にしながら、必死で僕らに謝っていた。



さつきなんか、危うく全裸土下座に移行する勢いで……相当パニックってるな。

けど、こつちだつてぐーすかのんきに寝てて気づけなかつたし、勝手に夢だつて納得してたし……いや、色々と大問題なのはわかるけど、そこまで姫様を責める気はない。少なくとも、僕個人は。

さらに言えば、イゼツタもビアンカも別に怒つてはいない。

そりゃ、全く気にしてないわけじゃないし、思うところは多少あるようだけど……酔っぱらつての行動だし、別に危害を加えられたわけでもないし……2人とも、フィーネ大好きなので。

セックスストレスだつていう事情も、すでに女子会で聞いていたし……しかもその席で何と、『だつたらうちのソロ、お貸ししましょうか？』なんて、冗談であれ言つてたらしい。イゼツタが。

まあ、そりゃ……ホントにそんなことになるなんて思つてなかつただろうけどさ。

とりあえず、その場は解散して……各部屋に戻つて寝ることに。

僕は当然この部屋でこのまま寝ただけ……ベッドにフィーネの残り香が感じられて、ちよつと落ち着かない夜になった。薬で無理やり寝た。

で、翌日。

朝食の時からして、僕たちの顔をまともに見れないばかりか、ビアンカと僕の顔を見るとかあつと顔を赤くするなど、挙動不審極まりないフィーネ。

このままにしとけないので、とりあえず当事者4人……と、目撃者であるロッテちゃんも一応一緒に、きちんと話すことになった。

その結果決まったのは……えつと、いいのかコレ？

まず、今回の不倫セックス——しかも同意なしの睡姦——については……姫様には何も責任とかは問わない。これは、僕も含めた全員で満場一致。

けど、もう1つの決定事項……今後も、僕とフィーネの、率直に言つて『不倫』の関係を、イゼツタ、ビアンカ公認のものとして容認する、とは……。

いや、その……僕としても、何かしら責任とれつていうなら、できる限りでさせてもらうつもりだったけど……いや、そもそもコレ責任どうこうの話でもない……か？

聞けば、もともとイゼツタもビアンカも……自分はもちろん、僕の相手をする人がいなくて、僕に我慢を強いていた現状をどうかと思つていたようで……その点、2人とも、フィーネなら相手としては信頼できるし文句ない、と。

……いいのかそれで、相手、いくら信頼できるつても……一国の国家元首だぞ。

そして、フィーネの方も……え、何、旦那さんより大きかつたつて……ああ、さいですか。

で、気持ちよかったと。けど、旦那さんは愛人にお熱だから、期待できないし……か  
といて自分が愛人を作るのも無理。そもそも信頼できる男の相手といえば、僕くらい  
……？

……そもそも、あんな気持ちいいもんだって知ったらもう戻れないし、イゼツタとビ  
アンカがこんな風にメロメロになるなんて、僕が起きたまま相手をしてくれたらどうな  
るのか興味ある？

避妊さえきちんとすれば何も問題ないからって？

……なんか、国家中枢の重要人物間の会話とは思えないくらいにただれた感じだな  
……。

ま、まあ……それでいいなら、その……僕に異はないけども。おとがめなしってこと  
で。

……え、何、フィーネ？ 耳かせて？

……今夜、早速また？

## 13—2 後日談　　ファイネ（後編）※ファイネ視点

F月M日　ファイネ視点

随分と、この生活にも慣れたものだ、と思っていた。

戦争が終わり、わが祖国エイルシユタツトに平和が戻り、戦後復興に力を注いで……この世界に現れた新たな可能性たる『魔法』の先進研究国家として、祖国は国際社会でその地位を確かなものとした。

今なお、欧州の、いや人類の輝かしい未来を形作るための、いくつもの研究成果が発見され続け、報告されてくる。まさに日進月歩……すさまじい勢いだ。

『魔法工学』と『錬金学』の時代をけん引する国家……その頂点に立つものとして、私に求められるものは多く、そして大きい。

それでも……戦時中に比べれば、うれしい悲鳴と忙しさだ。仕事の向こうに待っているのが希望であるとはつきりわかるなら、そしてこれらの成果をもたらしてくれているのが、私の盟友たちであるのだから……これを苦に思ったことはない。

……ない、のだが。

その……何というか、彼らは充実しているな……と、ちよつとうらやましくなることは、ある。

……リア充、というんだったか、ああいうの？

我が友、イゼツタは……戦後、魔法関連学問の権威——というか、魔法を使える一番の当事者——として社会的な立場を手に入れた。そして、戦後も社会貢献という意味で数々の功績を打ち立て……とうとうこの間、戦時中から想い合っていた、帝国の『錬金術師』、ソロモン・フォン・サンジエルマンと結ばれ、夫婦となり……今は、身重となつて静養している。

加えて、その御仁には……私の近衛隊長だった、ピアンカもまた、側室として嫁いでいる。同様に、少なからず彼の事を想っていたそうで……彼からプロポーズされ、イゼツタからも認められ、退役して妻の一人になった。そして、彼女もまた……その身に新たな命を抱えている。

最早、形骸化して久しい、当時の貴族階級や高級官僚クラスのみに認められる重婚制度だが、今回大つぴらに復活させた。

エイルシユタツトに限らず、今、戦争で人口が減っていることもあり……欧州全体で、復員した軍人や関係者が続々と身を固めているし……来年以降、新たな命が生まれる気配がそこかしこにある。いわゆる、ベビーブームというやつだ。

それに加えて……政治的な思惑もある。

サンジェルマンは、ゲールにおける最大の重要人物と言つていい1人だ。現在その影響力は果てしなく大きく……下手を打てば、彼を中心に、ゲール国内に派閥、軍閥が出来上がってしまうのではないかと、国際社会が危惧するほどに。

そんな彼だが、今ではエイルシュタットに家庭を持ち、妻は2人。いずれもエイルシュタットの民であり……子供までできている。名実ともに、完全にエイルシュタットに生きる場所を移した……もつと露骨に言えば、取り込まれた形だ。

ゲールは、サンジェルマンという、その国における強力な牙を手放し、権威は強いとはいえ小国であり力はないエイルシュタットに送ることで、かつてのような野心はなく、その火種足りうる人物を持つこともしない……と、喧伝した形だ。

……実際のところ……結果的にそうなった部分もあるのだが。

そもそも、彼とイゼツタ達との間には、確かな恋慕の情があり……それに沿って結ばれた結果だ、というのは、彼らと親しい一部の者のみを知る真実である。

……まあ、それはいい。

そういうわけで……だ。今ではサンジェルマンは、イゼツタとピアンカの夫という立場なわけだが……その彼に、ひいては妻であり、私の友である2人に対して……先日私は、とんでもないことをしてしまった。

い、言い訳になるが……私はあの当時、酒で酔っていた。そのせいで、道を間違えて違う部屋に行き……ついでに、人としての道をも間違えてしまった。

扉の向こうに見えた……サンジェルマンと、ビアンカの、あ、あのような濃密な……。そのせいで変な気分になって……我慢できなくなつて。

わ、私とて、若く健康な一人の女であつて……そ、その、そういう欲求も、人並みにはある。

しかし、つい先日、夫となつた者との間に、そういった行為は久しくない。彼は、こちらの都合で、一時的にはいえ引き離してしまつた想い人との間に、愛を育んでいる。それを私は責める気にはなれず……そもそも、私も、自分を好んでいるわけでもない相手に、軽々しく体を許したいわけではないし……まあ、そんな感じで、最近はおつぱら『一人遊び』だけで、その……色々と溜まつていた。

……その結果が……あろうことか、サンジェルマンを……イゼツタとビアンカの夫を、寝込みを襲つて、あ、アレを私のあそこにあんな……

い、今考えても、何てことをしてしまつたのだ、私は……一歩間違えれば、大問題だつた……。

幸いにして、そのことを知る者達は口をつぐんでくれたし、これがきつかけでイゼツタ達との間に確執ができるようなこともなかつたが……問題はそこで終わらなかつた。

自らの夫と経験を済ませている私ではあるが……その……サンジェルマンのアレは、先に娶った彼の同じものと比べて、あ、あまりにも……違った。大きさも、快感も……部屋に戻ってから、結局一睡もできず……調子のいいことに、許されたとわかつたとたん、私の頭は、サンジェルマンのアレのことばかり考え始めて……

……気づけば、翌日の話し合いで、イゼツタとピアンカから……彼を、彼女たち公認の元、時々貸してもらおう約束を取り付けて……しかもその夜、早速彼を部屋に呼びつけてしまっていた。

わ、私はこんなにも、みだらな女だったのだろうか……若い燕を前に垂涎になり、許されたと見るや飛びついてしまうほどに……

い、いや、きっとコレは……一時的なものだ。

中途半端に色を知ってしまったところで、もっと、もっと、とがつつきたくなってしまうだけ……しかしほら、放っておいても体に良くないし仕事にも差し障るだろうし、そもそも私の夫として私公認で不倫してるわけだからちよつとくらい私も遊んだつてごによごによ……。

じ、実際、私の『夫』になっている彼も、私は私でいい人を見つかるよう言っていたし……ならば、うん、誰も損をしていないし、困っても悲しんでもいないのだ。何も問題は無い。



そんな風に、必死で自分を納得させていたところに……とうとう、ドアがノックされる音が聞こえてきた。き、来た……来てしまった、とうとう……。

お、落ち着け、あまりに取り乱しているとそのちの方が恥ずかしいし、相手も困るだろう。

……本気に、なるわけじゃない。これは、そう……単なる遊び。ちよつと過激なだけのスキンシップなのだ。再会を祝してのハグや、頬にするキスと同じような……うん。

だから、気軽に……って言ったらいゼツタ達に失礼だけど、あくまで、一時的なアレだから。1回がつつり、しつかりやれば、落ち着くだろうから……うん。だから、今日だけ……。

て、手早く済ませよう。さっさと招き入れて……服を脱いで……（ごによごによ）して……後始末やシャワー、別れて彼を部屋に返すところまで……うん、1時間もあれば十分だろうし。

あー、は、入ってくれ。

……私、甘かった。

1時間もあれば終わるとか、さっさと手早く済ませるとか、遊びだから本気にならない

いでとか、あくまで冷静にとか……何をできもしないことを言っていたんだろうな。  
……生娘と変わらん。

いや、経験済みであることを考えれば、それ以下だ。なんて無知だったのだ、私は。夫との初夜や、その後何度か閨を共にした時は……互いに適度に性器を触って撫でて、準備を整えたうえで……足りなければ、ローションを塗って潤滑油代わりに十分濡らした上で、挿入し、腰を振って……絶頂に至ったら精を放って終了、というものだったはず。

セックスとはそういうものだと思っていたし、王族にとつて求められるのは、それによつて子供ができること。それさえ成せば何も問題はないのだから……私の性知識も、そこまだった。

……サンジェルマンとの夜は、最初から違った。

一応、人妻ということで、口づけはなしにして……私の体を優しく愛撫するところから始めてくれたのだが……て、手つきが、すでに……。

優しくも、いやらしく……的確に私の気持ちいいところを探り当てて……

秘所だけでなく、お尻や、胸も……さらには、性感帯であるはずのない、わき腹や腋、首筋や足なんかも……ふ、触れられるだけでびりびりと……。錬金術は使っていないと言っていた。ということは、単に私の体が、彼の技術で感じさせられているということ

で……。

この時点で、もう余裕や冷静さなどというものは、私の頭からきれいに消し飛んでしまっていた……だけでなく、な、何度か、軽く達していた。ま、まだ挿れられてもいないのに……

気づけば、真夏の夜のように火照った私の体は、快感で全身へろへろに弛緩させられてしまっていて……力が入らない状態で、ベッドの上に優しく横たえられて。

朦朧とした意識の中で、彼から何か問いかけられて……生返事を返した、その数秒後……一気に意識を引き戻された。

股間から、強烈な快感と圧迫感。脳天まで電撃のごとく突き抜けたそれに、一瞬で私の頭は覚醒し……その原因を目の当たりにした。

私の、先程までびったり閉じていた膣口をこじ開けて……彼のペニスが突き刺さっていた。

トロトロに濡れた私の肉壺に、ゆっくりと、だが確実にめりこんでいくそれは……初夜をはるかに超える衝撃を私の体に刻み込んでいく。肉壁をかき分け、押し分け……奥へ奥へと進む。

き、気のせいではなければ、あの夜、寝ている彼を勝手に襲った時より、大きくて……

！

そして、私の夫のそれではついぞ届かなかった領域までそれは踏み込んで……こつん、と、子宮口をノックされたところで、私はまた達して……

……そこから先は、乱れる一方だった。

どうやら、私の肉壺は……彼から見てもかなりの名器、と言えるものだったそう。彼の方も、予想より余裕がなく……私が大丈夫そうだったので、少し激しくなってしまうたそう。

自分でも華奢だと思う、私の腰をつかみ……勢いよく、ぱんぱんと快音を鳴らして腰を打ち付け……肉棒を私の中で暴れまわらせる。

も、もつたいないことに、私はその間、乱れまくっていて意識が半分くらいしかなかったのだが……彼が動くたび、私を突くたびに、雷に打たれたような快感が何度も襲ってきて……。

何か、色々と叫んだ気がする。快感のあまり……おそらくは、意味など伴っていないであろうことを、次々と。大声で。

しまいには……なんかもう、サンジェルマンの方もだんだんと遠慮がなくなってきた……勢いよく、獣のように……幾度となく私の中を乱れ突いて……。

多分だが、途中からは私ははされるがまだった。

快感のあまり暴れていたかもしれない。そんな気がする……が、それを抑え込んで、

サンジェルマンは腰を振っていた、と思う。

はたから見れば……私が組み伏せられて犯されているように見えたかもしれない。

股間を中心に、洪水のようにあふれ出た快感が、私の体の中全体を駆け巡って……しかし、やがて行き場がなくなつて飽和状態に。何度も、何度も達してしまつた。

しまいには、いきつぱなしになつてしまつた私の膣内に……熱い感触が……。しかも、どくどくと注ぎ込まれて……子宮の奥まで、お、重さを感じるくらいのを……。入りきらなくて、ちよつと逆流してきたし……。ど、どれだけ出したんだ!?

私の知識では、成人男性の1回の射精量は、せいぜいスプーン1杯分かそこからで、しかもそう何度も連続で射精できるような体の仕組みにはなっていないはずなのに……

たつた1回で、身も心も中身も限界まで満たされた私は、そのまま気絶するように眠つてしまつた……。……。のだが、

その夜は……それでは終わらなかつた。

何やら、くぐもつた声が横から聞こえて、目を覚ました——が、いかんせん体が倦怠感でいっぱい、目と首くらいしか動かない。

その状態で、私がどうにか横を見ると……

裸で横向きに寝ているイゼツタを、後ろから抱きかかえるようにしつつ、腰を振つて

いるサンジェルマン……という図がそこにあった。

え、ちよ……な、何して!? こ、ここ、私の部屋で、私のベッド……ふ、普通、女を抱いた後に他の女呼んで抱くか!? い、いやあの、一回で気絶してしまった私だから、えらそうなのは言えないんだが、その……ちよつとほら、でも……。

というかイゼツタ、お前身重だろう!? いくらなんでもその状態で性行為など……あ、あれ、よく見たら入ってない……太ももで挟んでこすってる? ああ、入れないでやってるのか……。

そ、それにしたって……というか、すごくその……淫靡な……。

『ソロお……っ!』『イゼツタっ……!』って、互いに名前を呼び合いながら……胸や、お腹といった場所を愛撫しつつ、やわらかそうなイゼツタの太ももに包まれて、サンジェルマンの肉棒が……あつ、射精した……え、ちよ……に、二回目でまだこんなに出るのか……!? こ、こつちまで飛んできたあ……

うわあ……気持ちよさそう。イゼツタも、挿入こそされていないものの、快感だったんだろうな……すごく、満ち足りた顔をしている。

……いいなあ……幸せそう……。

実質的に恋愛結婚だからな……ホントに満足そうな顔してるなあ……。

何と言うか……最後に、見せつけられてしまつて……セックスで満たされた心に、

ちよつとだけ不満が残ってしまった夜だった……………

……………しかしまだ夜は終わらず。

今度はビアンカか！ だからここは私の部屋だと何度も！

……………つて、あ、思わずツツコんでしまつて、起きてるの気づかれた。

え、イゼツタもビアンカも自分から来た？ 多分、私では1回か2回で限界で気絶し

てしまうだろうから？ ……くう、実際その通りだったから何も言えん…………

しかも……………ちよ、ビアンカ……………お、お前、ちよつと乱れすぎじゃないか？

昨日も、お前が嬉々として自分で胸をいじりながら、サンジェルマンのペニスをしゃぶつてるところを見てて思ったんだが……………お前、そんないやらしかったか？ 私、かな

り小さい時からお前に守られて一緒にいたんだが……………あんな顔、初めて見たぞ!?

胸で挟んで、口でも……………手も使つて……………しかも、イゼツタと同じように、太ももでも

……………さらには……………わ、腋!?! 髪!?! ……あ、足!?! それ、サンジェルマンは痛くないの

か!?! 手とかよりも明らかに乱暴というか、荒々しいように見えるんだが……………

最後には、ちよ、わああああ!! そ、そこ、お、おひ、お尻っ!! お尻の穴……そんなところまで……きれいにしてきたから大丈夫? いやそういう問題じゃ……お腹には負担が行かないようにしてる? だからそうでもなくて!

拳句の果てに……そ、そのように淫らなことを、大声で……しかも、な、何個か意味が分からない単語まで混じってたんだが。呂律回ってないし……ちよつと本気で、おかしくなってしまうのではと心配したぞ。

あ、ああ……出した、出してる。お尻の中に……。

抜き取ったら……あ、あふれてこぼれてる……。お尻の穴、広がってる……だらしなく……どろどろ漏れ出てきてるう……。

……………。

……なあ、その……サンジェルマン?

その……彼女たちを悪く言うつもりはないが、その……女性器にも、入れたいだろう? その……元々それを入れる場所として、精を放つ場所として正しいのは、そこなわけだし……

見た感じ……全然、出し足りないんだろう? すごく、まだ、その……大きくて硬いし。

けど、ほら……彼女たちは今、女性器でお前のを受け入れるわけにはいかないわけだ



し……

……だから、な？ 私でよければ……その……ある程度回復したし……な？

何なら、私が気絶したあととか、動けないくらいになつた後……人形みたいに扱ってくれて、いくらでも使ってくれて、注いでくれて構わないから……いや、無理してるんじゃないくてその……ほ、本気で気持ちよさそうだったから……純粹に興味がある……さ、さすがにその、ピアンカのお尻に入つてたわけだから、ちよつと洗うか拭くかしてほしいけど……え、拭いた上で、錬金術で殺菌できる？ そ、そうか、なら問題ないな。

……うん、頼む。

その……もつと、私にも……くだ、さい。

……結局、次の日動けなくなるくらいにがつつりやつて、がつつり注いでもらった。けど……だめだ。根本的な問題の解決にならなかつた……。

一回やればとか、無理だ。余計はまった……これ、今後やめられる気がしない……。本来の夫とやった感触がどうだったかとか、初夜の思い出とか……すでに忘却の彼方だ。完全に膣が、いや……体全部が、彼に染められてしまった……。

胸も、背中も、お腹も、彼のをぶっかけられてべとべとに……く、口にも入れられた。

一生懸命、奥まで啜えたら、どうにか射精してくれて……苦かったけど……ちよつと、美味しかった……かも。

人妻ということで、彼の方から遠慮してくれていたキスも、自分から求めてしまった。しかも、何度も。

舌まで入れて……だ、唾液が、くちゆくちゆく……

しかもその後は、膣だけでなく……ピアンカと同じように、お、お尻まで……！！

膣以上の圧迫感の上、深いところまでえぐるように……内臓を犯されるような感覚……しかも、射精の量が多いから……すぐ奥の方まで熱い感触が……！！

さらにその下準備の時……腸内を洗うのは、『錬金術』でやってもらったから、中身を見られることはなかったけど……！！ お尻の中に、薬、ゲル状のやつ、ちゅーつて入れられて……指、ぐりっ、て入れられて……塗りこまれて……。

途中で身をよじって力んだら、『びっ』て濁った音が……は、恥ずかしかった……！！ さ、最終的には……私の望み通り、私が動けなくなっても、ラブドールのように抱きかかえて、腰を振って……前に後ろに、何発も何発も注ぎ込まれた。本当に人形として扱われてるみたいで……やや屈辱的というか、悔しく思う反面……ちよつと興奮もした。

脱力して、嬌声すら口から出ず、『あーあー……』って、うめき声みたいな音が口か

ら出てくるだけの私を、パンパンと腰を打ち付けて犯す図は、ちよつと犯罪的だったと、後で聞いた。

腰が痛くてまともに動けないので……唯一このことを知っているロツテに手伝ってもらつて、風呂に入つて、体を流して……膣内と、お尻の中の精液もあらかたかき出した。

……ちよつとロツテに引かれた。うう……は、恥ずかしい……！

その後、サンジェルマンに腰と体調を治してもらつた。

錬金術、様々だな……これがなかつたら、今日の予定全部キャンセルしなきゃならなかつた。

……この後、イゼツタとピアンカに、改めて今後も、彼を貸してもらえるよう話さない……

今ほどのみち、イゼツタとピアンカは身重で彼の相手ができない。

なら、その間私が彼を慰めるというか、相手をするのは……うん、それがいい、そうしよう。

避妊さえきちんとすれば問題はない。彼の薬学知識や『錬金術』なら、簡単・確実だろ。

……いや……というか……

もういつそのこと……時期を見計らつてではあるが……世継ぎも、彼に頼めないだろうか？

こう言つてはなんだが、夫は私との間に子供を作ることに消極的だし……ならばいつそ、彼に孕ませてもらえば……さ、幸いと言つていいのか、どつちも金髪碧眼だし……私の記憶が確かなら、血液型も同じだ。ばれない、と思う。何なら、夫は言えば許してくれそうだし。

だつたら……ゴクリ。

……夜物語の中だけだと思つていたが……女が子宮で男に惚れるというのは、本当にあるのだな。

今となつては……処女を彼に捧げられなかつたことが、口惜しくさえ思えてくる。

……女子会の時にイゼツタが言つてたみたいに、再生して改めて破つてもらうのも手か。

まあ、こさえるにしても……もう少し国内外の情勢が整つてからの方が、時期としては好ましいから……やるなら来年以降だろう。戦後すぐの頃よりは公務も減つてきたとはいえ、もうしばらく、私が動けなくなるわけにはいかないし。

そして……その時が来たら、その……お、思う存分種付けを……。

か、彼の子種で……私が、このお腹が……は、孕む……わけだ……。そして、子を宿し、胎の中で大事に育てて……産む……。

今、イゼツタやビアンカにしているように、大事にされて、労わられ、甘やかしてもらって……

ちよつとずつ大きくなっていくお腹……彼との愛の結晶を、体の中に感じて……

生まれてくるのは……彼と、私の子……将来、次期大公として、この国の未来を担う……

イゼツタや、ビアンカと一緒に子育てを……お、お互いの子供を、一緒に遊ばせたりなんかしちやったりして！

その様子を、彼と一緒に4人で眺めつつ……次は男の子がいいかな、女の子もいいかなーんて！

ああ、なんて甘美な未来……。

注意点があるとすれば、絶対に対外的にばれないように、だな……。顔がどつちに似てしまうかもそうだが……この間、サンジェルマンが言っていた『でいーえぬえー』鑑定とやらも気になる。

まあ、錬金術がそれすらごまかせるレベルになる見通しだと言っていたから……大丈夫

夫か。

後は……変な心配ではあるが、イゼツタとビアンカの子と、恋仲にならないようにしない……。

対外的には違つても、実際は血のつながつた、腹違いの兄弟姉妹だから……結婚させるわけにはいかん……。

あ、でも、血が濃くなつて悪い影響が出ないように、これも錬金術でどうにかなつたりしないものだろうか？ 万が一そうなつた場合、子供たちの意思を尊重したい。

……まあいい、所詮はとらぬ狸の皮算用だ。

とりあえず、イゼツタとビアンカに相談だな。

将来、彼に種をもらつて世継ぎを作るところまで、許可を取らないと……あ、それと、できればもう一つ、許可ほしいな。

こっちは、彼の許可も要りそうだが。

……私も……『ソロ』つて呼びたい。

## 14—1 後日談 ロツテ（前編）

R月T日

「はあ……また今日ですか……」

えー、皆様どうも。

私、ここに、欧州魔法関連学問研究所・ランツブルック本部にて、ハウスメイドをしております、ロツテと言います。

元が付きませんが、姫様……今の大公・オルトフィーネ殿下にお仕えしていたこともありません。

そのフィーネ様の盟友であらせられます、白き魔女ことイゼツタ様のお世話係を申し付けられ……その縁で、この研究所に赴任しています。

……突然ですが、そんな私の最近の悩みを聞いてください。  
私の主は、イゼツタ様なのですが……最近、ご結婚なされました。

相手は、かつてゲールで辣腕をふるいつつも、先の大戦において義をもって帝国に国旗を翻し、国際社会の平和を勝ち取った、世界的に有名な存在となった英雄にして研究者……最近は『蒼の錬金術師』という通り名で知られるようになった、ソロモン・フォ

ン・サンジェルマン様です。

錬金術を使う時に、青い火花がバチバチ散ることから、その名前が付いたそうで。

『隻眼の英雄』という通り名もあるようですが……その片目を奪ってしまったのがイゼツタ様なので、その名で呼ばれるとイゼツタ様がちよつと落ち込まれるそうで、嫌いだそうです。

戦時中から相思相愛だったお2人。それぞれ公国と帝国の出身ということで、色々と障害や面倒ごともあったみたいなのですが……それらを乗り越え、見事に結ばれたお2人には……私も当初、心より祝福を送らせていただいたのは、まだ記憶に新しくあります。

そしてこれから先、『白き魔女』と『蒼の錬金術師』という、世界の先駆けたるお2人に仕えられるという素晴らしい未来に、私は改めて胸をときめかせたものでした……

……その時は、ですけど。

……いや、その……お2人とも、すごくいい人なのはわかるんですよ。

使用人に対して当たり散らすようなこともしないし、すごくよくしてくれます。戦時中からの付き合いのイゼツタ様はもちろん……ソロモン様もです。

民からの人気もあって、研究成果も日進月歩、まさにお2人の人生は順風満帆と言っ



ていいでしょうし、何より夫婦仲睦まじい。そのことは、お仕える身としてもうれしい限りです。

ただその……ちよつと、睦まじすぎるんじゃないかな……つて、思うんですよね最近。

特に……毎朝、ベッドメイクのために寝室を訪れる時に。

……夫婦の営み、だというのはわかります。

特に、ソロモン様は、イゼツタ様以外にも、側室として、元・近衛隊長のピアンカ様を抱えておられますし……最近はその、大きな声では言えないのですが……大公殿下ごと、フィーネ様とも、秘密ながら懇ろの仲となつております。

……その気になれば、その3人を同時に相手にできるくらいに絶倫だということだから……その、英雄色をなんとやら、つていうのは……ホントなんです。

なので、ほぼ毎日……どこかしらの部屋のベッドが、こうなつてます。

男女の色んな体液で汚れ……時には、『濡れてる』よりも『浸ってる』という感じの表現をせざるを得ないほどの、壮絶な状態……何やったらこんななるんですか、つて毎回思います。

……2か月ほど前になりますが、イゼツタ様、ピアンカ様ともに、ご懐妊が明らかになりました……お体をいたわる必要がある分、前よりはましになつたんですが……え

え、それでも、できる範囲でやろうとするので……。

そして、お2人に輪をかけてアレなのが、フイーネ様との蜜月の折に使われたベッドで……妊娠しておらず、遠慮もいらぬがゆえに……もう、毎回、もう。

……もうはつきり言つてしまいますと……翌朝のベッドメイクが大変なんです。すつごく。

今まさに、それを痛感してるんですけども。

……これは、痕跡から察するに……1回や2回じゃないですよ……。

……シート、重い……。色々吸ってるから……それに匂いも、すごい……あ、マットレスも汚れてる。換えなきゃ。……わっ、変なところ触っちゃった、手が、びちゃって……

あーもう、私も、メイドである前に女の子なんですけど……こ、こういうのを処理させられるのはですね、あのー、えーと……か、感情的にアレなものがあると言いますか……。

……ぶっちゃけ、ここまで毎日こういうったものを処理させられてれば、もう慣れたもので、嫌悪感とかはほとんど感じません。

しかし代わりに……なんかこう……興味、かな？ 否応なしに、ちよつと本能的に、じゅんつ、とくるものがある……

……優れた雄の気配や痕跡に、雌の本能が反応している、とでも言えばいいんですよ

うか？

し、正直、その……興味が出てきてしまうん、です。

ソロモン様……一体どんな風に、皆様と愛し合ってるのかな……どんな肉体をお持ちなんだろう……って。

一旦気になると、仕事も手につかない……なんてことはさすがにありませんが、いつもそんなことを考えてしまいます。

特に、イゼツタ様やビアンカ様、フイーネ様が幸せそうにしてる朝とかは。

その、悶々とした気持ちを抱えながらメイドをやっていた私は……ある時、偶然ながらも、見てしまったのです……。

まだイゼツタ様たちが妊娠してないくらいの時期……ある夜のことでした。

別なお部屋の整理整頓を済ませて、急ぎ足でお屋敷の廊下を歩いていた私は……イゼツタ様のお部屋の前で、艶の入った声が聞こえてくるのを聞いてしまって……

いけないことだとは思いつつ……扉を少しだけ開けて、中を見て……。

そして、私の目に飛び込んできたのは……ベッドの上で、下から何度も突き上げられるようにして責められてられながら、快感に身をよじっているイゼツタ様。

その下になって、腰の動きだけで、イゼツタ様をかくくゆるすっているソロモン様。すごく、激しくて……それでいて、お互いを想い合っているのがわかるセックス……

目が、離せませんでした。

達してしまつたようで、びくびくと震えて倒れ込んだイゼツタ様を、ソロモン様は胸板で受け止め……そのまま、抱きしめてまた腰を振り始め……しばらくすると、上下逆転してソロモン様が上に。イゼツタ様は、下からその腕をソロモン様のお体に回して抱きついていました。

……あつ、あ……しや、射精してる……。

すごい勢い……脈打つてるのが、ここからでも見える……ああつ、あふれてきた！

つながつてるところの隙間から、びゅびゅつ、つて、飛び散る感じで……あふれた分の精液が……。

しかし、ソロモン様もイゼツタ様も全然止まらず……2回戦、3回戦と続いて……射精のたびにどぼどぼとあふれた精液が……あんだけやれば、そりや、あのくらいになりますよね……。

精液愛液汗涙、いろんなものを出しながら、ごろごろ転がって、色々体位を変えて……これならむしろ、ああなつて当然。あるいは必然ですね。

うう……見てるこつちが恥ずかしいくらいにいちやらぶちゅつちゅ……お、思い出すだけで顔が赤くなります……。しかもそれがほぼ一晩続くんだから……

……しかし、それだけではなかつたというか……

むしろ、イゼツタ様とのアレは、まだ大人しい方だったというか……

……別な日。私は、今度はビアンカ様の部屋の前で同じ声を聴きました。

……そして、誘惑に負けました。

そしたら、その中では……思わず『何してんですか!?' って声を出しそうになりました。

四つん這いになったビアンカ様に、後ろから覆いかぶさるようにしたソロモン様が……ま、まるで獣の交尾か何かのように、腰を振りまくって……パンパンと、乱暴に……。

出し入れのたびにかき出される愛液、はじけ飛ぶ汗と愛液と先走り汁の混じった飛沫、響く快音……しかし、何よりも驚いたのは……その間中、聞こえてくるビアンカ様の声!

『ああああ、はああう! ひいん! やつ、あ……も、もうらめだ……入れてくれ……わらひ、らめ……ん、ん——!! じ、焦らすなあ……おち、ん……おちんひん、ほしいつ! 早く……くれ……らさいつ! 私の、オマンコに……はやく、おちんぼ入れてええっ!』

『はあああうっ! い、いい、おちんぼいいいっ! わた、わらひの、おにやかの中、滅茶苦茶にされてるのおっ! ズコバコって突かれて、お腹、びくびくつてえ! あああ

あ、降りてくる、赤ちゃんの部屋あ……子宮、降りてきちゃうう！ 妊娠しちゃうのおお！』

『はひいいい……あうっ、おうっ、おぐう……ん……んほおおっ!! お、お尻の穴あ……バ力になりゆう……広がってえ、奥までぐりぐりって、ぐりぐりって……あおおお！

あああ！ 出てるっ……あ、熱い……ああ……い、いいっ、美味しいのお……お尻の穴でずぼずぼされて、腸内でせーえき飲むのいいひいい……もつと、もつと飲みゆうう……お代わりい……』

『あう……う……あつ、あひつ……すご、しゅごかったア……。あ、あつ……だめ、出る、出ちゃう……注いでもらったの、漏れる……ひあああ！ さ、さわるにや……あぎい!? だ、だめ、それだめ……お、オマンコからも、お尻からも……せつかく注いでもらったのにい……だ、め、我慢でき……と、トイレ……それだけは……お、おしっこ、いかせ……やあああああ……』

あ……あれって本当にビアン力様ですか!?

すごい勢いで展開される変態的なプレイの数々……飛び散る汗、愛液、精液！ し、しまいには……失禁……おしっこ、あんな豪快に、ベッドの上で……放物線……。

さ、さらには、最近は母乳まで出るようになってましたし……。

……時折、精液や愛液とはまた違う異臭が混じってるのは……ひよつとしたらビアン

力様のせいだったのでしょうか？　あまりにも気持ちよさそうに漏らしまくってましたし……

……そんなビアンカ様以上に衝撃的なセックスを繰り広げていたのが……ついこの間覗いた、フィーネ様だったりします……。

ああ、フィーネ様、かつてお背中をお流ししたり、髪を洗って差し上げたこともある、フィーネ様……裸のお姿を拝見するのは久しぶりですが……いつ見てもすべすべなお肌……。

……凹凸の程度が、数年前から一向に変化していないように見えますが……まあいいとして。

イゼツタ様ほどではないとはいえ、お互いに憎からず思っているご様子……セフレ関係は順調らしいですね。それは何よりで……

あれ、動きが……え、何ですか、あの姿勢!?　つ、つながってるフィーネ様を、持ち上げて……え、駄弁、とか言いましたっけ？

あああ、そんな姿勢であんなに激しく……下からずんずんと!

ひ、姫様がぐがくって震えてますよお!?　大丈夫ですか……って、あ、射精した……結合部から、トロトロ垂れてきてるう……

こ、今度は立ちバック……あんなに激しく……。お、犯されているかのよう……

あ、でも普通に対面で、正常位とかでもやるんだ……あつ、でもすぐ変えた……今度は騎上位だ……ああ、また出した！

……んん!? あ、あれ……ちよつと、姫様気絶してませんか？

その状態の姫様を……下から抱え上げて、腰を振ってズコバコと……ちよ、ちよつと何して……意識のない、あるいはあつても動けない姫様の体にそんな！ ら、ラブドールみたい……。

いくら何でもそんな……ああつ、言ってるそばから膣内に！

どくん、どくん、つて出して……漏れ出てきてる、マジですか……!?

ま、まるで姫様を自慰の道具のように……み、見た目やばいどころじゃないですう

……

ぐったりして動かない小柄な少女……肉棒に貫かれている恥部……どろどろと流れてくる精液……アへ顔で焦点のあつていない顔……それでも動く腰。ひいひい、は、犯罪臭ししません！

……とまあ、色々違いはありますけど……こんな風に乱れてやつてるのであれば、そりゃあのくらいは汚れるわ……と、私は納得してしまったのでした。

そしてその夜から……それぞれの部屋で見た、お三方の痴態は……私の頭の中で永久



保存。

……こつそり、一人遊びの時に使わせていただいています……

メイドだつて……その……むらむらもするんです。

おちんちんに興味津々だったりしますし、女としての幸せだつてほしいんです。

……言つてても仕方ないですね……はあ、仕事に戻ろう……。

……この時の私は、まだ知りませんでした。

私が、陰から覗いていたその構図の中に……近く、ほかならぬ私自身が変わることに  
なるということ……。

## 14—2 後日談 ロツテ（後編）

R月U日

この日、僕は……ファイネとの不倫セックスに、イゼッタとビアンカがフォロー要員として参加しての4Pを楽しんでいた。

ただでさえ快樂で乱れているファイネに対して、イゼッタとビアンカが胸とか腋とか、オマンコにお尻に、なでたりつまんだり舐めたりしまくるもんだから……ファイネってば、ビアンカに負けず劣らずのトロ顔をさらして乱れ狂っていた。

淫語については、ビアンカに比べて知識そのものがないからか、そんなでもなかったけど。

そのまま、ファイネがへばった後に2人の相手もちよつとだけ……お腹の子に負担にならない程度にやって、就寝。

もちろん、部屋に戻って……ってというのが、最近のサイクルだった。

……が、この日はいつもと違う展開が待っていた。

事後の余韻に浸っていたところ、ファイネが飲み物を取りに行く、といって席を立つ

たかと思うと……数分後、飲み物以外のものを手にして帰ってきた。

真つ赤な顔であわあわしている……メイドのロツテちゃんを。

……え、何事？ 何でこの現場に彼女が……っつか、何連れてきてんのフィーネ？

……何？ 部屋の前にいたのを連行してきた？

え、覗いてた？ この部屋を？

恐らくは、僕とフィーネがやってた時から、覗きながら……オナってた？ 部屋の前に、水たまりができてたつて？ やりすぎて腰抜けて動けなくなつてたところを捕まえた？

……何じゃそりや。

そしてそこから始まる……フィーネ、ピアンカ、イゼツタによる、ロツテちゃんへの詰問の嵐。

簡潔にまとめると、

ロツテ 『お許しくください！ 偶然通りがかつたら声が漏れて……出来心だったんです！』

フィーネ 『ならん』

ピアンカ 『だめだ』

イゼツタ 『えつと……ダメ』

おおむねこんな感じ。

刑罰執行待ったなし。

それを聞いて、ロツテちゃん……当然ながら、震えあがる。

まあ、それも仕方ない。これ、主人からの信用が第一のハウスメイドにとつては、誇張なしに死活問題だからね……。

普通に考えて、プライベートを覗くような、信用ならないメイドをそばに置いておけるような人はいない。こんな不祥事、明らかになつたらその時点でクビ&追放確定である。

それを知って、追い出される……と、顔面蒼白十涙目になるロツテちゃんだったが……しかし、この3人、そこまでするつもりはないのであった。

曰く、彼女が信頼できることは知ってる。

曰く、多分、本当に出来心で、我慢できなかつたのだろう。女が色に狂う気持ちは、ここにいる3人全員が知ってるので、実害も出てない以上、あんまり強く出られないし、出る気もない。

曰く、けど、それでも罰は必要だよな。

……で、どうなつたか……今、目の前のこの光景である。

「あつ、ふ、ン……はあつ、はあつ……うう……はずかしい、です……」

僕ら4人の目の前で、自慰を披露させられているロッテちゃん。

片方の手でスカートをめくりあげ、もう片方でその股間をくちゆくちゆと……顔は当然、真っ赤。目の端には涙が浮かび、息は乱れ……非常にエロ可愛い。

エロい罪を犯したわけなので、エロい罰を与えるという、単純なような真理なような……けどやっぱりおバカな感じのペナルティ。僕ら4人の前で、ロッテちゃんは1人プレイの真っ最中。

しかも、その真ん前で……フィーネと僕がやっている。

見せつけるように、わざと、ゆっくりと。

『そんなに見たいのなら見せてやる。遠慮なく自分を慰めるとよい』

そんなフィーネの一言の後に、すぼぼーん、と何のためらいもなく服を脱いで全裸になったフィーネを、僕が背後から貫き……それがよく見えるように、彼女の体を持ち上げて、ロッテちゃんに見せつけながら……背面座位でじゅぼじゅぼと、下から突いている。

最初こそ、『そ、そんな、は、はしたないです……お、おやめください……！』とか言っていた彼女だけど、すっかり見入っている。ガン見だよガン見。一瞬たりとも目を離さないよ。

フィーネはフィーネで、見られながらやるのが興奮するのか……いつもよりきゅん

きゅん膣が締まるし……いつもはやらない、まるで実況してるみたいにやらしーことを口に……

『ああつ、そ、ソロの……おちんちんがっ、奥に……奥に届いているうっ！』

『すごい、熱くて……硬くて……子袋が灼けてしまいそうだ……』

『もう、だめだあ……私のっ、わらひの中の雌が喜んでいりゆう……っ！ ああつ、あ——！』

普段は、公式の場で凛とした態度を崩さない彼女が、男の股間にまたがって座り、下から肉棒にぐぼぐぼと貫かれながら、口からは淫語を次々と放ちながら……見せつける。

場末の娼婦でもやらないような、ともすれば下品・低俗とすら言えそうなその姿。

そんなショーを前にして……ひたすらに、一心不乱に股間をいじるロツテちゃん。僕の目が間違つてなければ……何回かイってるよね？ それでも続けて……よつぼど溜まつてたのかな？ それとも、そのくらい今の僕とフィーネのセックスがエロかったか……。

……しかも、その後……フィーネに對抗心燃やしたイゼツタとピアンカが、それぞれ飛び入りで、同じようにショータイム始めちゃったからなあ。

どっちもお腹に子供がいる状態での、マタニティセックス……イゼツタは、愛撫とか

キスがメインの、いつも通りの愛情たっぷりセックス。一応安定してきたってことで、膣に先つちよだけ入れて……出す時は外で。みたいな感じ。

もう5か月だからね……安定期入ったらしいからね。

一応、錬金術で子供に影響でないようにカバーとか保護もしてるし、主治医の言うてることは守った上でやってるので大丈夫だ。

それでも、細心の注意を払って、優しく彼女の体を扱う僕に、イゼツタは『愛して……この子と一緒に愛してえ』『ああつ、来ちゃう……いくつ……ソロの腕の中でイッチャうう……!』とまあ、抱いてるこつちが幸せになるような乱れ方をしてくれて。

そしてさらにその後、休憩に入ったイゼツタに代わり、ピアンカも参戦。

こつちは何というか……普段いない観客がいるからって、これ幸いとすごいことしまくって。

口でやるし、飲むし、先つちよだけど前に入れるし、お尻でもやるし……さらには、大きくなってきたお腹に、デコレーションよろしく精液をかけて、しかも塗りたくって……『ほおら、パパもお前を祝福してくれてるぞ』って……ボテ腹白濁まみれにして何してんのあんた。

『子供に栄養をあげないと』って……フェラチオからの『ごっくん』はもちろん、ペニスに吸い付いて、尿道に残った精液まで『じゆる、ずず、じゆるる……』って一滴残らず

吸い出して、それがなくなったら『もつとお』って、僕の睾丸を手でつかんでもみしだいたり……

さらには、わざと僕に、射精させる時、自分の手で作った器に出させて……そこから、わざと『ずじゆるるる……』と、大きな音を立てすすって飲んだり、手に残った精液をなめとつたり。

イゼツタの時にはひたすら顔が赤くなっていたロツテちゃんだが、ピアノカの方も刺激がまー強かったみたいで、限界までいじり倒した挙句、動けなくなつて倒れ込み、そのまま気絶した。

そして僕は、そのまま、無防備に意識を手放しているロツテちゃんをベッドに運び、十分に濡れているその秘裂に肉棒を……なんてことはさすがにしない。

ちゃんと彼女は、軽く体を拭いて着替えさせて、その日は客間に寝かせてあげました。さすがにね、寝込みを襲ってレイプするなんてことまでしないから。いくら罰でも。ロツテちゃんだつて女の子なんだし、自分の体なり純潔は大事だろう。これに懲りて、ちよつとは落ち着いてくれるとありがたい……

そしてその翌日の朝、

僕の部屋で……僕のベッドに寝転んで、事後の匂い（昨日もやった）に包まれながら、



はあはあと息を荒げて自慰しまくっているロッテちゃんを発見した。悪化してんじゃん……

どうも、折角やめてあげた前日のアレが、かえってとどめだったらしい。

で、結局その日、そのまま……レイプを我慢して守ってあげた彼女の純潔を、僕が美味しくいただくことになったのだった。

なんか彼女、たくましくも最初から期待していたようで……。

『ろ、ロッテは悪い子です……ダメなメイドに、どうか罰を与えてください、ソロモン様あ……』

発情しきっているのがわかる顔色に、うるんだ目でそう言われ……さらに、スカートをめくってトロトロ口になったオマンコをさらされて……我慢できず、ベッドに引つ張り込んだ。

初物だった。1人プレイも、ディルドとか使ってやることはなく……あくまで手でやってて、その身にペニスを迎え入れたのは僕が初めてだったそうだ。

ぶきつちよながらもきゆうきゆうと締め付ける快感が心地よくて……何度も抱いた。

フィーネよりも小柄な彼女は、体も軽くて……持ち上げたり組み敷いて、犯る形を好きないように選べた。

最初の一回は……お仕置きとしてではあったものの、やっぱり雰囲気大事にしたかったので、正常位で正面から向かい合って抱きしめながら。膜を破って奥まで突き入れた後は……痛みが治まるのを待ってから、膣全体、子宮口までめちやくちやに犯してやった。

射精する時は、思いつきり奥で……子宮の中に注ぎ込んだ。

その後、もつともつと滅茶苦茶にして、続ける。

途中までは着衣で、スカートをまくり上げて、ノーパンでさらされている恥部に欲望をぶつけ、服もろともドロドロにし……途中からは、服全部はぎとって犯した。

上から下まで犯した。しゃぶらせて、飲ませて、突っ込んで、吐き出して……

ロツテちゃんに動くだけの体力がなくなっても続けた。いつだったかのフィーネみたいに、人形よろしく扱って犯し続け、腰を振り……その身に、徹底的に快感を、僕という存在を刻み込み、注ぎ込み、しみこませていく。僕も、彼女という存在を、肌で感じて忘れないように。

射精する時は……もつぱら膣内。でもお尻にもけっこう出したし、顔や体にもかけた。

最終的には、そのお腹がぼっこり膨らむくらいのところまで注ぎ込んで……さんざん突かれて腰砕けになった彼女は、もう今日ずっと使い物にならないだろうことが容易に

想像できた。

焦点のあつてない目で、オマンコとお尻から精液を垂れ流しにして、体中どろっどろで、呼吸音は『ひゅー、ひゅー』だもんなあ。

他のメイドに連絡して、彼女のシフトを調整してもらおう。……この時点で、ロツテちゃんが僕のお手つきになったことは知れたかな。

なので、今日はもう、僕の部屋のベッドで寝かせてやることにした。

僕もつかれてたので……一緒に。

……にしても、見事に当たったな……イゼツタの予想。

『ロツテちゃんもソロのこと好きだと思うから……多分、近いうち、ソロのを欲しがると思う。その時は、2人にも了解はとつてあるから、安心して応えてあげてね？』  
だつてさ。ホント……女の子の勘はすごい。

R月V日

ロツテちゃんが正式に僕の愛人……メイドとしてのお手つきとして、そういう関係認定され……以後、フィーネと同様、イゼツタ達が妊娠中の性欲発散係として働くこととなつて……数日。

なんというか、彼女は実によく働いてくれている。

公務とか多くてここにそれほど来れないフィーネに代わって、って感じ。

メイドとしての仕事はもちろんのこと……性処理も。

『ああつ、そ、ソロモン様あ……ま、まだ仕事中で……んくうつ、だ、だめ、ですう……。あつ、スカート……そんな……はあつ、そこ、いきなり……は、入ってくるう……んつ、せ、折角掃除したのに、また濡れちやうう……あつ、はつ……もう、ソロモン様のえつち……』

『んしよ、んしよ……どうですか？ 気持ちいいですか、ソロモン様……た、タオル使わずに洗うのって、その……大変だけど、ドキドキしますね……じゃあ、次は……どうぞ、ソロモン様のそれ……私の中で、洗わせてくださいませ……♪』

（ん、つ、んぷ……んちゅ、じゅる……ぐぷっ……は、だ、だめ……音、立てちゃ……ばれちやうう……見つかつて、見られちやうのに……あう、はぷっ……あむ……止められないです……）

夜、やるのはもちろん……時には、まだ明るいうちから相手してもらおうことも多々ある。

家事やつてる最中に、突然後ろから抱きしめてスカートをめくっておっぱじめたり、お風呂に同行させて背中流させたりしてそのまま突入したり、エロ漫画みたいにごう……机について部下と仕事の話をしながら、机の下でしゃぶらせてます、っていうのも

やった。

色々無茶やってるな僕、っていうのは感じるんだけど……一旦そういう関係になって、しかもイゼツタ達もすんなり受け入れてくれてるのがよかったのか、ロッテちゃんもノリノリだからさ。『どんどん使ってくださいませ！』って……すごく献身的（って言うっていいのやら）。

夜はもつとすごいし。欲望をそのままにぶつけるのはもちろん……ビアンカやイゼツタと一緒に加わった時には、ロッテちゃんからこんな申し出まで出てきてるし。

『どうぞ、私の体は……イゼツタ様やビアンカ様の代わりとしてお使いください。お2人には及びもつかない未熟な体ですが、奥までガンガン挿入することかなわない代わりの穴としてでも』

つまり……オナホール代わりとして使えと、

ベッドの上で、イゼツタとかビアンカといちやいちやして……普段なら彼女たちに挿れるところ、妊娠中でできないから、代わりに下半身は私の穴を使って気持ちよくなってくださいと。

誘惑に負けて、実際にやってみた。イゼツタとキスしながら、上半身で乳繰り合いながら……下半身は、ロッテちゃんに突っ込んで激しく動いて欲望を吐き出す感じ……

手ではイゼツタを愛で、口ではイゼツタの名前を呼びながら、犯しているのはロッテ

ちゃんの膣……しかし僕もロツテちゃんも、もちろんイゼツタもそのことには触れないまま……

な、なんて背德的というか……悪いことしてる感じ……。

ちなみにその後、きちんとロツテちゃんに対しても、ベッドの上で愛でました。イゼツタと一緒に。彼女だつて、メイドで愛人とはいえ、れっきとした体内にカウントされる1人だ。プレイとしてそういう扱いにすることはあれど、ぞんざいなまま放り出すつもりはない。

きちんとロツテちゃんを、ロツテちゃんだけを見て、ロツテちゃんの全身を犯しました。

そんな感じで、ロツテちゃんとはちよつと変化した関係ながら、楽しくやらしく暮らしてます。

……ちなみに、ロツテちゃんからは、毎日やこれからの性生活について、2つほど注文を受け取っている。

1つ目。避妊はしっかりすること。

最初の一回、僕特製のアフターの避妊薬で妊娠を回避してからは、医者 of 避妊薬を服

用して、種が付かないようにしている。それについて、僕に許可をもらってきたわけ。まあ、これについては文句ない。妊娠したら、仕事にも影響出るし……自分の立ち位置等について、いよいよ本格的に考えなきゃいけなくなるし。

主のお手つきになって、子を孕んだメイドが、そのままメイドでい続けるのは難しいだろう……正式に愛人、あるいは側室として囲われ、社会的にも通用する立場を手にするか……手切れ金を支払われて退職するか。あ、僕の場合後者はありえないので。

それに加え、ロッテちゃんは『自分はあくまでお仕える身』という自負があり、それを果たせなくなるならば、たとえ自分の幸福であつても二の次、だそうだ。

少なくとも、イゼツタやピアンカの『代わり』が果たせなくなるようなのは……2人がそれこそ、もうこれ以上子供はいいかな、つて考えて、避妊しつつのセックスをして『代わり』が確実にお役御免になるような時まで。

とはいえ、もしその時が来れば……できるなら、間に合うなら、自分も子供欲しいって。

……尽くしてくれてるなあ、ホント。

これは、イゼツタ達とも相談して……ぜひとも彼女にも……うん。遠くないうちに。そしてもう一つ。彼女自ら僕に頼み込んで来たことで……薬品と『錬金術』で、ある人体改造を施している。いや、副作用とかも全然ないし、改造つてほどでもないだけ

ど……

さつくり言ってしまったば……母乳が出るようにした。

僕とのプレイのため……つていう面もなくはないけど、それ以上にロツテちゃん、『乳母』つていうのもやってみたいそうで。

要は、数か月後に生まれるイゼツタやピアンカの赤ちゃんに……おっぱいあげたいと。

『だって、かわいい赤ちゃんの世話をする機会にも恵まれますし……私のお乳で、イゼツタ様やピアンカ様の、それに今後生まれるフィーネ様のお子が育つんですよ！ これ以上ない誉です！』

だってさ……なんか、変なところで忠誠心と母性が同居してるな。

まあ、本人が幸せそうならいいんだけど。

……ちなみに、ロツテちゃんの胸は最近著しく成長してきていて……もうちよつとで、フィーネとその立場を逆転させられそうな感じになっている。

イゼツタ≧ピアンカ<フィーネ≧ロツテちゃん、つて感じ。今は。

……いや、まあ、だからつてどうこうないんだけどさ。

僕はおっぱいの大きさにこだわりのないっていうか……皆好きだよ？

だからフィーネ、そんな落ち込まないで……。



これからだよ、これから。君も今成長期なんだから、まだまだ……え、それ3年前にも王宮の主治医に言われた？

……うん、何て？ 圧倒的な物量がどうしたって？ ゲールの軍は解体されたよ？  
何、妊娠すれば大きくなるか？ そりやなるだろうけど、待て、落ち着け、作るにしても来年以降だって自分で言ってたろ。そんなことのために家族計画……どころか国家運営の方針変えようとするな。僕はフィーネの手のひらに収まる感じのおっぱいも好きだから。ほら、ベッド行く？

## 15 後日談 ゴフイー

Z月F日

ここのところは、何事もなく日々過ごさせている。

イゼツタやビアンカのお腹も大きくなり、ちよつと歩くのも大変になつてきて……しかし、経過はすこぶる順調。予定日も近くなつてきて、あとは健康な子供を産むだけ、というところまで来ている。

フィーネも、大公という政治の頂点に立つ者として、その手腕をめきめきと研ぎ澄ましてきており……同盟各国の首脳からも一目置かれるくらいになりつつある。その合間で、僕やイゼツタ達の前で見せてくれる、1人の少女としての顔が魅力的だ。

そんな3人に加え、僕も含めて全員を、日常生活の面でロツテは支えてくれている。あ、こないだから呼び捨てにしています。

……もちろん、夜の生活も順調そのもの。

イゼツタとビアンカとは、あまり深く挿れすぎず、乱暴になりすぎないように注意し

てのマタニティセックスを楽しんでるし……フィーネとロツテとは、避妊した上で欲望のままにがつつりと。政務の後に車の中でとか、家事してるところを後ろから襲ったりとか、まあ好き勝手にやってる。

そんな日常に……このところ、1人、加わった者がいる。

その人は……白い髪に、赤い目が特徴的な……イゼツタと同じか少し年上、って感じの少女。

……僕らにとつて、いや、世界のほとんどの人にとつて……新聞やテレビで、あまりにも見覚えがありすぎる……忘れようと思つても忘れられない人だった。

帝国の尖兵として数々の国や大都市を滅ぼした、本物の『白き魔女』……ゴフィーである。

しかし、彼女に対して、戦争犯罪者として裁判が執行されたり、身柄を拘束されたり……ということは起こらない。

なぜなら、彼女は……『ゴフィーであつてゴフィーではない』からだ。

彼女は……ゴフィーとして、帝国の研究プラントの中で、試験管の中に作られていた……何人目かもわからない、クローンの1人。同じようにして、数十人ほども作られていたゴフィー達の……たった1人の生き残りなのである。他は全員、帝国が研究所を破壊する際に『処分』された。非常時に全ての証拠を消すために仕掛けられていた、自爆

装置によって。

ただ一人生き残った彼女にはしかし、いくら彼女が『ゾフィー』であっても、今まさに生まれたばかりの彼女に対して、すでに死んだ別なゾフィーや、帝国そのものの責任なんて問えるはずもなく……かと言ってそのまま放免にもできないため、身柄をこの研究所で預かっているのだ。

今のところ、特に何も問題行動を起こすこともなく……穏やかに暮らしている。別人だけあって、性格も違うようだ。この分なら、きちんと療養して落ち着けば……そして、適正な手続きを経てきちんとした戸籍とか手にすれば、社会復帰も近いかもしれない……というのが、国際社会の見方だ。彼女もまた、ある種の戦争の被害者。立ち直りを見守っていてあげようと。

……というのが一般の認識であって……そうでない真実を、僕らは知っている。  
このゾフィーが……『本物』であると。

正確に、はつきり言えば……ゲールの尖兵として爆弾落としまくって、魔石を使ってイゼツタと戦って、捕らわれの身だった頃のイゼツタをさんざんに痛めつけた、あのゾフィー本人であると。

あの最終決戦の後、ボロボロになりつつも生き残っていた彼女を、僕らはひそかに回収していた。魔女の身柄を、そして魔石を、他者に渡さないために。

魔石はすぐに、ミユラー補佐官から没収したものとあわせて破壊した。そして、本人は治療して、安静にさせていた。

『錬金術』で治療もすぐに終えて、数日後には目覚めたんだけど……当然ながら、イゼツタやフィーネ、果てはエイルシユタツトそのものに対しての憎しみはそのままだったため……覚醒後も、しばらくは、一時期イゼツタにつけさせていたあの『魔法封印の首輪』をつけさせて投獄していた。

まあ……ここランツブルックはレイラインが通ってないので、魔石を持っていない彼女にはどっちみち魔法を使うすべはないんだけども。

そして、今に至るまで……イゼツタとフィーネは、粘り強く説得や、時には謝罪——自分の先祖の裏切りを知ったフィーネが特に——を続けて、それが実を結び……少しずつ、態度が軟化してきていた、といったところだ。

……正直な話、彼女の怒りや憎しみもわかる。

心底から愛していた人に、自分よりも国を優先して裏切られ……その結果として、火あぶりにされ、殺された。どこまでも一途に、その人……当時の王に尽くしたにも関わらず。

だからこそ……彼女自身の、戦争に参加したという確かな罪を知りつつも、イゼツタにしてみれば、あそこまでひどい目にあわされた相手だと知りつつも……彼女をただただ否定するということはせず、フィーネとイゼツタは根気強く彼女と対話を続けた。

……そんなある日……2人との対話の中で、憎しみや悲しみが徐々に癒されていったゾフィーは……とうとう、その身の内に抑え込んでいた感情を爆発させて、大声で泣き出した。

『愛してたのに』

『あんなに尽くしたのに。彼のために戦ったのに』

『どうして捨てたの』

『どうして私を選んでくれなかったの』

『私は、何のために戦ったの。私は、あなたの何だったの』

弱音、ともとれる。愛していた、しかし最後の最後に、底なしの憎しみを抱いてしまった想い人への怨嗟と悲嘆の数々が、座敷牢の中にいつまでも響いていて……それを、フィーネとイゼツタは黙って聞いていたそうだ。

その翌日くらいから、徐々にゾフィーは態度を軟化させ、精神的にも落ち着いていったそうだ。

繰り返し、自分の先祖の……国のためとはいえ、裏切り以外の何物でもない行為をわびたファイネに対しては、『もういいわ』と、許す意図の言葉を投げかけたかも。

『……私はこれからも、彼を……エイルシュタットを、完全に許すことはできないと思う。でも……あなたが、彼や、あの王妃と違うというのはわかってるし……むやみやたらに目の敵にするのはやめるわ。死人は死人らしくしないと……今の世に干渉するものじゃない』

以降、ゴファイは……最初に国際社会への説明としてでっちあげた『立場』にある演技をしつつ、幸運にも拾った命、穏やかに日々を過ごしているわけだ。

……で、そんなある日のことだった。

ゴファイから、唐突に、ある申し出があったのは。

曰く……『罰を受けたい』と。

自分がやったことの……罪の精算をきちんとしてほしい、と。

……正直、困った。

いや、あの……君のこと、何の罪もないまっさらのクローンゴファイだって喧伝してるから、今更罪とか言われても、対外的にこっちが困るんだけど……。

帝国の尖兵として戦ったゴファイは、死んだことになってるし……その分がイゼッタ

の武勇伝の一つになっちゃってるし……

そう伝えたら、『だったらあなたたちの裁量でできる分でもいいから』と食い下がる。

小間使いになれでもいいし、一生を牢屋の中で過ごせでもいい。自分に、自分が納得できるだけの罰を与えてくれ。何なら、この命を散らしてもいい、と。

さてどうするか、という話になって………僕らの仲間内で話した結果は……

……なんていうか、当然のごとくこういう結論に行き着くあたり、皆……本格的に頭の中まで爛れてきてるよね。

……そういうわけで、今、僕の目の前には……一糸まとわぬ裸にされて、拘束具で両腕を天井からつるされる形で拘束され……そう、ちょうど、イゼツタがゲールにつかまっていた頃と同じ感じの姿勢にされているゾフィーが、顔を赤くしてこつちを睨んでいる。

けど、抵抗したりする気配は……ない。恥ずかしいけど、罰は罰として受け入れるよ  
うだ。

……イゼツタが味わったのと同じ、あるいはそれに近い辱めを受ける、という罰を。

ただし、兵士を用意して輪姦させるとかはさすがになしで……竿役は僕一人だけ  
ども。

「構わないわ……それで少しでもあなたたちの気が晴れるなら……煮るなり焼くなり、



好きにしてちょうだい。何なら……道具でも薬でも、何でも使ってくれていいから」  
ちよつと顔が赤いまま、そう言ってくるゴフィー。

まあ、そんなつもりはないけど……普通に、優しくやらせてもらうよ。

え、罰じゃないのかつて？ まあ……それはほら、建前建前。

……それに、イゼツタ達4人の口からも……厳しく、激しく、痛めつけるように……  
なんて意見は全く出なかつたからね。

むしろ……

『ゴフィーさん、今まで1人で苦しんで、悲しんで……せつかくだから、これを機に、色々世の中には楽しいこと、素晴らしいものがあるんだつて、知つてもらいたいです』

『公人としての私は、ご先祖様のことを悪く言うことはできません……しかし、それまで自らに、国に尽くしてくれた者に対しての不義であつたことは確かだ……彼女から奪つてしまった人生の潤いというものを、少しでも返してやれば、と思う』

『私は今まで……耳聞こえのいい『白き魔女』の伝説だけを耳にしていた。それが今は恥ずかしい……歴史からも忘れられた彼女に対して、どんな形であれ、少しでも慰みになるなら……』

『これからもずつとここで暮らすなら、今のうちに仲良くなつておいた方がいいと思います。緊張しつぱなしなんて、疲れちやいますから……皆さまと一緒になら、余計にです

ね』

それを聞かされて、またゾフィーの頬に一筋の涙が伝って煌いているのが見えたっけ。

で、緊張もほぐれたところでいぎコトに及んでみれば……何ともまあ、予想外というか、何というか。

いや、だって……

「はあああああつ！ んあ……ひぎいいいつ！ な、何コレえええ！ んあつ、ぎ、いう……しゅごつ……し、知らない、こんなの……知らない！ 気持ひいつ、んぎゅああひああ!？」

ゾフィー……乱れる乱れる。

僕のを後ろから突き込まれている間中、喉が心配になるくらいに、もう、大声で、絶え間なく。

愛液はもちろん、汗も涙もだらだら流して……体は突くたびにいつてるかのようにびくんびくん震える。目の焦点はとつくに合っていないし……鎖で縛ってなかったら、どんな暴れ方してたか。

まあ、暴れるって言っても抵抗とかじゃなくて、100%快楽でだろうけど。

……まさか、彼女が生娘だったとは。

それも、クローンの体だからってわけじゃなく……前世（って言っているのかね）から合わせて、ずっと。彼女が初代『白き魔女』だった頃から合わせての、未経験である。

どうやら、当時すでに王子様——前から思ってたんだけど、大公国なんだから『王子』って言い方どうなんだ？——にはお后様がいたため、しかも自分は『魔女』という、強くて頼りになるけど怪しいことこの上ない身の上であるため、愛していながら手が届かず、求めることさえできず……結局、そのまま永遠の別れとなった。

それでも、愛した人への想いのために、生涯をかけてこの国を守り抜き、これからも命ある限り守っていくつもりだった……その矢先に、あの悲劇が起こったわけだ。

……今更だけどさ、彼女……すごくいい人だったんじゃないの？ 最後の最後に闇堕ちするまでは、愛情たっぷりの上に、徹底的なまでに滅私奉公を貫いて……絶対、今のこの国があるの、彼女のおかげじゃん。いくら宗教が怖かったからって、裏切った恩知らずはこつちじゃん。

もつと他にやりようなかったのかな……死を偽装して隠居させるとかさ。

フィーネやビアンカも、それ聞いた当初はすごく申し訳なさそうにしてたもんな。

イゼツタは、最終決戦の時に『だってその人、王様だったんでしよう!!』なら……誰か一人のために意見を変えるようなことをしちやいけないんです！』って感じのこ

と言つてたな。

それは正しいと思うけど……その結果、悲劇なんていくらでも起こつてしまう。だから僕は、そのことに心から賛同はできない。

……多分だけど、国や世界のためにイゼツタを見殺しにしなくちゃならない、つていう状況に陥つたら……今はどうかわからんけど、以前のフィーネなら、苦悩しつつもそう決断しただろう。

当時の『王子様』も、国を守るためにそう決断したんだろう。

……けど多分、僕無理だな。

イゼツタ……だけじゃない。ピアンカやフィーネ、ロツテを守るために、全世界すら敵に回す気がする。錬金術をフルパワーで軍事利用して……それこそ、元の世界より質の悪い兵器すら作つてでも。

……怖いのは、そうなることを恐れて、イゼツタとかが自ら去つていつてしまうことだけでも。

……ひよつとしたら、もし事前に話をしていたら……数百年前のゾフィーも、最後の最後、自ら身を引いていたのかもしれない。王子の望みをかなえるために。国を守るために。

そのくらい……王子様のことを愛していたんだろうから。

……まあ、そのゴフィーは今、僕の腕の中でひーひー言ってるんだけども（台無し）。回想するうちにシリアスなこと思い出してきたけど……今僕の目の前にいるゴフィーは、そんなのどこに忘れて来たんだってくらいに快樂に狂っている。

フィーネと同じくらいに華奢なその体は、容易に抱え上げることができて……その肉壺の奥まで肉棒を突き入れ、突きまわして快樂をむさぼることができ……そして、僕が感じる以上の快樂が、彼女の体のなかで暴れまわっている。

……結局、最初の一回なんだからってこともあつて、鎖途中からほどいてベッドに連れ込んで普通にやることにしたんだけど……そこでも、全身で快感を表現しているゴフィーは、もうこうしてみると、どこにでもいる——かどうかはわからんけど——ちよつと敏感な体質の女の子そのものだ。

さらに彼女、普段から魔石を使つてたから……痛みに強かつた。

魔石は、命を蝕む激痛と引き換えに魔女に力を与える。それに慣れていた彼女は、破瓜の痛みくらいじゃ怯むことはなく……余計に快感に意識が行つたらしかつた。

今ではすつかり、快樂と人肌の温かみをひたすらに求めている様子である。

抱き寄せれば抱きしめ返してくるし、顔を寄せれば僕より先に唇を重ねてくるし、そのまま舌まで入れてくる。以前イゼツタにやられたのと同じように、快感が強烈すぎる

あまり、こらえようとして背中に爪立てたり、肩口にかみついたり、なんてのもやられた。

クローンゆえの体の弱さなんて感じ取れない。本能に任せてか、力いっぱい抱きしめてくるし……膣内の具合も、きゆうきゆう締め付けてきて……どこまでもやらしく、そしてたくましい。

まるで覚えてたて……いや、彼女正確にはろくに『覚えてすらいない』わけだから……これ、純粹に女としての本能か？

演技ゼロ。明らかにそんなことやってる余裕なさそう。

体中がぐぐくと快感に振るわせて、何度も何度もイって……こっちが心配になるくらいだ。

途中からなんか……自分でも『知らない、こんなの知らないいいい！』って……まあ、不安だったんだろう。正常位でつながってた時に抱きしめてきて、そのまま離さない。

子ぶりながらも形のいい胸が、ずっと僕の胸板にあたっている。

『ん、ああああ……こんなの、初めてえ……戦って、殺して、ばつかりだったから……こんなこと知らなかった、教えてもらったことなかったア……』

『はうううっ！ お、お腹の中……こっつん、こっつん、つて……すごい、自分でも、触ったことないところに……しゅご、く、気持ちイイ……っ！ じんじんする……子宮が、し

びれて……』

『ああああ、っ……くる、何かくる、こみあげてくるう……熱い、熱いのお……私、こんな……お腹が、熱い……し、がって……お腹が、赤ちゃん汁、欲しがってる……っ!』

『んやああああ! こんな、らめえ……もう、ダメになる……戻れなくなっちゃう……!』

『ごめん、知っひやったらあ……もう、あなたのこと、忘れられないのお……!』

『ごめん、なさい、——。でも、気持ち、いいの……! あなたのこと、忘れてしま……』

……ごめん、ちょっと真面目に可愛いんだけどこの娘。

『気持ちよすぎて怖い、けどやめないで』って感じですがるように抱きしめてきて……でも僕に全部ゆだねる、みたいな……やばい、以前のギャップがやばい。

そして最後の、よく聞こえなかったけど……ひよつとして、当時の『王子様』の名前?

……なんか、寝取ってしまったらしい。ごめんよ元主さん、でも、大切にするから。

しかし、さすがに未経験……フイーネの時もそうだったけど、こつちが限界に達して腔内に注ぎ込むと……そのあまりの衝撃でとうとう脳がショートしたらしい。

子宮があふれて、逆流してきた精液と愛液の混合液が、肉棒と肉壁の間から漏れ出ていく感触を味わっている間……二度、三度と大きく彼女が体を震わせた後……糸が切れ

たように力なく倒れ込んだ。

そのままやすやすと眠ってしまったわけだけ……その寝顔は、とても安らかそうだった。

で、後日……ゾフィーは、専門医から『精神的にも療養して問題なしになった』と診断をもらい、

さらに、僕の『錬金術』で、魔石で削れた寿命を修復。クローン体のももとの虚弱さも克服して、普通に人間と変わらない体を手に入れた。

そして……僕やイゼッタと同じように、このエイルシユタツトの研究所に、研究員として所属することになった。彼女もまた、ゲールによって生み出された被害者として（↑大嘘）。

まあ、当然色々と悶着あったけども……魔法に関しては、この場にいる誰よりもベテランな彼女の参戦で、研究の進むスピードはるかに速くなり、その分の恩恵を受けられることを知ったEU各国からの後押しもあって、ほぼ全て丸く収まった。

……ただ、その全てじゃない部分については……

まあ、その……あの一回で、彼女、すっかりセックスの虜になってしまったというかね？



ロツテやフィーネ同様、僕の愛人の座に収まったわけで……ロツテと交互に、時には一緒に、ベッドの上でも世話をしてくれるようになって……

いや、それについては、イゼツタ達も認めてるから問題はないんだけどさ……むしろ、色事では何にも染まってない分、これから開発していく楽しみがあるというか。

その上で、表向きの生活でも、研究熱心な上、仕事、私生活ともに甲斐甲斐しく僕に世話を焼く感じになって……新人だから一生懸命だ、ってレベルを通り越して……

いや、そぶりはぱつと見、今までと何ら変わらないんだけど……細やかな心配りができるようになってるといふか……こう、過度につんけんした感じもほとんど鳴りを潜めて、すつかり丸くなつちやつて……クールな部分がちよつと残ってるだけに。むしろ個性としてちょうどいい感じ？

……何ていうかな、夫に尽くす新妻、みたいな感じになった。

『ホントにもう、しょうがない人ね』とか言ってるし。

……ひよつとしたら、昔の『王子様』から寝取ったことに起因するのもかも。

ずっと心に残ってたしこりが取れて、新たに一緒に生きていく人ができて……今度はこの人と一緒に生きて行こう、みたいに思い始めた、とか。

……やけに具体的だな、って？

……自分もそうだったからわかる、ってイゼツタが言ってたんだよ。

王子様とか、昔の恋とかはわかんないけど……『この人と一緒に生きていこう』って  
思える人ができた嬉しさとかは、身をもって知ってる、ってさ。

……ホントに何というか……僕の周りには、僕にはもつたないくらいにいい娘が集  
まるな……男として、身の引き締まる思いだよ。